

上中丸遺跡（第2次）

—中丸地区土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

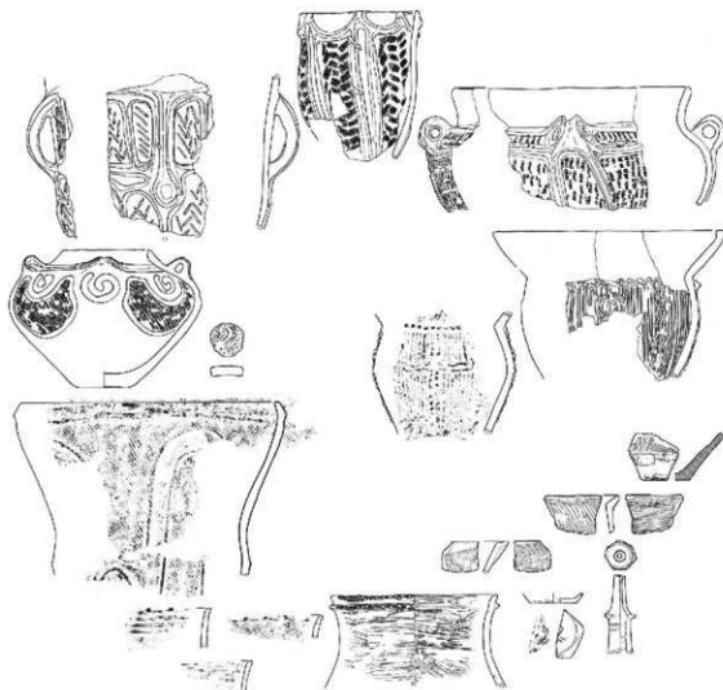


2012

富士吉田市
富士吉田市教育委員会
(公財)山梨文化財研究所

上中丸遺跡（第2次）

—中丸地区土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—



2012

富士吉田市
富士吉田市教育委員会
(公財)山梨文化財研究所



1. 上中丸遺跡からみた富士山



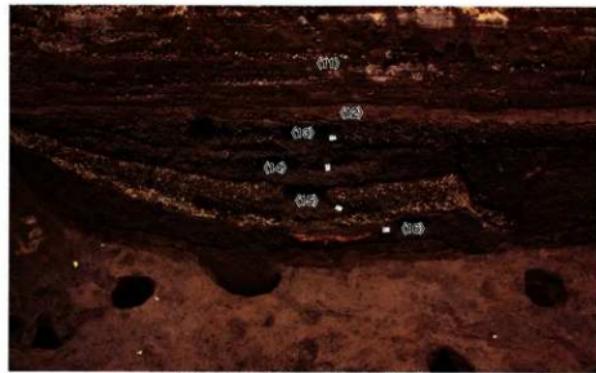
2. 調査区全景



1. C区西壁 榛丸尾第1溶岩流による焼土およびテフラ土層



2. 同上



3. 壁穴住居 (SI5) 内テフラ堆積状況



4. C区東壁



5. 火山弾 出土状況

発刊にあたって

本書は、中丸地区土地区画整理事業に伴う道路建設地内である上中丸遺跡で平成23年度に行われた発掘調査成果をまとめたものです。この調査は、平成19年度に本市教育委員会が行った発掘調査に引き続くものであり、今回の調査で、この開発事業に伴う発掘調査は全て終了しました。

調査主体である公益財団法人山梨文化財研究所が、綿密な調査を行った結果、富士山の火山灰で埋没した縄文時代中期の竪穴住居跡、県内でも発掘事例が少ない弥生時代前期の土器、寺院で使われる特殊な器である平安時代の淨瓶など、貴重な発見が相次ぎました。

中でも注目されるのは、縄文時代中期における活発な富士山の火山活動下でも、往時の人々がその火山災害を避けつつ繰り返し生活を営んでいたことが明らかになったことです。具体的には、先述した火山灰で埋没した竪穴住居跡は火山灰降下前には廃絶されており、直接の被害を受けていないことや、この火山噴火から程なくして、火山灰を掘り抜いて土坑を造るなどして再居住をしていることが判明しています。更に、富士山の災害はこれで終わりではなく、この再居住から間もなくして、火碎流～火碎サード若しくは土石流が流下しており、その厚さは1mにもなります。しかし、その災害が収まると、再び生活を再開しており、富士山の火山活動が活発な中でも、その災害に臨機応変に対応して、富士山麓に暮らし続けたことが分かります。

こうした富士山の火山災害の痕跡など多くの成果を収めた本書が、本市のみならず富士山麓の歴史を考えていく上で、その一助となれば幸いと考えます。

最後に、調査を実施された公益財団法人山梨文化財研究所と調査担当者及び調査、整理作業に従事された方々に深甚なる敬意と感謝の意を表するとともに、調査にあたってご協力いただいた関係者、関係機関に感謝の意を表する次第であります。ここに厚く御礼申し上げるとともに、今後も一層のご協力を賜りますようお願い申し上げ、発刊のことばといたします。

平成24年9月15日

富士吉田市教育委員会

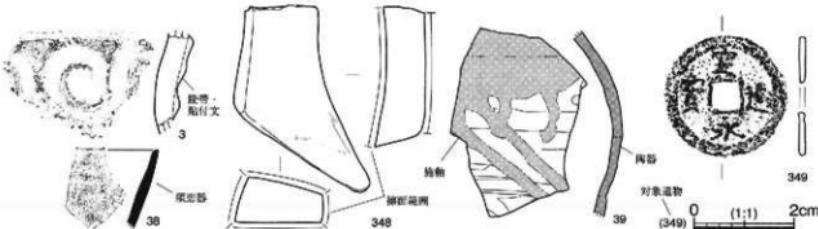
教育長 秋山勝彦

例　　言

1. 本書は山梨県富士吉田市小明見に所在する上中丸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は中丸地区土地区画整理事業に伴う本調査であり、富士吉田市より委託を受けた財団法人山梨文化財研究所（2012年4月より公益財団法人山梨文化財研究所）が発掘調査および整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、平成23年8月7日より同年11月15日まで実施し、整理作業は平成24年9月まで実施した。
4. 本書の執筆は、第4章を松元美由紀、高橋 敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）、第5章を中山誠二（山梨県立博物館）、その他を望月秀和が行い、編集および遺構・遺物の写真撮影は望月が担当した。
5. 発掘調査における基準点測量、ポール写真撮影、全体図作成業務を㈱テクノプランニングに委託した。
6. 本書に関わる出土品・記録類は、富士吉田市教育委員会で保管される。
7. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げる。
上杉 阳 篠原 武 中山誠二 植月 学 保坂康夫 岡野秀典 村松佳幸 杉本悠樹 稲垣自由 阿部昭典 土屋
健作 河西 学 櫻原功一 富士吉田市教育委員会 富士吉田市都市基盤部 富士吉田市歴史民俗博物館 古代甲斐
国官衙研究会（順不同、敬称略）。

凡　　例

1. 本書におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯 36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図中の方位はすべて座標北を示している。
2. 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。その他、各図版中にスケールを示している。
堅穴建物跡（SI）：1/60　土 坑（SK）：1/30　溝状遺構（SD）：1/40　ピット（Pit）：1/20
土器・須恵器・陶磁器類：1/3　石器：1/2（小型品は原寸大）
3. 本書の遺物掲載番号は、実測図、写真図版、出土位置を示したドットの番号全てを一致させている。
なお、調査・整理記録と対応させるため、観察表には取り上げ番号および実測番号を合わせて掲載した。
4. 遺構図版中の遺物点をつなぐ実線は接合した2点の接合関係、破線は同一個体である可能性を示す。
5. 遺構図版中に示した遺物ドットは、各図版に凡例を示した。
6. 遺物実測図の表現については以下の通りである。
遺物実測図の断面中に示した破線は接合部（隆起・貼付文など）、黒色ベタは須恵器、グレーは陶器類、外側面のトーンは施釉、断面外側の実線は擦り面の範囲、薄い破線は施釉の範囲を示している。
なお、図版中で縮尺を変更した遺物については、別スケールを付け、（）内にその番号を示した。



7. 土色観察には、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』（2006年度版）を使用した。
8. 本書図版中に使用した元地図は以下のとおりである。
第1図 『富士吉田市都市計画基本図』 No.12・13 平成8年発行
第4図 1/200,000 地勢図『甲府』 国土地理院 平成17年7月1日発行
第5図 1/25,000 地形図『富士吉田』 国土地理院 平成20年12月1日発行
9. 第1～3・6章の引用・参考文献については、第6章の文末にまとめた。

目 次

例言・凡例

日次

表目次

図版目次

写真図版目次

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	4
第4節 基本層序と遺構確認面について	6

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	10
第2節 歴史的環境	10

第3章 調査成果

第1節 各調査区の遺構確認面と時期について	15
第2節 発見した遺構・遺物	22
(1) 平安時代の遺構・遺物	22
(2) 弥生時代の遺構・遺物	24
(3) 縄文時代の遺構・遺物	30
(4) その他の遺構	46

第4章 上中丸遺跡出土炭化物自然科学分析報告

I . 放射性炭素年代測定	73
II . 炭化種実同定	74

第5章 山梨県上中丸遺跡の植物圧痕の同定

1 分析資料	77
2 分析手法	77
3 分析結果	79
4 小結	79

第6章 総括

第1節 遺構の変遷について	80
第2節 検出した遺構・遺物について	83
第3節 上中丸遺跡周辺における遺跡の変遷について	85

おわりに

表目次

表1 テフラ・土層観察・対応表	7	表8 出土遺物観察表（石器・石製品類・古錢）	57
表2 遺構検出面および土層時期一覧	10	表9 出土遺物計量表	57
表3 周辺遺跡一覧	14	表10 放射性炭素年代測定および暦年較正結果	74
表4 B区旧河道 出土遺物表	18	表11 炭化種実同定結果	76
表5 検出遺構一覧（堅穴住居跡・土坑）	33	表12 上中丸遺跡圧痕一覧	79
表6 検出遺構一覧（ピット）	35	表13 各調査区・遺構別出土遺物重量一覧	83
表7 出土遺物観察表（土器・陶磁器類）	51	表14 出土遺物重量・取上点数比率一覧	83

図版目次

第1図 調査区位置図	2	第27図 SD 1～3	49
第2図 調査区全体図	3	第28図 SD 4・近代溝	50
第3図 基本層序	9	第29図 出土遺物〔A区〕	57
第4図 遺跡の位置	11	第30図 出土遺物〔B区旧河道〕	58
第5図 周辺の遺跡	13	第31図 出土遺物〔SI 1・SI 2①〕	59
第6図 A区全体図	17	第32図 出土遺物〔SI 2②〕	60
第7図 B区全体図	18	第33図 出土遺物〔SI 2③〕	61
第8図 B区旧河道	19	第34図 出土遺物〔SI 3・SI 4・SI 5〕	62
第9図 C区全体図①	20	第35図 出土遺物〔SK 1〕	63
第10図 C区全体図②	21	第36図 出土遺物〔SK 2①〕	64
第11図 SI 1	22	第37図 出土遺物〔SK 2②・SK 4・SK 6〕	65
第12図 SI 4	23	第38図 出土遺物〔SX 1・SX 2・SX 3①〕	66
第13図 SI 2①	25	第39図 出土遺物〔SX 3②〕	67
第14図 SI 2②	26	第40図 出土遺物〔SX 3③〕	68
第15図 SI 2③	27	第41図 出土遺物〔SX 3④〕	69
第16図 SI 3	29	第42図 出土遺物〔SX 3⑤・SD 1・SD 4〕	70
第17図 SI 5	31	第43図 出土遺物〔遺構外①〕	71
第18図 SK 1・2	32	第44図 出土遺物〔遺構外②・石器・石製品・古銭〕	
第19図 SK 3～6、Pit 95・96	34		72
第20図 ピット①	36	第45図 大型植物遺体	76
第21図 ピット②	37	第46図 上中丸遺跡の庄庭土器	77
第22図 ピット③	38	第47図 上中丸遺跡土器庄庭	78
第23図 SX 1・2・4	40	第48図 編年別土器出土状況図	81
第24図 SX 3①	41・42	第49図 施文技法（繖齒刺突・条線・ハの字文）	84
第25図 SX 3②	43・44	第50図 施文技法の分類	85
第26図 遺物出土状況図	47・48	第51図 桂川流域遺跡分布図	86

写真図版目次

図版1 調査区周辺景観、調査区空撮	図版16 調査風景など
図版2 調査区状況	図版17 出土遺物〔A区・B区旧河道①〕〔1～46〕
図版3 A区調査状況〔全景（モザイク写真）〕	図版18 出土遺物〔B区旧河道②、SI 1・SI 2①〕〔47～88〕
図版4 A区調査状況／B区調査状況 〔全景（モザイク写真）〕	図版19 出土遺物〔SI 2②〕〔89～128〕
図版5 B区遺構・遺物出土状況〔旧河道〕	図版20 出土遺物〔SI 3～5、SK 1〕〔129～163〕
図版6 B区遺構・遺物出土状況〔旧河道堆積状況〕	図版21 出土遺物〔SK 2・4〕〔164～194〕
図版7 C区調査状況〔全景（モザイク写真）〕	図版22 出土遺物〔SK 6・SX 1・2・SX 3①〕〔195～207〕
図版8 C区調査状況〔SD・近代溝・C区近景〕	図版23 出土遺物〔SX 3②〕〔208～234〕
図版9 C区遺構・遺物出土状況〔SI 1・2〕	図版24 出土遺物〔SX 3③〕〔235～259〕
図版10 C区遺構・遺物出土状況〔SI 2・3〕	図版25 出土遺物〔SX 3④〕〔260～284〕
図版11 C区遺構・遺物出土状況〔SI 4・5〕	図版26 出土遺物〔SX 3⑤・SD〕〔285～311〕
図版12 C区遺構・遺物出土状況〔SK 1・2〕	図版27 出土遺物〔遺構外〕〔312～342〕
図版13 C区遺構・遺物出土状況〔SK 2～6・SX 1〕	図版28 出土遺物〔石器・石製品・古銭等〕〔343～350、溶岩〕
図版14 C区遺構・遺物出土状況〔SX 2・3〕	
図版15 C区遺構・遺物出土状況〔SX 3〕	

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

今回の調査の調査原因は、富士吉田市が同市小明見に所在する上中丸遺跡地内において計画した中丸地区土地区画整理事業に伴う道路建設である。本件に係る埋蔵文化財発掘調査としては、まず計画が具体化した平成18年に、富士吉田市教育委員会によって試掘調査、および翌19年に第1次本調査として北区（平成19年7月17日～平成20年1月10日）・南区（平成20年1月15日～2月29日）で実施されていた。今回の第2次本調査については平成22年10月頃に照会があり、北区と南区の間の未調査部分を対象とし、文化財保護法94条の届出が平成23年4月7日に富士吉田市長名で富士吉田市教育委員会へ提出された（富23都整發第1号）。それを平成23年4月12日に富士吉田市教育委員会教育長名で山梨県教育委員会へ進達（富23歴文發第21-2号）し、その届出に対して平成23年4月15日付けで県から発掘調査が必要である旨の通知（教学文第230号）を受け、本調査の実施に至った。

調査にあたっては、富士吉田市、富士吉田市教育委員会、財団法人山梨文化財研究所の三者で協定を締結し、財団法人山梨文化財研究所が実施した。なお、2012年4月より公益財団法人山梨文化財研究所となり、引き続き発掘調査整理報告業務を行った。調査体制については以下のとおり。

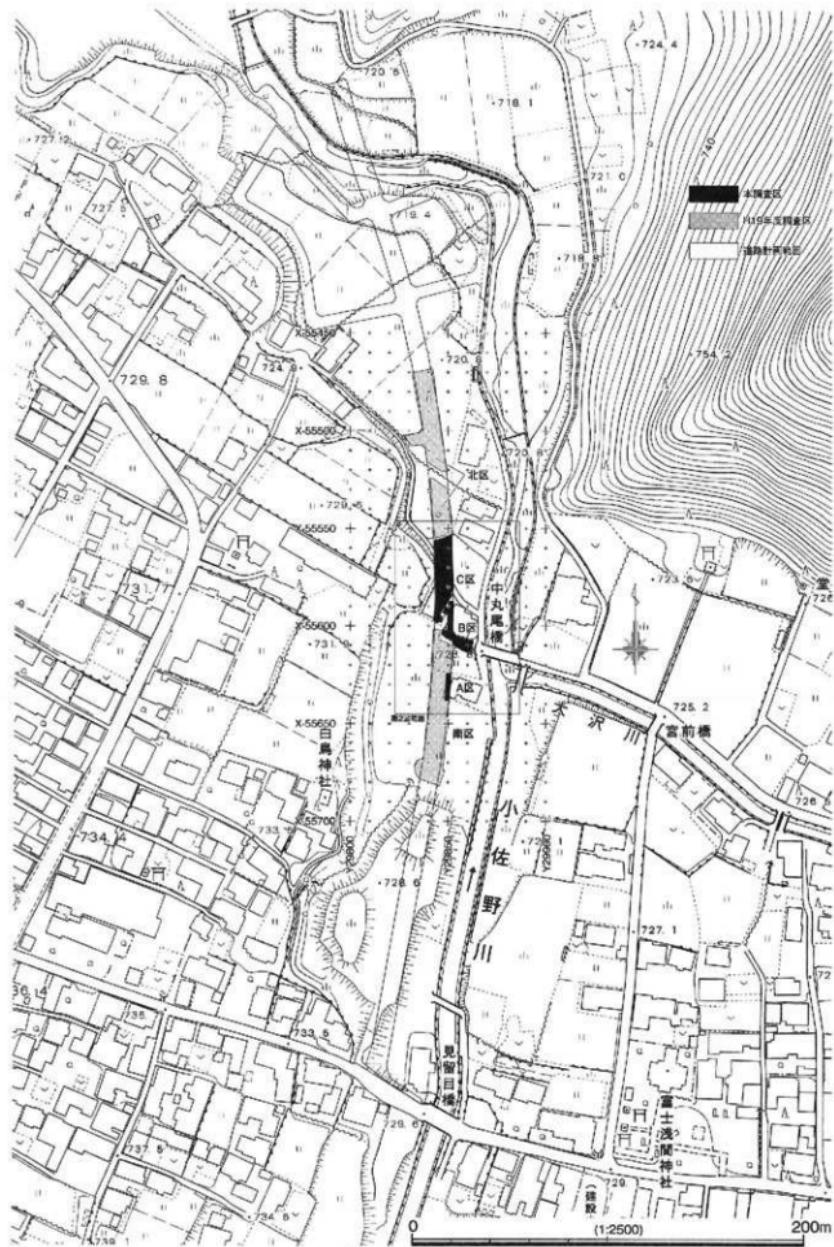
調査体制

調査主体	財団法人山梨文化財研究所（2012年4月1日より、公益財団法人山梨文化財研究所）
調査担当者	望月秀和【財団法人山梨文化財研究所 調査員】（同上）
発掘調査参加者	天野智子、太田久義、金井茂晴、川添重人、塩見徹男、須田旭、筒井聰、中村郷子 深沢政人、堀内知子、渡辺辰雄 〈都留文科大学〉 間中愛、設楽なつみ、渡辺智子、山下翔平、近秀彦、関征寛 〈多摩美術大学〉 櫛原織江
整理作業参加者	櫛原ゆかり、須田泰美、藤原五月、古郡明、山下詩雅、筒井聰、中村郷子 間中愛、設楽なつみ、渡辺智子、山下翔平、近秀彦、関征寛、櫛原織江
事務局	柳本千恵子、横田杏子

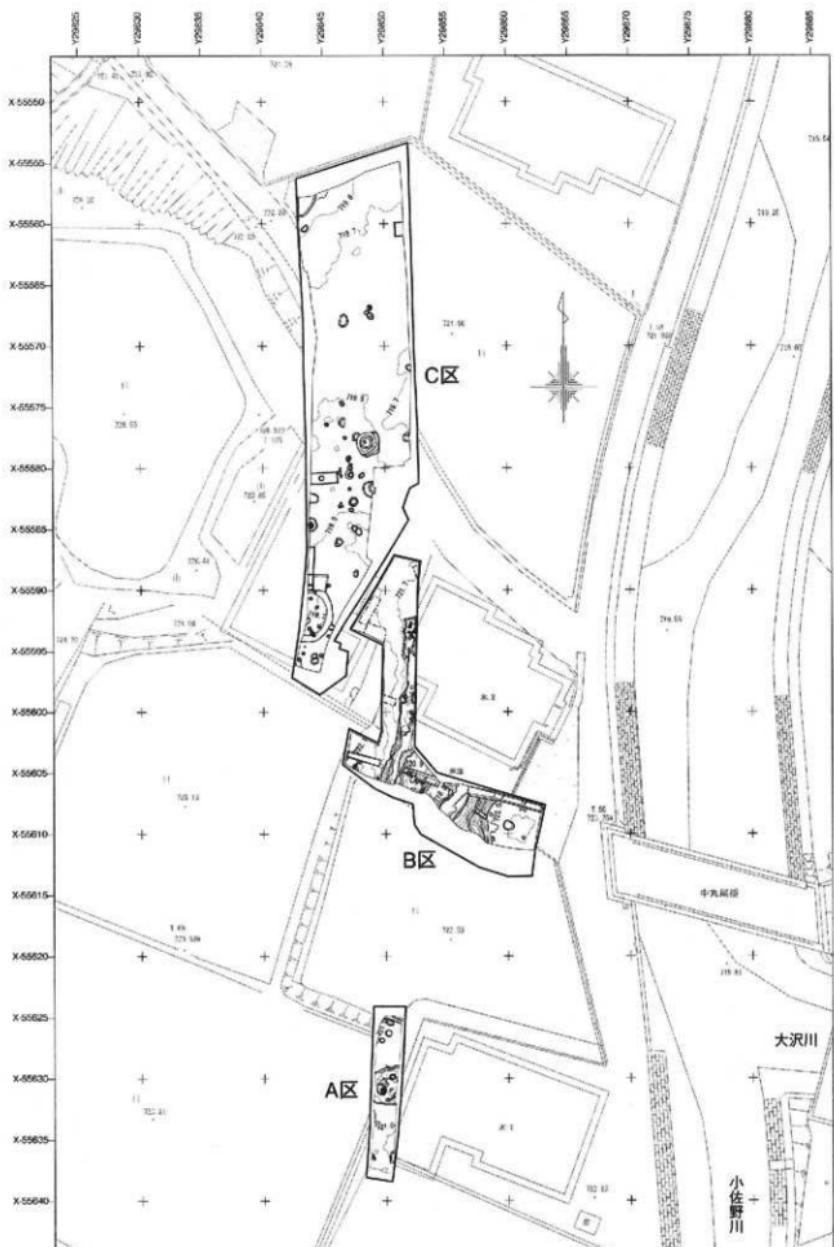
第2節 調査の方法

今回の調査は、上中丸遺跡地内における土地区画整理に伴って敷設する道路部分、約619m²を調査対象とした。前述のとおり、平成19年度調査の北区と南区の間の未調査部分にある。調査区については、調査開始後に対象範囲内に水道管・下水道管が埋設していることが判明したため、市教育委員会・都市整備課との現地協議を行い、調査対象地から管の通った範囲を除外した都合A・B・C区の3区画を調査することになった。A区は平成19年度南区の北東隅に隣接する未調査範囲、B区は中丸尾橋へ向かう道路敷設部の南北区画と配管の保護のためC区と隔てられた南北区画のL字型の範囲、C区は槍丸尾第1溶岩の東端に沿った南北に長い区画を調査した。なお、B・C区の境にあった電柱周辺も保護範囲として調査区から外したことから、調査面積は約490m²となった（第1・2図）。

調査は試掘および平成19年度の市教育委員会が実施した上中丸遺跡の調査成果から、当初より平安時代・弥生時代・縄文時代晚期・縄文時代中期の4面で造構確認を実施する計画で開始した。表1および各面までの掘削は、調査成果を元に各調査区ごとに考察しながら、重機による掘り下げと人力による造構確認を実施した。なお、発掘作業にあたっては事前ミーティングで調査参加者への安全指導を実施した他、調査区には発掘調査の実施を示す看板の設置とともにバリケードやロープを用いて保全し、周辺住民の方々へは調査概報を配布して周知を行うなど、調査中の安全配慮に努めた。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区全体図

0 (1:400) 20m

発見した遺構・遺物の記録については、遺構断面図の作成、基本層序および遺構埋土の観察記録、光波測量による平面図作成、遺物の3次元記録、簡易図化システムによる写真測量を実施したほか、テクノプランニングによるポール撮影、ラジコンヘリによる航空撮影での写真測量をあわせて実施した。なお、今回の調査で用いた測量機器および図化・記録システムは以下の通りである。

光波測量機器 /TOPCON GPS - III

コンピュータ /Panasonic TOUGHBOOK

取り上げ・図化システム /CUBIC 社製 遺構くん

簡易図化システム (カメラ) /Canon 50D+EF レンズ 20mm

第3節 調査の経過

今回の調査は平成23年8月5日から調査の事前準備に取り掛かり、基準点の設置、周辺住民へ調査実施についての周知、調査機材・プレハブ等の搬入などを行った。8日より重機による掘削を開始し、着手報告は平成23年8月12日に富士吉田市教育委員会教育長名で提出した（富23歴文発第200号）。

前述のとおり、発掘調査は4面の遺構確認を実施する計画で開始し、また都合3区画を調査することになったが、これまでの成果と掘削した状況を考察しながら段階的に調査を進めた。最終的にはA区3段階、B区2段階、C区5段階の遺構確認を行い、調査面積は延べ1400m²となった。

本遺跡は厚い火山灰に覆われた土壤のため、各時代の確認面までの掘り下げには重機を使用しながら調査を進めなければならず、3調査区同時に着手することになった。しかし、各調査区ごとに状況を考慮しながら段階的に進めることができた結果、縄文時代中期末の遺構面を検出することができたといえる。今回の調査では、重機による掘削が調査の進展状況を示す段階的な指標になったことから、これに合わせて発掘調査の経過を示すことにする。

調査経過

重機による1回目の掘削 各調査区の表土剥ぎを実施した。堆積状況からA区全体とB区の大半は埋没した河道であることが判明し、またC区北側は水田（もしくは河川による削平）によって弥生時代の土層面まで掘削されていることが明らかとなった。平安時代の土層面が確認できたのはC区南端のSII周辺のみであった。それより北側ではSI4以外に弥生時代よりも新しい時代の生活面は確認できず、古墳時代に流出したとする檜丸尾第1溶岩流や、河川（大沢川）の影響によるものと推定した。また、この段階で檜丸尾第1溶岩流による焼土層が確認できたことから、市教委担当者との協議により、調査とあわせて火山灰分析を実施することになった。

重機による2回目の掘削 A区では縄文時代の土層面までの掘り下げ、B区では河床部の確認、C区では弥生時代の土層面までの掘削を行った。B区と同様に旧河道と推定したA区であったが、H19年度の調査深度まで掘り下げたものの、遺物の出土は少量であった。C区ではSI2・3とした弥生時代前期の土器片が集中する遺構を確認した。また、弥生時代よりも新しい時代の面は確認できなかったC区北側では、平安時代の堅穴住居跡（SI4）を検出した。なお、同段階の面でも縄文時代中期の遺物が散在したが、河川の影響によるものと推定した。

重機による3回目の掘削 C区の縄文時代の土層面までの掘削を行った。遺物は少なく、明確な遺構は確認できなかった。人力による精査で加曾利E4式の深鉢片〔202〕(SX1)の出土と、これを包含していた基10層が北側へ落ち込んでいく状況（後に下層の基11層面の堆積の違いと判明）を確認した。この落ち込みにサブトレを設定して掘り下げたところ、砂質土中に遺物が散在する状況(SX3)を確認した。

重機による4回目の掘削 B区で河床下の土層確認と、C区でSX3の掘り下げを行った。SX3については曾利V式段階を主体とする遺物が出土し、大半は人力で掘り下げた。なお、B区河床下の土壤観察では2層目の火碎サージ推定層を確認することができた。またC区北側の東壁際に設置したサブトレから曾利II式

上中丸遺跡発掘調査日誌

月日	作業内容	累積
7/15	事前打ち合わせ① 研究所	
7/25	現地打ち合わせ	
7/27	事前ミーティング① 歴史民俗博物館	
7/29	事前打ち合わせ② 研究所	
8/3	事前ミーティング② 歴史民俗博物館	
8/5	現地踏査区段り出立機材搬入開始 作業員打ち合わせ③ 歴史民俗博物館	
8/8	調査実施用辺縁機器（プレハブ設置場所の整地水道・下水設置樋 敷設部）A区段下り下げ	0.45
8/9	A区積み 写真撮影 荷物搬入	0.45
8/10	A区 分割作業 B区 布設、写真撮影C区表土剥がし、検査開始 標準化用機器搬入① 沿岸部の火山灰層を確認	0.45
8/11	C区 セクション実施B区 道路取り上りC区 検査	0.45
8/12	A区 セクション②B区 検査 C区 新規遺物取り上げ、全般写真引換出	0.45
8/16	C区 地盤取扱い、転圧確認	
8/18	C区 地盤取扱い、転圧確認、赤松原、赤松原出土位置検査、断面確認 市街地と現地確認を行なう部分を確認していただく	
8/19	C区 説明書き、近世消滅削、セクション写真記録	
8/22	作業休み	
8/23	C区 機械抜き、近代消滅削、セクション実施	
8/24	C区 近代消滅削セクションC区南側サブトレセクション A区 解説文除去	
8/25	雨天、現地整理作業	
8/26	B・C区 積み	
8/29	B・C区 検査SI1・SD1確認	
8/30	B・C区 検査SI2確認	
8/31	B・C区 検査振り下げ	
9/1	台風対策現場確認	
9/2	雨天のため作業中止	
9/6	現場確認、室内基礎整理	
9/6	B・C区荷物振り下げ	
9/7	B・C区 遺構振り下げ	
9/8	A・B・C区 振り下げSI3基盤SI1実施 ボール測量による各測量用具 B・C区 振り下げ	0.15
9/9	市担当者に浮磧式済と車両通行止めを確認してもらう	0.15
9/10	B・C区 振り下げ	0.15
9/12	B・C区 振り下げ	
9/13	B・C区 振り下げ SD2・3 (S01) 親しき) 確認	
9/14	B・C区 振り下げ C区 旧河原床を確認	
9/15	B・C区 振り下げ	
9/16	A区 トレーシング撮影 B・C区 振り下げ	
9/19	B・C区 振り下げ	
9/20	雨天室内整理 見学会打ち合せあり	
9/21	雨天室内整理	
9/22	C区 精査 SD4確認	
9/24	C区 海溝・検査 SI2・3実施	
9/25	C区 底塙・検査	
9/26	ボール測量による各測量用具	
9/27	A・B区 車輌搬入 C区 送搬機器下けA4確認	
9/28	A・B区 実機搬出計画変更下地確認 C区 送搬機器下け	
9/29	C区 量測器具 SI1・SI2引出	0.45
10/1	量測器具 A区 振り下げB区旧河原床の底し	0.45
10/3	A・C区 商賣品A区新規と平安時代の遺物が混在する落ち込み確認 B区 北端地盤打ち前り	
10/4	A区 遺構消失C区 検査 上層分析用具（上杉式現遺調査） 雨天半日作業休憩	
10/5	雨天半日作業休憩 C区 検査、遺構振り下げ 建設の片手（木板跡か）検出	
10/6	C区 検査、遺構振り下げ 建設の片手（木板跡か）検出	
10/7	A区 検査、遺構振り下げ	

月日	作業内容	累積
10/12	C区 検査、振り下げ C区 ボール測量による写真測量 地盤走査結果日程決定	
10/13	A・C区 振り下げ	
10/14	A・C区 振り下げ A・C区 検査は河川地盤の一部と断定C区SX3確認	
10/17	A・C区 振り下げ C区 SX3は自然流路の一部と断定	
10/18	A・C区 振り下げ A区 完成	
10/19	C区 振り下げ	
10/20	C区 振り下げ	
10/21	C区 振り下げ	
10/24	C区 北端部、裏機による振り下げ	0.15
10/25	C区 北端部、裏機による振り下げ C区 検査部	0.15
10/26	C区 振り下げ アートレントで探査を確認	
10/27	C区 振り下げ	
10/28	C区 振り下げ見学会準備	
10/29	見学会（参加者80名） 午後、SI2・3実機取り上げ、実測	
10/31	C区 振り下げ	
11/1	C区 振り下げ	
11/2	C区 振り下げSI3完成 調査全員ラジヘリ準備測量（テクノプランニング）	
11/4	A区走めしBB→一部根め夷しC区底盤振り下げ	0.45
11/5	砂場振り下げ	0.45
11/7	幼魚、遺物振り下げ、実測	
11/8	遺物振り下げ、実測 SI5、SI6、SI7確認	
11/9	遺物振り下げ、実測→一端板による写真測量 上端前骨取りSI4→光触	
11/10	SI5骨柱骨取り終了後、底め夷し実機確認完了 SI5底め夷骨柱、トライ引上げ	0.45
11/11	駆除作業、遺物整理 ブレハブ引き上げ	0.45
11/13	組め況	0.45
11/14	島め夷遣法洗浄開始	0.45
11/15	熟成泥濘、遺物確認洗浄、データ整理 舟型窓観、作業完了	
11/16	壁作業開始	
11/18	巡回確認、データ修正、遺物洗浄	
11/17	遺物洗浄、データ修正、整理	
11/18	瓶蓋洗浄作成	

段階の遺物が確認できたことから、さらに下層に遺構が存在する可能性が生じた。

重機による5回目の掘削

最終面の調査では、C区の調査状況を考慮して再度A区の掘り下げを実施した。A区では明確な遺構とは判断できなかつたが、縄文時代の遺物が混在する落ち込みと、平安時代の土師器が混在する土坑上の落ち込みを確認した。C区では縄文時代中期の竪穴住居跡1軒、土坑6基を検出した。今回の調査では計画より1回多く遺構確認を実施したため、予定していた重機使用量、写真測量回数を超えることになった。費用に関しては予算枠内で調整し、調査期間のみを延長したこと、平成23年11月16日に発掘調査を終了した。

その他、各調査の時期や期間等の詳細については、前頁に掲載した調査日誌を参照されたい。

整理報告

現場作業終了後より基礎整理として出土遺物の洗浄・分類、遺構・遺物データの整理・保管作業を開始した。これとあわせて調査概要報告書をまとめ、平成23年11月28日付けで市教育委員会へ提出した。調査後の手続きについては、市教育委員会教育長名で富士吉田警察署へ埋蔵文化財発見届（富23歴文発第298号）を平成23年11月21日に提出し、同じく山梨県教育委員会へ埋蔵文化財保管証（富23歴文発第299号）を平成23年11月21日、調査終了報告（富23歴文発第315号）を平成23年12月6日付けで提出した。

報告書の作成にあたっては、遺物の洗浄・注記・接合・実測図作成・写真撮影、遺構図の編集・図版作成、報告書原稿執筆・編集作業と順次実施した。今回の調査では、調査期間の延長や榎丸尾第一溶岩流下および市内初の検出事例となつた縄文時代中期後半の竪穴住居跡から炭化物が採取されたことから、年代分析と富士火山灰のテフラ分析等をあわせて実施したことで、作業期間を平成24年9月28日までとする変更契約を行つた。なお、2012年4月からは公益財團法人山梨文化財研究所となり、引き続き整理報告業務を実施して平成24年9月15日に本報告書を刊行した。

その後、報告書の発送作業等を行い、平成24年9月28日までに調査に係るすべての業務を終了した。なお、埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属については、平成23年12月5日付け教学文第2298号で山梨県教育委員会から富士吉田市教育委員会教育長宛に通知された。今後は調査記録とともに富士吉田市教育委員会で保管される予定である。

第4節 基本層序と遺構確認面について

本調査における基本層序は、テフラ分析の所見を基に23段階（盛土層を除く）とし、これに現場観察の所見を対応させた。現場での土層観察については、河川と熔岩流の影響から各地点で様相が異なつたため、調査後整理作業において観察記録とテフラ分析の成果の対応関係について精査・検討し、第3図と表1にまとめた。テフラ分析と現場観察においては、対応する層序の土色観察が異なる不備が生じてしまつたが、検出した遺構の観察記録との兼ね合いもあるためそのまま表示した。遺構確認面および各層の時期については表2にまとめた。

テフラ分析と基本層序について

テフラ分析については、都留文科大学名誉教授の上杉陽氏に依頼した。調査中2度にわたつて調査を実施していただき、その成果については上中丸遺跡第1次調査の発掘報告でまとめられる予定である。本書では表1で上杉氏の所見にあわせ、現場での土層観察に対応する番号を示した。現場での土層確認については、各調査区ごと、計5箇所で観察を行つた（第3図①～④、C区深掘）。このうちテフラ分析については②・③およびB区旧河道でサンプルを採取した。

基本層序については、③で確認した榎丸尾第1溶岩流を0、熔岩流によって焼土化した土層を第1層とし、上位から第17層までを付番した。②では、1よりも上位に位置する弥生時代以降の層が確認できることから、第-1層、-2層…として表記した。なお、複雑な堆積状況のため、第8層のように土層観察で10～17に細分される部分については、基本層序としたテフラ土層を『基○層』、図中等では『(○)』と表記し、対応関係を示しているので、ご留意頂きたい。

表 1 テフラ土層観察・対応表

地層番号	試料の 層厚(cm)	有無	地層の色調等	肉眼的特徴等	層厚テフラ層位	時代等など	基本 層序	COS層序 層序No
256/072-5	50±	なし	暗赤~灰紅色鉛灰岩	背景の重丸石第3帶等の岩質の殆どが人工礫層(自然風化剥離用)	21世紀	高津紀 人工的なガラス(0.5~5cm)含む	(4)	地上
256/072-4b	35±5	なし	暗赤~暗褐色焼成灰岩上に一盛土	層相質點水用陶器焼成場等などを含む	高津紀	人工的なガラス(0.5~5cm)含む	(4)	-
256/072-4a	10~25	なし	暗赤~暗褐色焼成灰岩土?	層相質點水用陶器焼成場等などを含む	高津紀	人工的なガラス(0.5~5cm)含む	(4)	-
256/072-3	7	なし	土質層からなる未固結焼成灰岩山土?	層相質點水用陶器焼成場等などを含む	S-24~7AB以降	包含する沿岸部は複数尾根に分布する、より新しい人猿骨等が発見されたではなくではな、より古い人猿骨等が発見された。一方でS-24~7ABには10cmを以降と推定されるのこと。(資料参考部)	(3)	-
256/072-2	10	有り	土質層からなる未固結焼成灰岩山土?	層相質點水用陶器焼成場等などを含む	S-24~7AB以降	包含する沿岸部は複数尾根に分布する、より古い人猿骨等が発見された。一方でS-24~7ABには10cmを以降と推定されること。(資料参考部)	(2)	-
256/072-1	10	有り	黄褐色灰白色灰土?	スコリア質火成岩等の堆積物中に、S-3~4セシナの熔岩溶岩や熔岩サイズのスコリアを含む	S-24~7AB以降	発生時代の遺物を含む(墨田区秀島町)	(1)	-
概要(7000yrs. BPの標準泥流噴出時に、木戸駒ヶ岳が爆発した水を除く)。								
256/071-0	350±	なし	普通灰褐色	最大で2m間隔で現れ、当時の地形が判別され、いくつもの小凹地が形成された。	S-21.3	鶴見尾根 1 鷺宮(100yrs. BP前)	(0)	0
上半段は粘土層で、下段は砂層である。								
256/071-1AB	20	有り	有り	上段は粘土層で、下段は砂層である。また、局地的に剥けた状態の地盤起因が認められる。上部は砂層で、下部は粘土層である。	S-3~2~1	鶴見尾根 2~3 鷺宮(100yrs. BP前)	(1)	1.2
主として砂層が現れ、下部は粘土層である。								
256/071-2	5	有り	暗褐色~黒褐色(7SYR2~3の色)	地表は5cm、並みの粒径5~1mm。黒色スカリア、赤褐色スカリア、赤褐色スカリアなどと合る。	S-24~1-S-23.1~2	鶴見尾根 2~30年後、東毛代中間から中期	(2)	3
下半段は粘土層である。								
256/071-3	18	有り	有り	黒褐色灰土?	S-22~S-18?	鶴見尾根 30~300yrs. BPまで?	(3)	4
主として砂層である。								
256/071-4	14	有り	暗赤~暗褐色(7SYR2~3の色)	地表は5cm、並みの粒径5~1mm。黒褐色スカリア、赤褐色スカリア、赤褐色スカリアなどと合る。	S-7~16	鶴見尾根 4~100yrs. BPの北西側斜面大空山からの出物。	(4)	5
主として砂層である。								
256/071-5	10~5	有り	やや暗褐色~暗褐色	地表は暗褐色灰質火成岩層等で構成され、上部は暗褐色	S-15~S-12?	鶴見尾根 5~100yrs. BPを経て北西側斜面大空山からの出物。	(5)	6
主として砂層である。								
256/071-6	25~15	有り	有り	主として暗褐色~暗褐色	S-10.2?~S-11?	鶴見尾根 6~100yrs. BPを経て北西側斜面大空山からの出物。	(6)	7.8
主として砂層である。								
256/071-7	20~25	有り	有り	黒褐色~暗褐色灰質火成岩土	S-10.2?~S-11?	鶴見尾根 7~100yrs. BPを経て北西側斜面大空山からの出物。	(7)	9
主として砂層である。								

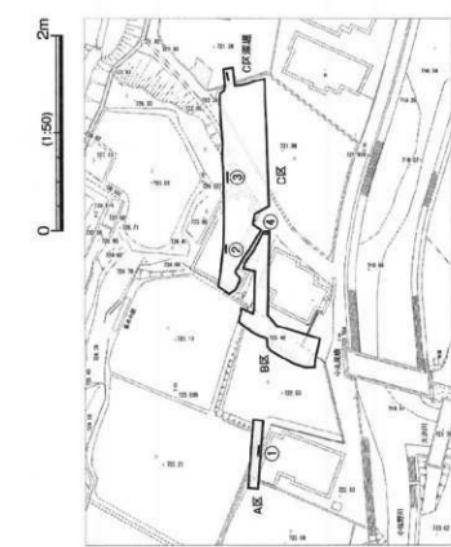
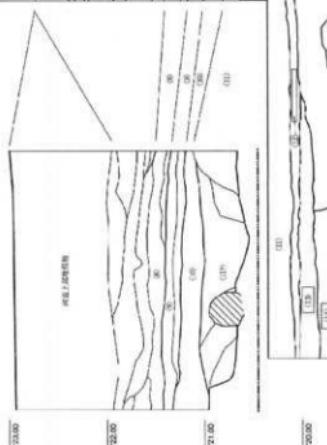
地番番号	層厚(cm)	試料の有無	地層の色調等	内部の特徴	指定アラ層位	地層アラ層位	層序	C区段終定番No.
時代など								
256.071.8	100前後	有り	灰色～灰黑色～暗褐色火山灰岩 砂質互層	大きくなじはるY位よりA-Fまでロコリニアト～壁面に沿う、奥へ落葉、葉状の薄い多孔質の表面があり、表面には、微細な凹凸が並ぶ。これでこの部分は薄い葉状である可能性が高い。これが、この部分がY位の上位に、他の薄い葉状である可能性がある。	標準31000m BOP 壓縮空気による吹き出し用テフラで覆われた。北端ではY位に覆くで他の薄い気孔～隕石孔などの吹き出しがある。これはセージ堆積物などで吹き出されたものであろう。	S11～17	(8)	-
256.071.9	25～10	有り	褐色褐色(?)Y位付近の有 鉱質火山灰土	褐色～灰黑色～褐色褐色火山灰岩、スコリニアト～斜長石富晶凝灰岩 鉱物スパター・鉱物スパター・鉱物スコリア・斜長石富晶凝灰岩の鉱物を含む	標準32000m BOP 以前、礫文時代後期蕭条中に当地 を経る。	S9～7?	(9)	18
256.071.10	15～25	有り	黒褐色～褐色(?)Y位～3～4cmの層 まつた火山灰土	黒褐色火山灰(?)10cm前後中に、富士系の極度富晶凝灰岩 孔スコリニアト～鉱物を含む。	標準32000m BOP 以前、礫文時代後期蕭条中に当地 を経る。	S6～2～4	(10)	19
256.071.11	100+	なし	灰褐色～褐色 鉄色系藍色～褐色互層	平行層～斜交巻曲面で構成される多層岩および岩層帶である。則巻形層帶がある。一部は厚20～10mmの層間スコリニアト～構成される。	標準32000m BOP 以前、礫文時代後期蕭条中に当地 を経る。	S6～2～4	(11)	20
256.071.12	10～0	有り	灰褐色～褐色火山灰	下部は巻曲層を含む巻曲砂シルト層のややかみが残る灰褐色 用粘土灰火成堆跡～セージ出物層等でなる可能性がある。	地表層に沿って赤色で走り、下位層を厚く走る 傾向がある。	S6～2～4	(12)	-
256.071.13	20～15	有り	青黑色～緑黑色	重く優しい青黒色～緑黑色のセコリニアト～5cm、並み の粒20～30mmのセコリニアト～やや風化化～水を吸収受けた美しい 手質地～青黒色のセコリニアト～5cm、並みの粒5～10mmが混 在す。粒大約70～70mmに達する薄い板状滑石層をも含む。なお上位は 薄い青褐色層を挟む	S6(GR II)	S6～2～4	(13)	-
256.071.14	15～0	有り	褐色	青褐色セコリニアト(?)10mm、並みの粒5～1mm)で構成され、粒上部 に薄い青褐色層を挟みセコリニアトとやや風化水を吸収 したセコリニアト～5cmの厚さ、青褐色セコリニアトとやや風化水を吸収 したセコリニアト～5cmの厚さがある。下位はセージ出物層の性 能の粒20～30mmのセコリニアト層がある。厚さ約25mm。 並みの粒5～10mm。セージ出物層は約25mm。	S5'	S5～R I	(14)	-
256.071.15	30～0	有り	青色～褐色 鉄色系藍色～褐色互層	円錐形溶岩などを含む。	S4a(F S4a(T)	S4a(F S4a(T)	(15)	-
256.071.16	35～25	有り	黒褐色～青色～褐色互層	参況位置中心	S4a(F S4a(T)	S4a(F S4a(T)	(16)	-
256.071.17	20以上						(17)	-

① AS付地図

② CZ付地図 (1)

③ CZ付地図 (2)

④ BSK付地図



第3図 基本圖序

(1) 10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。
（2）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（3）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（4）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（5）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（6）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（7）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（8）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（9）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（10）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（11）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（12）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（13）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（14）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（15）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（16）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

（17）10723.2 月 開削。鉄筋コンクリート壁柱、ドア枠柱、柱化柱。

各調査区の対応関係について

土層観察においては、第3図①・④で示すように旧流路上に堆積する褐色土層を確認した。平成19年度に実施した上中丸遺跡第1次調査南区においても旧流路の痕跡が確認されている。今回の調査では、同区に隣接したA区とともに、B区でも同様の堆積状況がみられ、同じ流路上に位置するものと推定した。①・④については、この流路跡によって基8層より上層の対応関係は判然としない。また、③・④の対応関係についても、基4層以上は流路による堆積土となっており、平安時代以降の土層面が削平されていた。最下層とした第17層については、調査成果から曾利Ⅱ式段階以前と比定したが、発掘調査の最終段階にC区北端においてさらに深堀を実施し、基16層の表層から約1.2mまで掘り下げた（第3図写真）。これについても土壤サンプルを採取し、テフラ分析を実施している。その他、詳細については表1を参照されたい。

表2 遺構検出面および土層時期一覧

出土層序	遺構検出面・時期	検出場所	出土遺物	推定テフラ層位	地層番号
⑨	C区第1面(平安時代)	SI1.S4b	平糞堆土層(10世紀)	S-21~7AB層	256.073~4
⑩	扇丸尾第1層(羽衣波(古墳時代))			S-23	256.071~0
⑪	扇丸尾第1層(羽衣波(古墳時代))			S-24~2~1	256.071~1AB
⑬	C区第2面(古墳時代前照塗)	SI2, SI3	御手式	S-23~S-18?	256.071~3
⑮	(人足スコリア層 厚さ2000yrs. BP)			S-15~S-12?	256.071~5
⑯	忍野スコリア層 厚さ3000yrs. BP.			S-11~S-12?	256.071~6
⑰	(御手式後期)	(土坑)		S-10? ~S-11?	256.071~7
⑲	大蛇マーク定層1層目		(移名寺式)	S-11~10?	256.071~8
⑳	C区第3面(古墳時代前照塗)A式段階	SK1	加曾利Ⅱ式	S-62~4	256.071~10
㉑	C区第4面(古墳時代前照塗)Ⅳ式段階~V式段階	SK2, SX3, SK1, SK4	曾利Ⅴ式古~牛段階	S-62~4	256.071~11
㉒	火焚サージ定層2層目			S-62~4	256.071~12
㉓	(下層)上に 曾利Ⅱ式古段階~曾利Ⅳ式古段階	SI5a, SK6	曾利Ⅳ式曾利Ⅱ式	S-5~R-I	256.071~15
㉔	C区第5面(古墳時代前照塗)Ⅲ(IV式)古段階	SK2, SI5b	曾利Ⅱ式(曾利Ⅳ式)	S-4B~F	256.071~16
㉕	曾利Ⅳ式古段階			S-4B~F	256.071~17

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

遺跡の位置と周辺環境

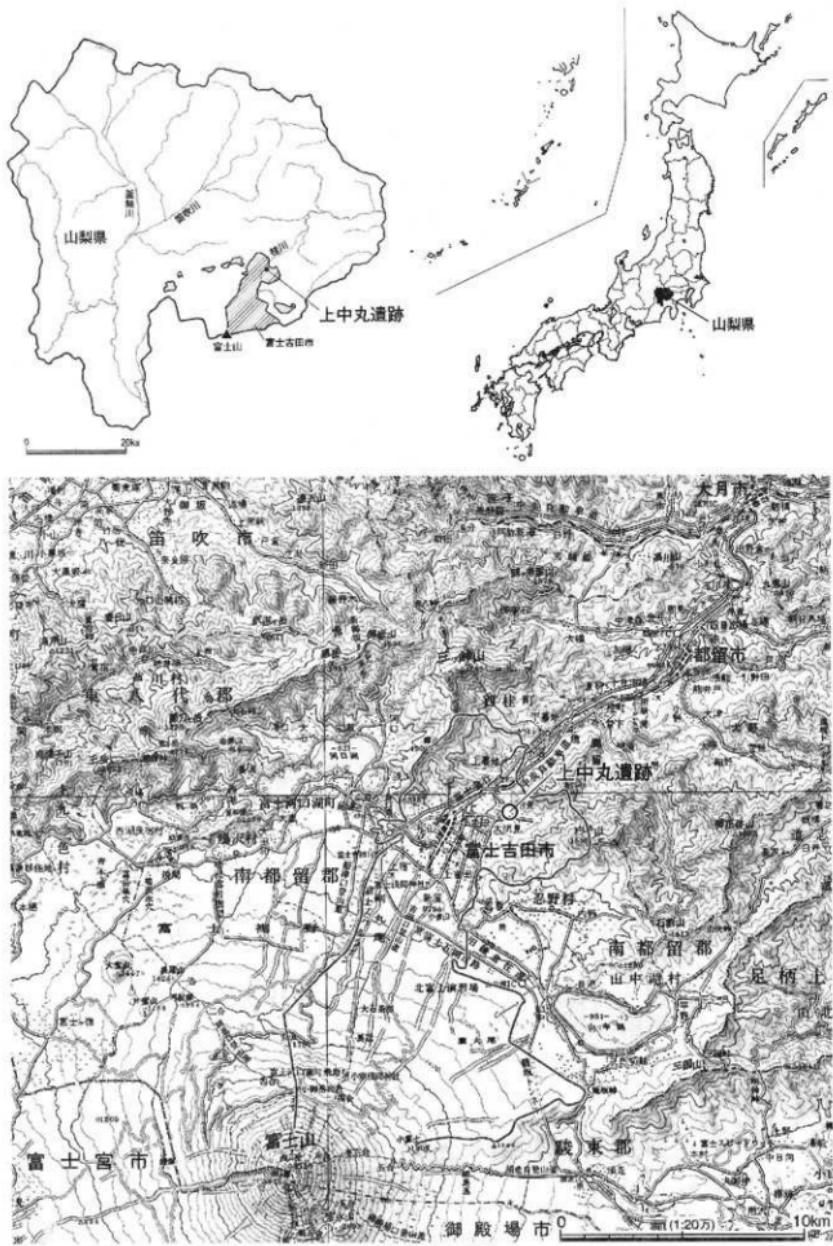
上中丸遺跡は、富士吉田市小明見に所在する。同市は山梨県の南東端に位置し、富士山から流下した溶岩や土石流によって形成された火山扇状地帯にあたる。市域には梨ヶ原といわれる裾野原野を含み、北は甲府盆地との境をなす御坂山地の主峰のひとつである三ッ峰山（標高1,785m）の尾根、東は遠志山地西端の杓子山（1,597.6m）に続く尾根で限られ、南は富士山頂直下より東の龍坂峠に至るライン、西は富士山頂より剣丸尾溶岩を辿りながら三ッ峰山頂へ向かうラインを境としている。市街地の地形については、北東に狭まる漏斗状を呈した傾斜面であり、標高約652~850mに展開している。市街地の東側には、槍丸尾とよばれる溶岩台地があり、山中湖と忍野村の湧水を水源とする桂川が北東の西桂町・都留市方面へ流れている。

本遺跡が所在する小明見は市域の北東にあたり、調査地点の標高は約722m、富士山頂からの距離は約17.6kmを測る。調査区の西側は約1500年前に流出したとされる槍丸尾第1溶岩流による段丘面となっており、東側は市域を南流してきた小佐野川と丹沢山地から西流してきた大沢川の合流地点にあたる。なお、調査前より地形・地質の変化に富んだ地域であることは予想していたが、調査開始後に槍丸尾第一溶岩流による焼土層を確認することができ、富士山の火山活動を知る希少な環境であることが判明したことから、火山灰分析・炭化物年代測定等をあわせて実施した。

第2節 歴史的環境

周辺の遺跡について

第5図では上中丸遺跡周辺に分布する主な遺跡を示した。富士吉田市史では縄文時代早期から中・近世まで52遺跡があげられている。これまでに詳細な報告がなされた発掘調査については池之元遺跡・古屋敷遺跡・上暮地新屋敷遺跡とまだ少ない。遺跡の分布からは、御坂・遠志両山地の山裾部の緩斜面や河川に沿う狭小な台地上に点在し、平坦地となっている市内中心部が土石流や溶岩で厚く覆われているため、遺跡の実態は



第4図 遺跡の位置

まだ十分に明らかにされていない状況といえる。なお、池之元遺跡や古屋敷遺跡といった山裾部の斜面に形成された遺跡では、ほぼ縄文時代早期～中世までの長い期間継続する傾向がみられ、同地域の中心的な集落を担ってきたことが窺える。

本遺跡周辺では、剣丸尾第1溶岩流および橋丸尾第1溶岩流から外れた位置において遺跡が確認されている。さらに北側の西桂町・都留市では、猿橋溶岩及び桂溶岩により形成された溶岩台地上に縄文時代から中近世までの多数の遺跡が確認されている。なお、本遺跡では今回の調査で富士山の火山活動による直接的な影響を受けた地域においても、縄文時代中期末～中世までの期間に富士火山の活動によって断続的に土地利用されてきた状況を確認した。以下、周辺における遺跡について、各時代ごとにまとめておく。

縄文時代

富士吉田市内においては縄文時代早期・前期の遺構・遺物が確認されている。早期では池之元遺跡や上暮地新屋敷遺跡をはじめ、市内11遺跡（5・9・10・13・24・25・27・28・39以下同）において遺構・遺物の報告がされている。富士北麓は、県内においても縄文早期の遺跡が多数確認される地域であり、なかでも上暮地新屋敷遺跡では打越式のまとまった資料が検出された希少な事例として知られている。前期では古屋敷A遺跡、御輿休場遺跡（5）で小堅穴、土坑などが検出されているが、堅穴住居跡は確認されていない。

今回の調査で確認した縄文時代中期後半以降では、御輿休場遺跡、奥薄久保遺跡（9）、古屋敷A遺跡、長日向遺跡（13）、池之元遺跡、千草場遺跡（27）、西沢遺跡（28）、大佐須遺跡（37）、上暮地新屋敷遺跡と、遺物の出土事例は多いが、前期と同様に堅穴住居跡は確認されておらず、集落分布の検討も課題のひとつとなっている。なお、後期では池之元遺跡で堀之内2式の敷石住居跡など集落跡が確認される他、千草場口遺跡（26）、西沢遺跡、道祐遺跡（30）、古屋敷A遺跡などで遺物が出土している。

弥生時代

本遺跡では、「刈谷原・柳坪式」に比定する弥生時代前期後葉の遺構・遺物を検出した。県内における同時期の調査事例としては、北杜市長坂町柳坪遺跡、蘿崎市宮ノ前遺跡があり、郡内においては富士河口湖町安司塚遺跡、同島原遺跡などが知られている。近年では都留市天正寺遺跡、同玉川金山遺跡があげられるが、遺構・遺物とともに未だ希少で、同段階における住居形態についての検討など、課題が多いといえる。なお、詳細な時期は明確ではないが、古屋敷A遺跡、山神戸遺跡（12）、池之元遺跡、西沢遺跡、上暮地新屋敷遺跡で遺物が出土している。

古墳時代

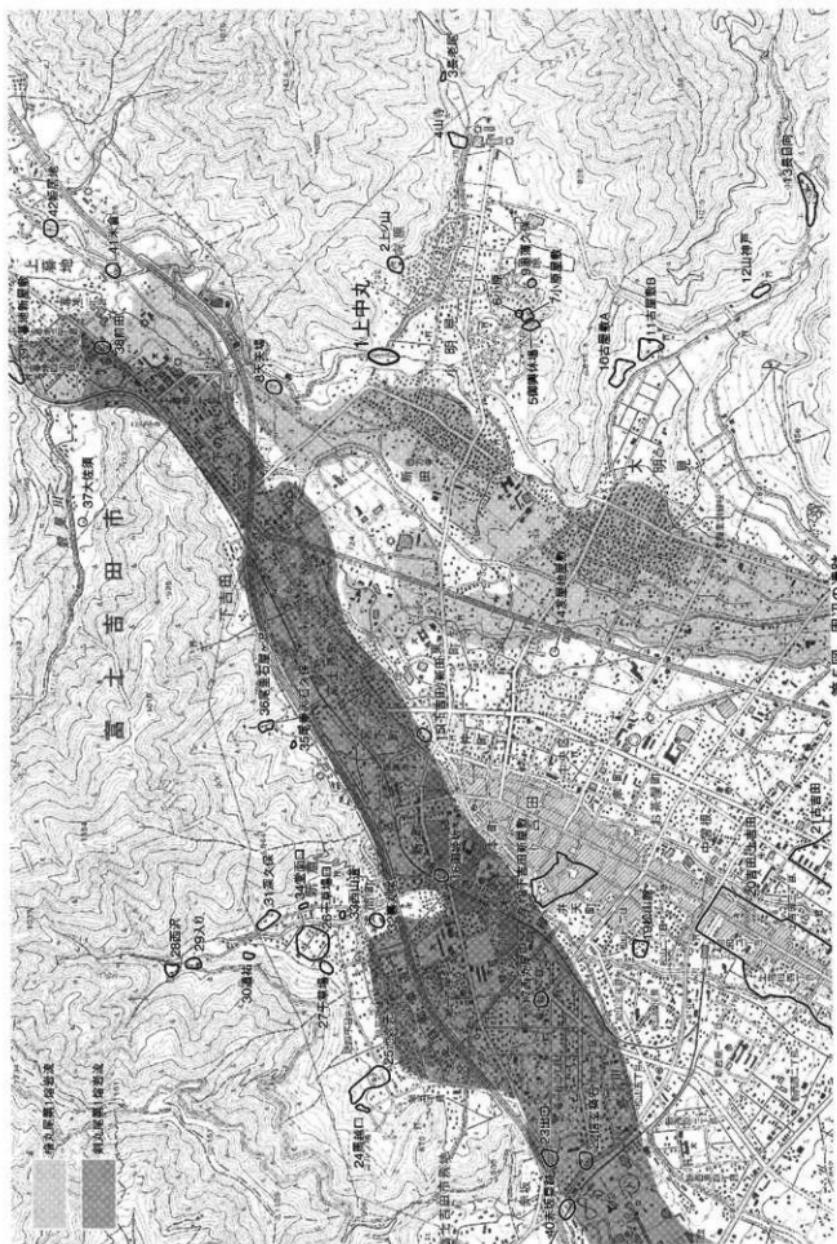
調査区西側にある椿丸尾第1熔岩流が流出した時期にあたり、本遺跡では人為的な痕跡を確認することはできなかった。周辺では、天矢場遺跡（8）、池之元遺跡で遺物が出土している他、古屋敷A遺跡においても古墳時代前期のS字甕が収集されている。

平安時代

主に10世紀の遺構・遺物を検出した。奈良・平安時代には、甲斐国府から東海道へ続く官道が通された地域にあたり、富士北麓地域には平安時代の遺跡が多数確認されている。市域西部の山裾地帯では、墨書き器や鉄製の鏡などが出土した池之元遺跡をはじめ、西沢遺跡、入り遺跡（29）、西山遺跡（33）などの遺跡があり、剣丸尾熔岩流上にも御船坂遺跡（16）、西丸尾遺跡（17）出口遺跡（23）などが展開する。おそらくは官道設置に伴って展開した集落様相を示していると考えられる。また、本遺跡を含む市域東部から北の地域でも、椿丸尾第1熔岩流の流出以降再び生活の痕跡がみられ、上暮地新屋敷遺跡、上ノ山遺跡（2）、前田遺跡（38）、長日向遺跡のほか、古屋敷B遺跡においては鍛冶を示す鉄滓が検出されている。

中世・近世

中近世では、寺院・富士山信仰に関わる宿・城館跡などの遺跡がある。西方寺の旧跡である長老尾遺跡（3）、山寺遺跡のほか、小原遺跡（6）、小原屋敷（7）、友屋地屋敷（14）、新田遺跡（15）、下吉田新屋敷（18）、松山館（19）、吉田・上吉田（20）、古吉田遺跡（21）などがある。なお、鎌倉街道に沿って富士河口湖町との境にある信玄築石（22）は、富士河口湖町側では赤坂累跡と呼称されている。



卷之三

表3 周辺遺跡一覧

番号	町村名	遺跡名	時代	種別	旧村名	所在地	その他
1	富士吉田市	上中央遺跡	縄文(中～後)/弥生/平安/中世	散布地	富士吉田市	小明見字上中央	富士吉田市史掲載26
2	富士吉田市	ノ山遺跡	平安	散布地	富士吉田市	小明見字ノ山	富士吉田市史掲載27
3	富士吉田市	長老鬼遺跡	中世	散布地	富士吉田市	小明見字荒焼沢	富士吉田市史掲載29
4	富士吉田市	御文寺遺跡	縄文(早)/平安/中世	散布地	富士吉田市	小明見字山寺	富士吉田市史掲載28
5	富士吉田市	御典休場遺跡	縄文(早～中)	散布地	富士吉田市	小明見字御典休場	富士吉田市史掲載30
6	富士吉田市	小原遺跡	中世/近世	散布地	富士吉田市	小明見字小原	富士吉田市史掲載32
7	富士吉田市	小原慰歌	中世/近世	散布地	富士吉田市	小明見字小原	富士吉田市史掲載33
8	富士吉田市	天久保遺跡	古墳	散布地	富士吉田市	小明見字天久保	富士吉田市史掲載25
9	富士吉田市	奥得保久遺跡	縄文早～前	散布地	富士吉田市	小明見字奥得保	富士吉田市史掲載31
10	富士吉田市	古里敷A遺跡	縄文(早～後)/弥生/平安/中世/近世	城跡	富士吉田市	大明見字古里敷(林木氏所有地)	富士吉田市史掲載34 「古里敷遺跡」1990 富士吉田市史掲載35 富士吉田市史掲載36 古里敷遺跡」1990
11	富士吉田市	古里敷B遺跡	縄文/平安/中世	集落跡	富士吉田市	大明見字古里敷	富士吉田市史掲載37
12	富士吉田市	山神戸遺跡	縄文(後)/弥生/平安	集落跡	富士吉田市	大明見字山神戸	富士吉田市史掲載36
13	富士吉田市	及日向遺跡	縄文(前～後)/平安	散布地	富士吉田市	大明見字長日向	富士吉田市史掲載37
14	富士吉田市	友理地原聚	中世/近世	散布地	富士吉田市	下吉田字友理地	富士吉田市史掲載41
15	富士吉田市	(下吉田)山道跡	平安/中世/近世	集落跡	富士吉田市	下吉田字新川	富士吉田市史掲載40
16	富士吉田市	御船坂遺跡	平安	散布地	富士吉田市	下吉田字御船坂	富士吉田市史掲載41
17	富士吉田市	西丸尾遺跡	平安	散布地	富士吉田市	電ヶ丘	富士吉田市史掲載23
18	富士吉田市	下吉田新屋敷	中世	散布地	富士吉田市	下吉田字新屋敷	富士吉田市史掲載42
19	富士吉田市	松山駒	中世	城跡	富士吉田市	松山字芝原	富士吉田市史掲載43
20	富士吉田市	吉田・上吉田	中世/近世	宿	富士吉田市	上吉田	富士吉田市史掲載45
21	富士吉田市	古吉田遺跡	中世	宿	富士吉田市	上吉田字古吉田	富士吉田市史掲載44
22	富士吉田市	儀文集石	中世	城跡	富士吉田市	松山	富士吉田市史掲載46 富士吉田河跡「手振屋跡」と同
23	富士吉田市	出口遺跡	平安	散布地	富士吉田市	新倉字出口	富士吉田市史掲載44
24	富士吉田市	馬込口遺跡	縄文(早)	散布地	富士吉田市	新倉字馬込口	富士吉田市史掲載22
25	富士吉田市	池之元遺跡	縄文(早～後)/弥生/古墳/平安	集落跡	富士吉田市	新倉字池之元	富士吉田市史掲載21 「池之元遺跡」1997 富士吉田市史掲載35
26	富士吉田市	干草場口遺跡	縄文(早～中)	散布地	富士吉田市	新倉字干草場	富士吉田市史掲載18
27	富士吉田市	干草場遺跡	縄文(早)/中世	散布地	富士吉田市	新倉字干草場	富士吉田市史掲載19
28	富士吉田市	西内保断	縄文(早～後)/弥生/古墳/平安	集落跡	富士吉田市	新倉字西沢	富士吉田市史掲載12
29	富士吉田市	入り道跡	平安	散布地	富士吉田市	新倉字入り	富士吉田市史掲載13
30	富士吉田市	道筋遺跡	縄文(後)	散布地	富士吉田市	新倉字道筋	富士吉田市史掲載14
31	富士吉田市	深久保遺跡	縄文/中世	散布地	富士吉田市	新倉字深久保	富士吉田市史掲載15
32	富士吉田市	高丸保遺跡	縄文	散布地	富士吉田市	新倉字高丸尾	富士吉田市史掲載20
33	富士吉田市	山西山遺跡	平安	散布地	富士吉田市	新倉字山西山	富士吉田市史掲載17
34	富士吉田市	堂面口遺跡	縄文	散布地	富士吉田市	新倉字堂面口	富士吉田市史掲載16
35	富士吉田市	尾垂大石久保遺跡	縄文	散布地	富士吉田市	下吉田字尾垂大石久保	富士吉田市史掲載10
36	富士吉田市	尾垂石塚ヶ沢遺跡	平安	散布地	富士吉田市	下吉田字尾垂石塚ヶ沢	富士吉田市史掲載9
37	富士吉田市	大佐地遺跡	縄文(中)	-	富士吉田市	上喜地字大佐原	富士吉田市史掲載7
38	富士吉田市	前田裏跡	平安	散布地	富士吉田市	上喜地字前田裏	富士吉田市史掲載6
39	富士吉田市	上喜地新屋敷遺跡	縄文(早～中)/弥生/平安	散布地	富士吉田市	上喜地字寺ノ入	富士吉田市史掲載5 「上喜地新屋敷遺跡」2011 富士吉田市教育委員会
40	富士吉田市	赤坂原跡	中世	城跡	河口湖町	船津	富士吉田市「信玄築石」共同
41	西桂町	木曾谷遺跡	-	散布地	西桂町	小沼字木曾谷	
42	西桂町	那居池遺跡	-	散布地	西桂町	小沼字那居池	

第3章 調査成果

今回の調査で発見した遺構・遺物は、縄文時代中期末堅穴住居跡1軒、土坑6基、弥生時代の住居跡と思われる遺構2軒、平安時代の堅穴住居跡2軒を検出した。出土した遺物については、縄文土器、弥生土器、土師器・石器・古銭などが出土し、プラスチックコンテナ(59×38×30cm)約8箱分、総重量は約43kgを量った(表9)。

以下、時代ごとに各遺構について述べるが、なお、各遺構に関する図版・写真については、遺構名のあとに【遺構図/遺物図/写真】、出土遺物については〔〕を付して示した。その他、遺構・遺物に関する一覧を表4~9に掲載した。

第1節 各調査区の遺構確認面と時期について

今回の調査は、富士山の火山活動と遺跡の密接な関連が窺える事例のひとつとなった。既に層序の時期については第1章第4節で表したが、ここでは改めて調査区ごとの調査経過とあわせ、遺構確認面の層位と時期について触れておきたい。

A区【第6図/第29図/図版3・4】

A区では3段階の面的確認を行った。重機による1回目の掘削は、上層部は旧河道の厚い堆積土であり、基8層上部まで掘り下げた。河川の最終的な埋没時期ははっきりしないが、土層断面の観察では平安~縄文時代晚期の層まで削平されており、遺物もほとんど出土しなかった。状況から旧河道により削平されたものと思われる。次段階は火砕サージ推定層(〔8a〕)およびH19年度の調査区底面を目安に、出土遺物に注視しながら掘り下げたが、同面においても遺構・遺物は確認できなかった。しかし、この段階で東壁面で上層から落ち込む状況が確認でき、さらに下層を確認するためにサブトレを設定して掘り下げを実施した。

重機による3回目の掘削では、硬いサージ推定層を除去し、C区で遺物が確認された基10層で平面確認を行った。これにより調査区南端ではピットと平安時代の遺物が混在する掘り込み状の砂礫堆積、調査区中央よりやや北で縄文土器が混在する砂礫堆積を確認した。これらが人為的な掘り込みであるのか、または水流による自然堆積であったのか明確にすることはできなかったが、同区においても基11層段階に遺物が混在していることがわかった。なお、B・C区の調査が進展してさらに下層で縄文時代中期後葉の遺構の存在が明らかとなったが、これ以上の掘削は崩落の危険があると判断し、同面で調査を終了した。なお、調査区北側で検出したPit86・87については、性格については明確ではないものの、同区西側に隣接する平成19年度調査南区における遺構分布の傾向に沿っており、旧流路付近に沿った樹木等の根痕であった可能性が窺えた。

出土遺物はすべて小片であるが、縄文時代の土器〔1~11〕、平安時代の土師器片〔12~15〕が出土し、上層からは陶器の擂鉢〔16〕、古銭〔350〕などが混在した。

B区【第7・8図/第30図/図版4~6】

B区では、表土剥ぎの段階で調査区の大半が旧河道面であることが判明した。A区と類似して旧流路に削平されて弥生時代以降の遺構確認面がなかったことから、東西区画では主に埋没時期と河床面を確認することを目的に調査を進めた。

南北区画ではC区とほぼ同様に掘り下げ、基3層の面において流路左岸の範囲を確認した。その後、北端部では基11層まで掘り下げを行った。遺構は確認できなかったものの、基10層でSX1の加曾利E4式土器と同個体の土器片が出土した。

東西区画においては、旧河道の堆積状況を確認した。詳細については後述するが、出土遺物と土層観察から、調査区内において少なくとも縄文、弥生、平安末~中世の、3回の流路変移があったと推定した。A区同様に崩落の危険のため、掘削については、2層目の火砕サージ推定層にあたる基12層下まで一部深堀を行

v、基13～16層と推定する層まで確認した。

C区【第9・10図/-/図版7~15】

C区では平安時代、弥生時代、縄文時代中期後葉（2面）の4段階の遺構確認を行い、最終面までの深さは、約3m50cmに至った。南北に長いC区では、檜丸尾第1溶岩流などの富士火山による堆積物や大沢川の影響で、複雑な堆積状況がみられた。表土の除去後、人力による精査によって、平安時代にあたる基-2層、と弥生時代にあたる基3層で遺構精査を行った。中央より北側の水田となっていた範囲では、表層から約20cmほどでスコリア面となり、弥生時代の遺構確認面も耕作によって掘削されていた。

C区第1面とした平安時代の遺構確認面である基-2層は、今回の調査区においてはC区の南端から約10mの範囲のみで確認でき、その北側は檜丸尾第1熔岩流の影響から、同層は堆積しなかったもしくは流路変移によって削平されていたと推定した。同面では堅穴建物跡であるSI1を検出した。同じ平安時代の遺構としたSI4は、弥生時代の層まで削平されていた水田跡部分で検出した。この遺構の検出については、掘り方が深く下部だけが残った、もしくは平安時代には既に何らかの理由で同面近くまで削平されていたことなどが考えられる。なお、水田と宅地の境にあたる調査区中央の溝では、建物取り壊しの際に埋まつた瓦礫の他、溶岩を用いた石積みが確認でき、溝の南側（宅地側）からは寛永通宝などが出土していることから、同敷地の地割りは近世段階まで遡る可能性も窺える。

第2面とした基3層では、弥生時代の遺構確認を行った。明確な掘り込みは確認できなかったが、遺物が集中的に分布する2箇所で焼土の堆積がみられたことから、住居跡と推定してそれをSI2、SI3とした。但し、共に上面からの擾乱が著しく、また複数のピットを検出したが柱穴と断定できるものがなかったことなど、住居跡と断定できる要素としては十分とはいえず、今後も検討が必要である。

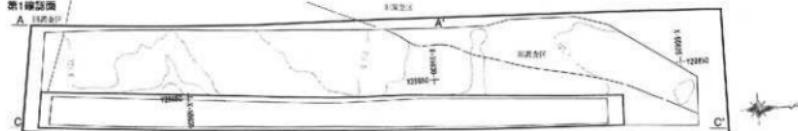
次段階の確認面までは、調査成果から約80cmほどあることが推定されていたため、大型の重機を用いて1層目の火碎サージ推定層（基8a層）を目安に掘り下げを行い、基10層で遺構確認を行った。基9層については、縄文時代後期～中期後葉の包含層である可能性があったことから、人力によって掘り下げを試みたが、遺構・遺物は確認できなかった。第3面とした基10層の段階では、ピット以外に明確な遺構は確認できず、縄文時代中期後葉（加曾利E4式）の土器が出土したSX1以外、出土遺物もわずかであった。調査区中央より北側で複数のピットを検出したが、多くは不整形であり木根跡と思われる。なお、遺物や遺構プランが確認できず重機で掘削してしまったが、調査区東面で縄文時代晚期頃にあたる基4層から掘り込まれた土坑状の断面（写真図版15-12）が確認できた。その他、調査区内からの出土量はわずかであったが、縄文時代後期の遺物が出土しており、同時期段階の遺構も存在していたと考えられる。

第4面はSX3の検出面であり、複数のピットが検出された調査区北側の掘り下げを行った。調査区東壁面の縦断面観察から基11層の砂礫堆積層の境目を確認し、サブトレを設定して掘り下げたところ、曾利V式段階を主とする遺物が出土した。堅穴住居跡等の可能性を考慮しつつ調査を進めたが、人為的な掘削は認められず、性格不明遺構（SX3）とした。同遺構は土層観察から、2層目の火碎サージ推定層（基12層）が途切れた基15層の上に堆積しており、粒子の細かい砂質土中に遺物が包含していた。また、流水の痕跡があつたことから、水場等であった可能性も考えられる。

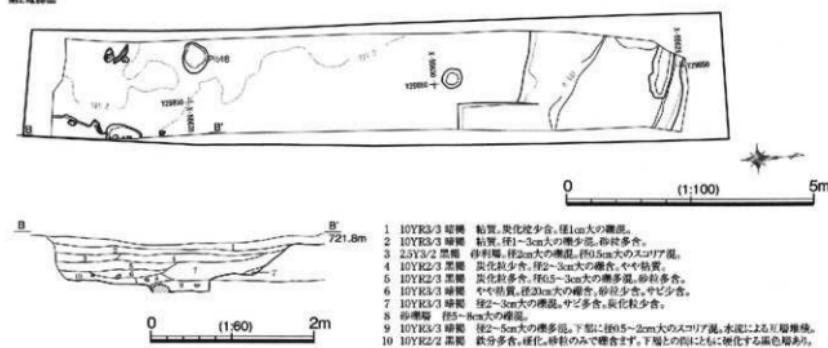
第5面は基16層上面にあたり、今回の調査における最終の遺構確認面とした。同面では縄文時代中期後葉の曾利II式段階の土坑（SK2）、曾利IV式段階と推定する堅穴住居跡（SI5）等を検出し、また上層面では確認できなかった、曾利V式段階の土坑（SK1・4・6）も確認できた。

なお、今回の調査地点では、基15層までは安定した平坦な堆積状況であり、基11層の段階において河川流路や火山堆積の影響によって起伏が生じた痕跡が確認できた。この時期が同地域の土地様相が変化する両期であった可能性も考えられよう。

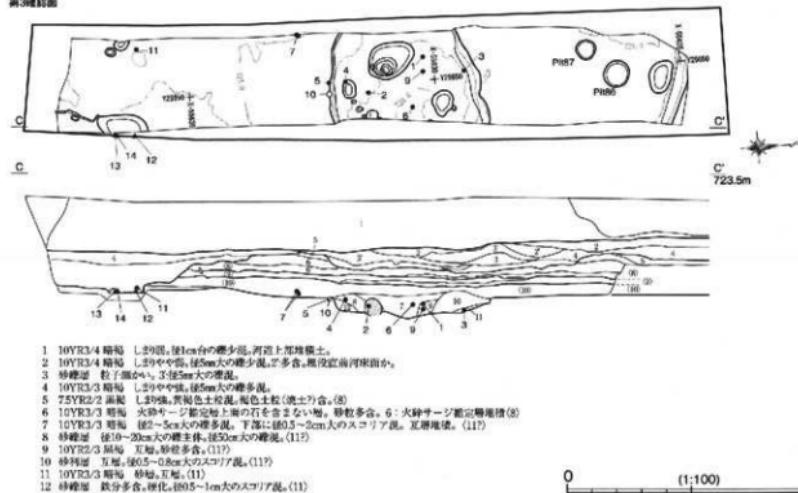
第1縫跡面



第2縫跡面

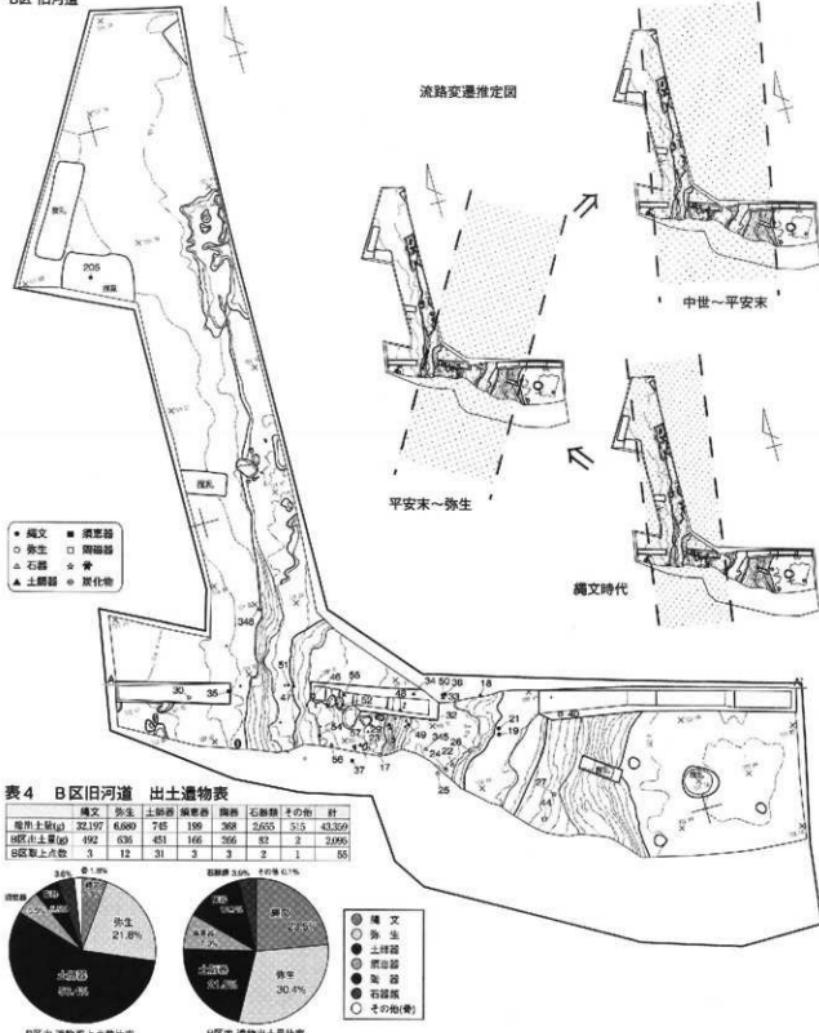


第3縫跡面

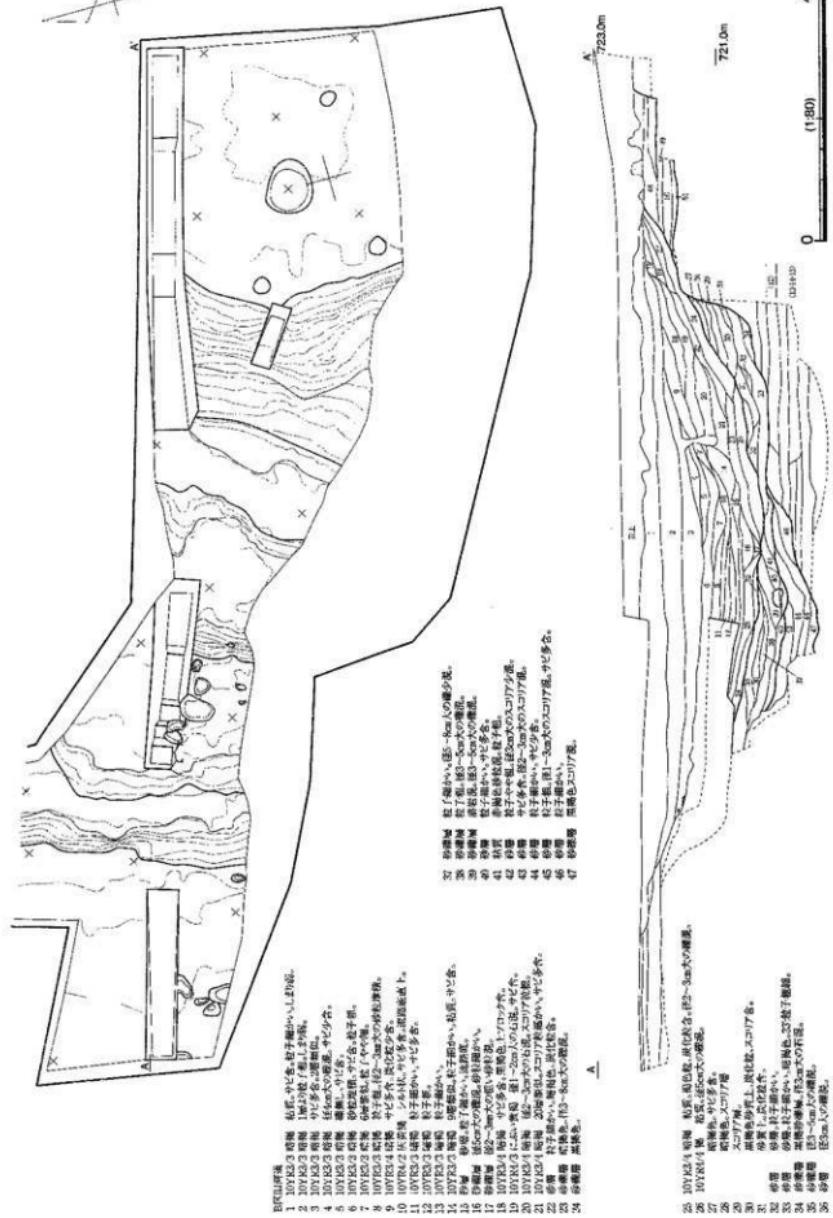


第6図 A区全体図

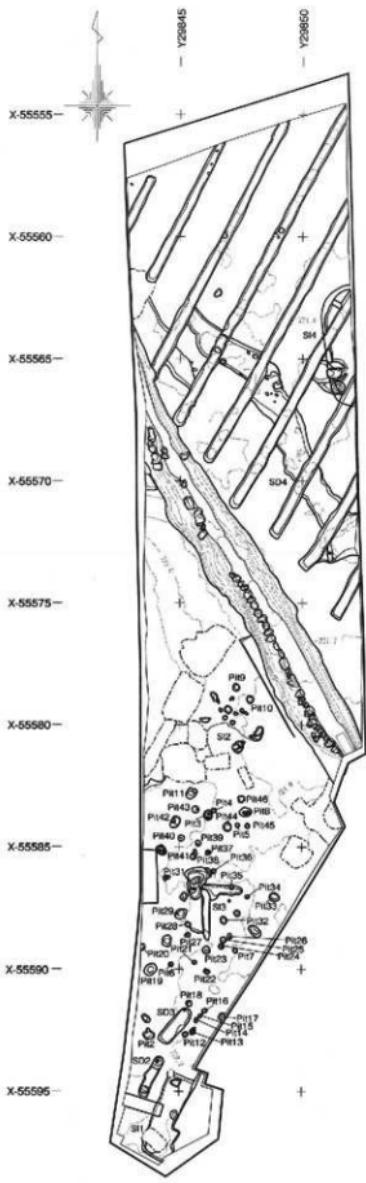
B区 旧河道



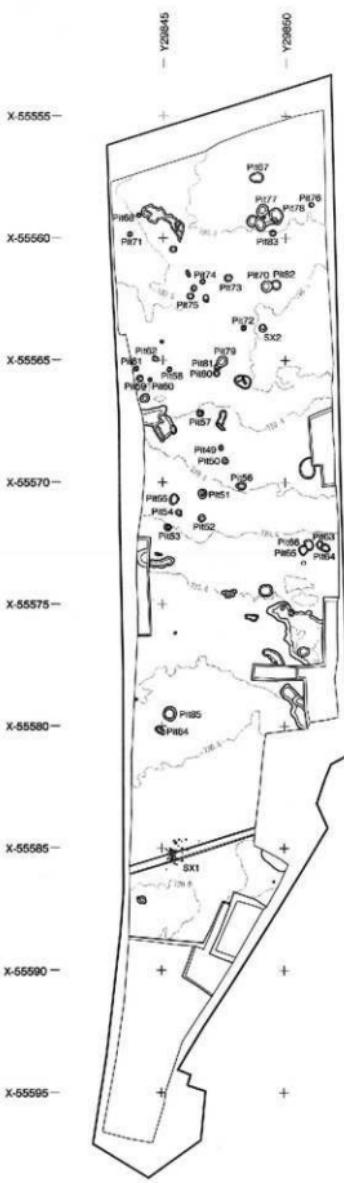
第7図 B区全体図



第8図 B区河川地図



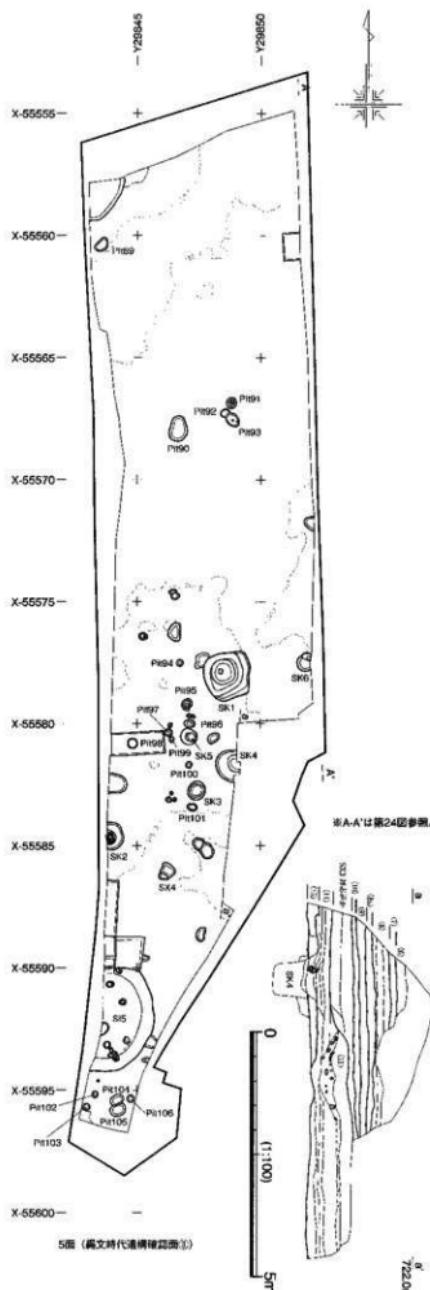
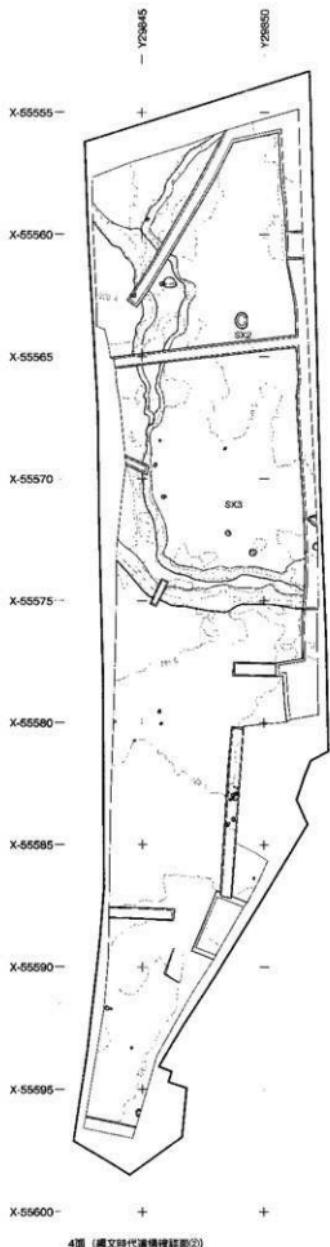
1・2面 (平安・鎌倉時代遺構確認図)



3面 (平安時代遺構確認図①)

0 (1:200) 10m

第9図 C区全体図①



第10図 C区全体図②

第2節 発見した遺構と遺物

(1) 平安時代の遺構・遺物

平安時代の遺構としては、SI1、SI4を検出し、B区旧河道からも同時代の遺物が出土している。その他、SI1と同面において溝1条（SD1）を確認したが、工事に伴って取り壊した建物基礎の痕跡と断定した。

SI1 [第11図/第31図/ 図版9・18]

C区南端で検出した。方形を呈すと推定したが、遺構の東半分は搅乱で壊され、検出範囲で南北3.57m、東西1.25mを測った。覆土は褐色土粒（サビ）を多く含み、黄色味が強い。検出範囲ではカマド等の施設は確認できず、サブトレにより上部を削平してしまったが、ピット1基（Pit1）を検出した。

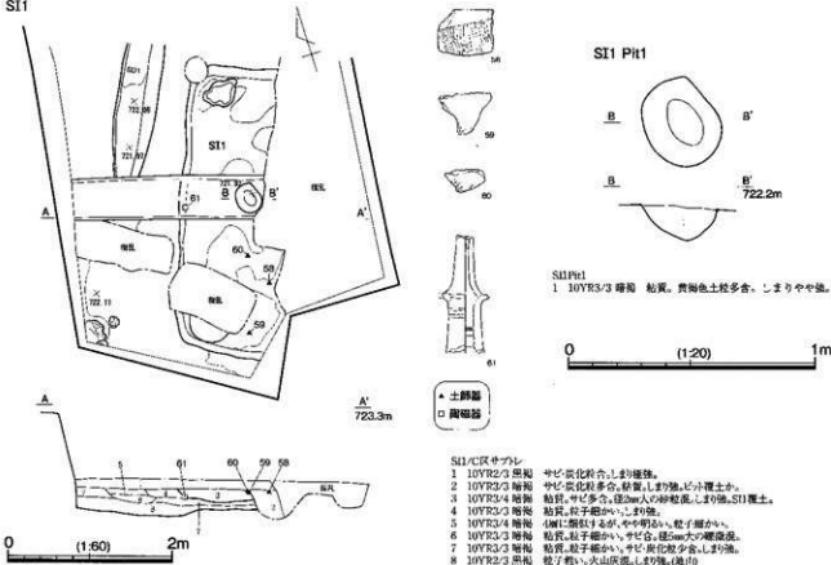
出土遺物は少なく、土師器焼片〔58～60〕と灰釉陶器の淨瓶〔61〕が出土した。淨瓶は頸部のみで、環台部分（鉢状の突帯部）は打ち欠きされており、破片は検出できなかった。遺構年代については明確ではないが、伴出した土師器片の年代から、10世紀頃と推定しておく。

SI4 [第12図/第34図/ 図版11・20]

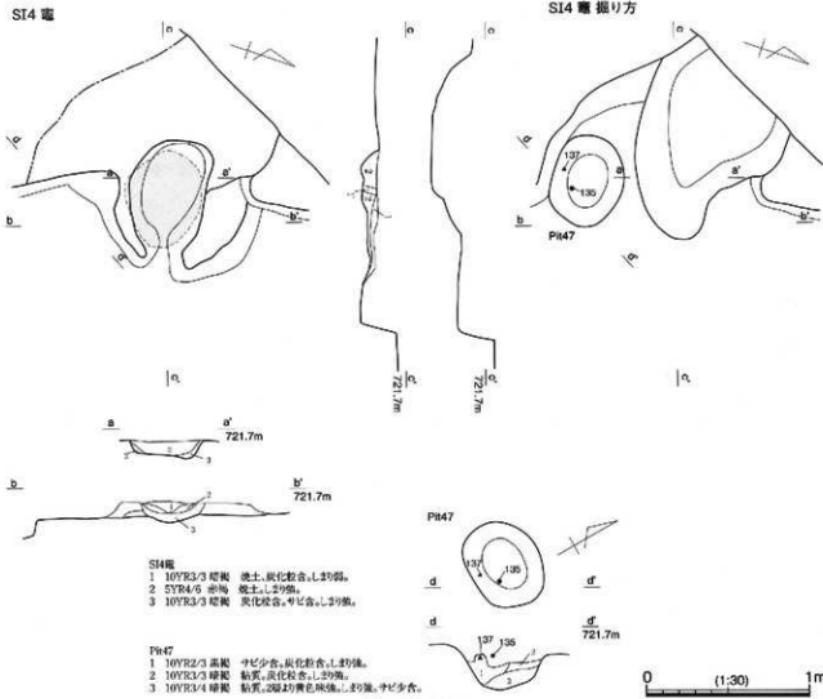
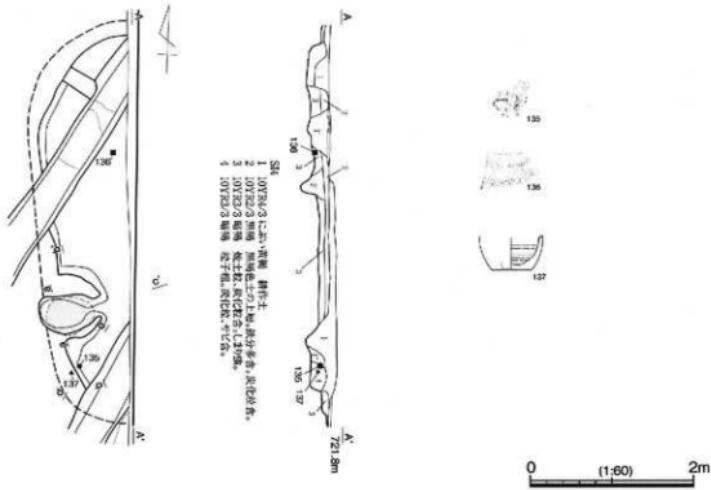
C区中央よりやや北側の東端で、方形と推定する竪穴建物跡の西側半分を検出した。西壁の中央よりやや南側にカマドが造られていた。上部は水田耕作により削平されてしまって煙道等は確認できなかつたが、袖部の一部と多量に焼土の堆積があつた。また、遺構確認時には焼土とともに黄褐色土の搅乱が重複している状況が確認でき、搅乱底面から加曾利E式の土器片〔135〕が出土した。カマドの左側（南側）の袖脇にある部分では、ピット1基（Pit47）を確認した。遺構からの出土遺物はわずかで、このPit47の上面から出土した土師器小型壺〔137〕と、遺構内の北側から出土した須恵器片〔136〕のほか、先述した縄文土器〔135〕の3点のみであった。

その他、住居跡の掘り方や壁面等は明確ではなく、火山灰土壤の性質によるものなのか、または壁面を整えた痕跡なのかはっきりしなかつたが、遺構周辺に沿って土色の違いがあり、図中ではその範囲を破線で示す。

SI1



第11図 SI1



第12図 SI4

した。なお、本遺構は調査前は水田があった場所に位置しており、耕作によって遺構平安時代にあたる基-2面が削平されていた状態で、遺構底面近くのみが残存していた状況であった。SI1付近の堆積状況から比較すると、基-2層からSI2を確認した基4層までの深さは40cmほどの差であったが、やや掘り込みの深い豊穴住居跡であった、もしくは熔岩流による土地様相の変化によって構築された時期には既にある程度のレベルまで削平されていたなどの可能性も考えられる。

平安時代の出土遺物について

古代の出土遺物量については、出土遺物全体の重量比では約2%で、各時代につくられる一個体の重量差はあるものの、取上げ点数の割合でもおよそ6%と少なかった(表14)。調査区内で流路が確認されていることから、主たる居住域からは離れた、集落の端部に位置していた可能性が観察された。

今回検出したこの段階の遺物は、いずれも小片であったが、年代が判別できる資料のなかでは、B区旧河道から出土した土師器坏〔50〕が最も古く、山梨県史資料編2掲載の奈良・平安時代編年のIV～V段階にあたり、9世紀頃に比定した。流路堆積上内からの出土のため、表面は摩耗していたものの、線刻がある底部及び側面にはヘラ削りや磨きの痕跡が確認でき、内面は見込み部及び体部には暗文が施されている。他の土師器坏類では、主に10世紀代の甲斐型土器および甲斐型終末段階の遺物〔14・51～53・311〕があり、底部は回転糸切痕をそのまま残し、ヘラ削りを用いない成形のもの〔14〕や11・12世紀頃に比定される底部が厚いもの〔56〕や高台坏〔57〕などが出土した。壺類では口縁部〔15・47・48・58〕、羽釜〔13〕などが出土している。いずれも小片であったが、壺や羽釜といった煮炊具が混在している状況から、本遺跡南側に集落が存在した可能性が観察される。また、灰釉陶器片も混在しており、四耳壺などの壺や小壺片〔39～41〕、壺・碗〔42・43〕、淨瓶〔61〕の出土がみられた。

(2) 弥生時代の遺構・遺物

山梨県においては、弥生時代の遺跡が発見された事例は少なく、第2章第2節で述べたとおり、とくに前期後葉の遺構・遺物の出土事例は希少である。今回の調査では遺物が集中したC区の2箇所において、その範囲の中央付近に焼土の堆積が確認できた。これを炉と推定し、住居跡としてSI2・3の調査を実施した。

豊穴住居跡

SI2【第13～15図/第31～33図/図版10・18・19】

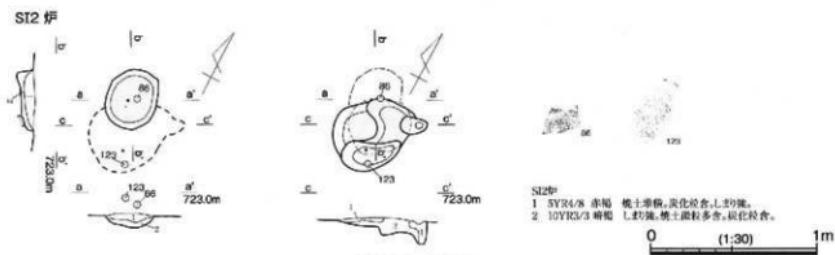
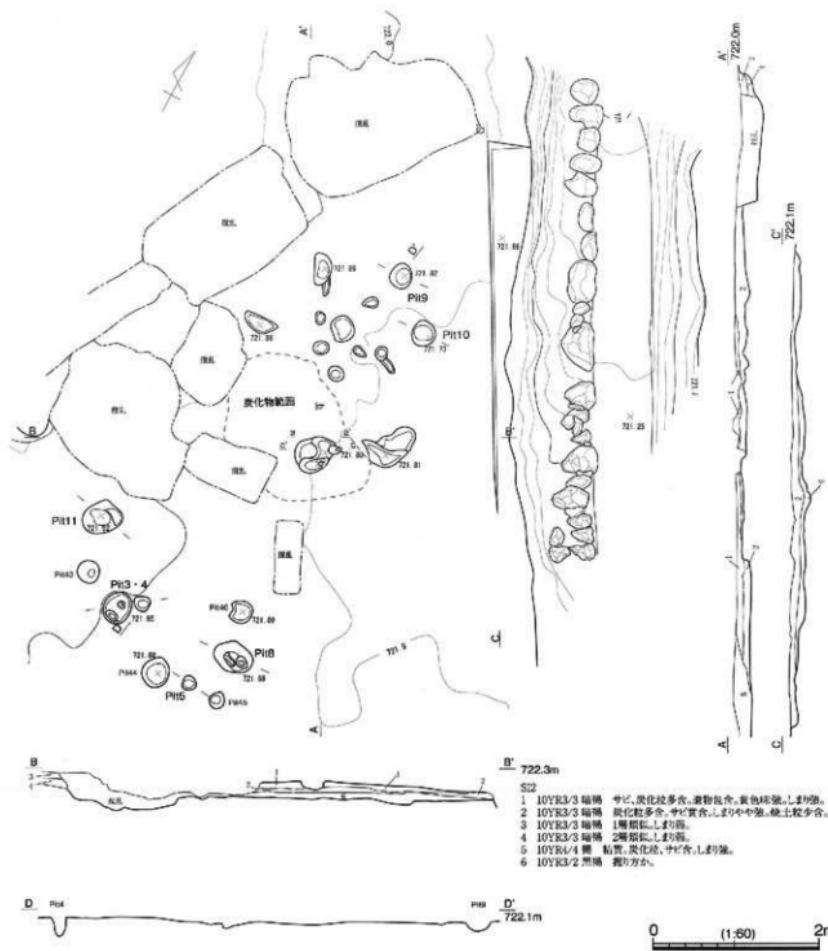
C区中央やや南で検出した。直径約3.5mの範囲で遺物が集中的に出土し、その中心近くで焼土の堆積が確認できたことから、住居跡として調査を進めた。C区中央の排水溝となっていた溝に接しており、さらに調査前にあった建物基礎等の影響で上層からの搅乱が著しく、遺存状況が悪かった。また、床面や掘り方も明確ではなく、いくつかのピットは検出できたものの、遺構範囲の推定はできなかった。

出土遺物は〔62～128〕が出土した。出土位置については、搅乱によりレベルが変わってしまった部分も多くみられ、近世の古銭〔349〕なども混在した。

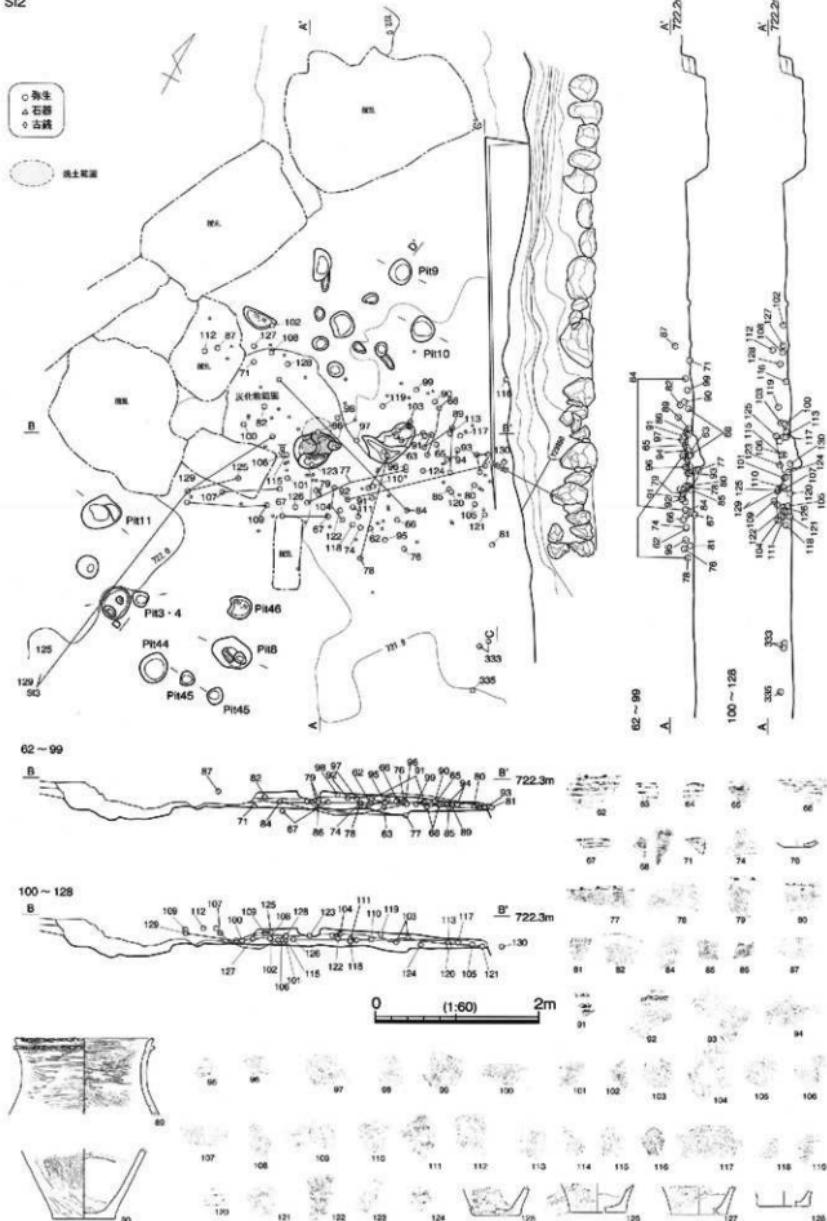
焼土堆積については、上部と下部で位置が異なる状況が確認でき、遺構の重複もしくは造り替え等、2段階の時期差が示される可能性が観察された。また、遺構規模の推定は困難であったが、焼土内およびその周辺では、炭化したオニグルミなどの種子類が検出されている。焼土は上層・下層とともに採取し、乾燥させた後に計量してフローテーションを実施した。検出した炭化物については種実同定を行い、焼土中から栽培種のアワ、ヒエ?、キビなどが確認された。この分析調査の成果については第4章に掲載した。

SI3【第16図/第34図/図版10・20】

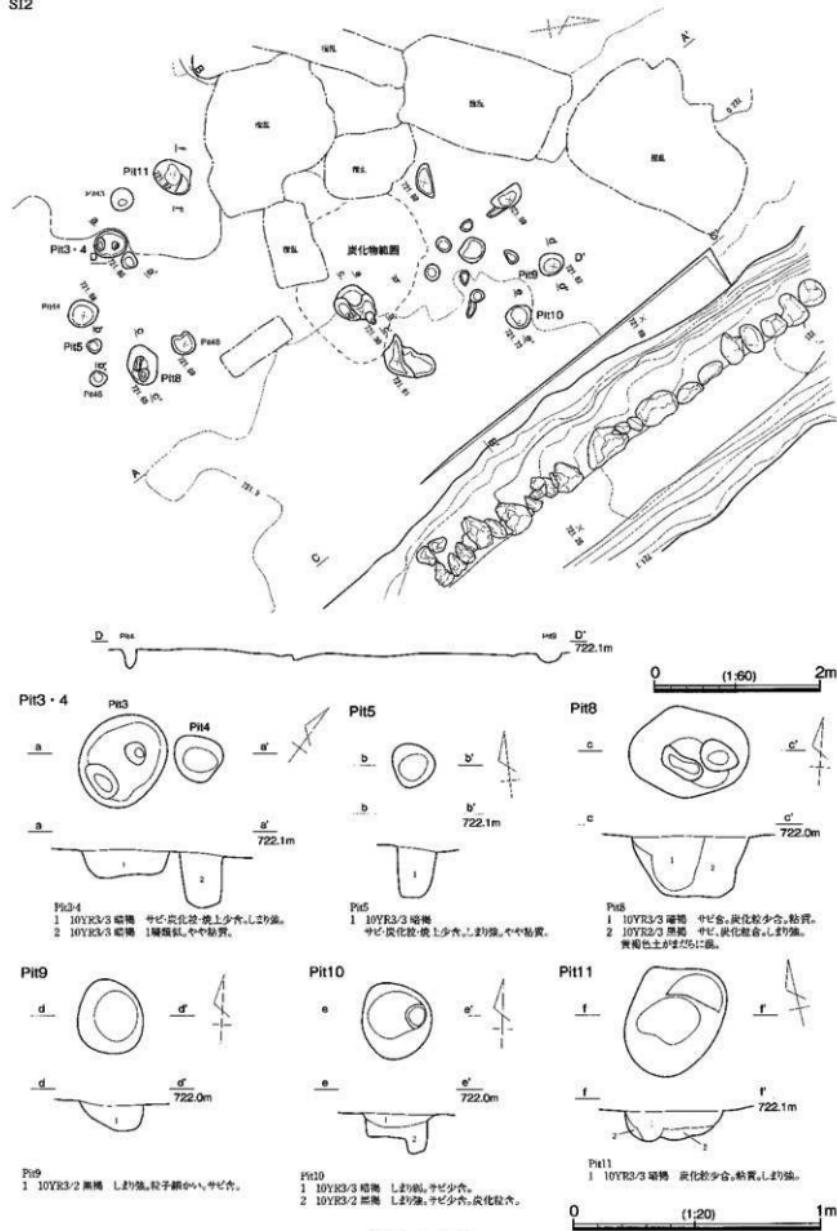
C区南側の西壁際で検出した。SI2と同様、遺物が集中的に出土する範囲の中央付近で焼土堆積を検出し、周囲にピットが確認できたことから住居跡として調査を進めた。



第13図 SI2①



第14図 SI2②



第15図 SI2(3)

SI2 同様に上層からの搅乱があり、しかも遺構の中央付近にかかっていたためか、出土遺物量は SI2 の半分ほどであった。平面観察では明確な遺構の範囲や掘り方を判断することが出来ず、検出したピットもほとんどが不整形で浅く、柱穴と断定できるものはなかった。遺構範囲については、約 6 m と推定し、図中において破線で示した。これについては調査区西壁の観察において土層に僅かな変化が確認でき、これを覆土として検出したピットの位置から推定している。出土遺物は、条痕文による器面調整土器片 [129 ~ 134]、黒曜石製の石鏃 [343・344] が出土した。遺構年代については、SI2 より後出するものと考えられる。

弥生時代の出土遺物について

発見した遺物は山梨県内では希少な弥生時代前期後葉の資料であり、そのほとんどが器面調整の条痕に貝殻ではなく、粗いハケ状またはクシ状の工具が使用される中部型条痕文土器に位置づけられるものであった。

同時代の土器編年については、中山誠二氏により、縄文晚期の終末と考えられてきた氷 I 式の段階を弥生 0 期、東日本に定型化した前方後方墳・前方後円墳が登場する直前の段階を 6 期としてその変遷を扱い、さらに他地域の対比を明確にするため小期の細分をされている（中山 1993）。今回の資料については、中山氏編年のおよそ弥生 0 期から 2 期の段階に位置づけられるものと比定した。また前述した通り、同時代の遺物は遺構外からの出土はほとんどなく、遺構単位でまとまって出土する傾向があり、年代順には SI2、SI3、そして流路の覆土中からの出土であったが B 区旧河道の順に位置付けることができた。以下、調整痕の特徴と比定する時期について触れておきたい。

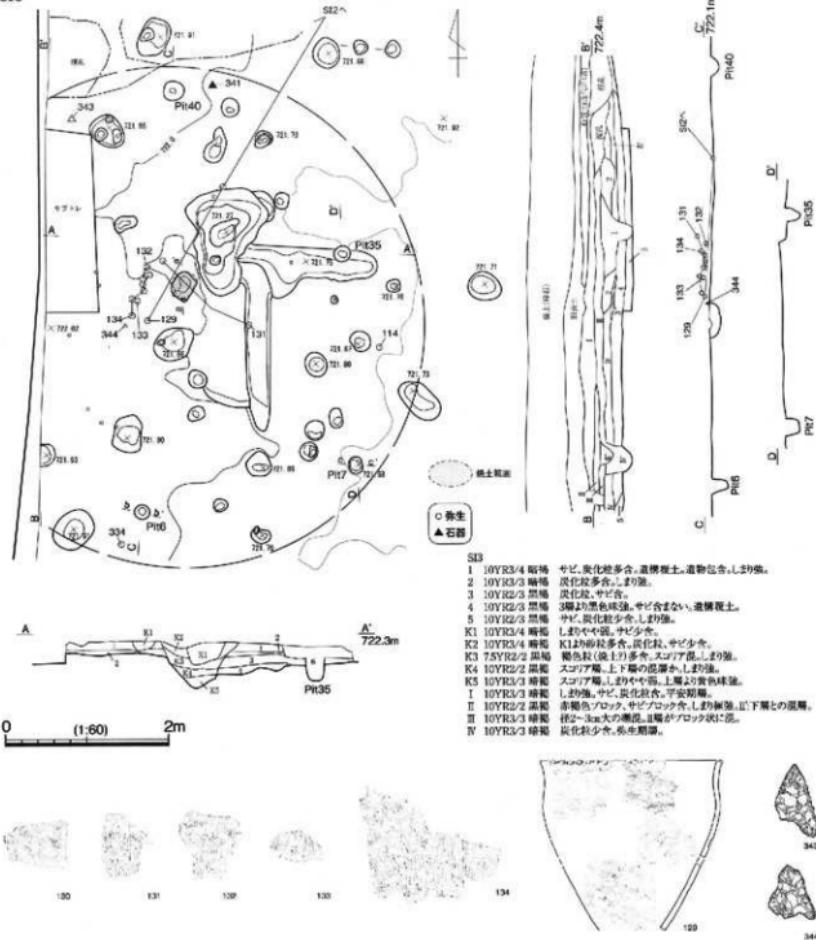
SI2・3 出土の遺物については、弥生 0-(3) 期 ~ 1 期あたりに比定され、氷 I 式から継続する要素としてあげられる深鉢口縁端部につけられる山形小突起、壺口縁下の幅広の平行沈線文などがみられる。浅鉢または壺の口縁端部に口外帶もしくは口外帶風の長円形の刻みを施したもの [62・63・77・79・80]、口縁下に平行沈線文があるもの [64 ~ 67・69・70] を弥生 0-(3) 期段階、壺の口縁端部に山形小突起をもつもの [72] や広口壺 [89]、SI3 出土の壺 [129 ~ 134] などが弥生 1 期段階としてあげられる。B 区旧流路出土の遺物については、竹管背面による横走矢羽根状沈線文があるもの [29] や、装飾的につけられた縱方向と横方向の条痕文がある丸子式に比定する [30] など、弥生 2 期段階に比定する遺物が出土した。

口外帯をもつ土器では、単斜方向の条痕文が施されているもの [79] や外面がナデ調整されて無文となっているもの [80] などがみられた他、口外帯に代わって細かい刻みを施したもの [81] なども出土している。コブ状突起をもつ [62] や口外帶風の長円形の刻みがある [63] などは、前段階にみられた口縁下に網状浮線文が形骸化して幅広の沈線となつたものとして捉えられる。なお、弥生 0-(3) 期段階とした遺物はほとんどが小片であったが、器面をミガキ調整した鉢もしくは壺類であることや、口縁がやや外反しながら聞く形状のものが多いことが特徴としてあげられる。内湾する形状のものについては、外面を条痕文によって調整した浅鉢 [82・83] があり、口縁下部に無文帯は氷 I 式の要素を繋いだものと思われる。同じく弥生 1 期段階に比定した SI3 出土の壺 [129] についても、口縁部は刻みが施されているが口縁下から肩部あたりまでをナデ調整して無文帯としている。また、弥生 1 期に比定する遺物のなかで特徴的な資料としては、広口壺で指頭押圧した断面三角形の突帯を 2 条めぐらしたもの [89~92] がある。設楽博己氏が注目した「在地形突文壺」にあたる遺物であり、弥生 0-(3) 期より散見され、中部高地・東海東部・武藏・相模・西部関東地方・北陸地方までの広い分布が指摘されている。今回出土した遺物については、口縁部が外反する器形から弥生 1-(1) 期と比定したが、器面の条痕文は横方向または斜方向に不均一な調整が施されている。

条痕文による器面調整については、鉢類は横～斜方向、壺類は単斜方向にかきあげたものが多くみられた。なお、B 区河道出土の壺 [27] のような、弥生 1-(2) 期以降に顯著となる装飾的な要素の強い条痕文を施したものは、SI2・SI3 ともに出土しなかった。

その他、詳細な時期の比定は難しいが、小壺もしくは小壺の肩部片でカキ目状にひかれた 4 条の沈線の間に刺突文を施したもの [73]、ミニチュアサイズで口縁部の刻み目と口縁下部に無文帯があり、横方向の条痕文があるもの [28]、波状口縁で外面をミガキ調整したもの [75] などが出土している。

S13

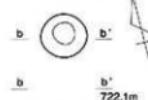


SI3 伊



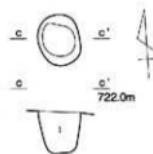
SE391
1 10YR3/3 瞬間
腐化最適食 損失少食 / 韌力強

Pit6



Pt6
1 10YR3/4 紫褐
2 10YR3/2 黑褐

PINZ



Pit7
1. 10X43.2 脲基-共价 脂化酶含 脂肪含 1.4% 脲

第16回 SI3

(3) 繩文時代の遺構・遺物

平成19年度調査時に確認した縄文時代中期末の包含層の他、今回の調査では同時期に比定する竪穴住居跡、曾利II式の土坑を検出し、同遺跡および同市における初事例となった。検出した遺構は、上層からSX1、SX2・3、SK1・4・6、SI5、SK2の他、時期は不明であるがSK3・5、SX4、ピットなどを発見した。

竪穴住居跡

SI5【第17図/第34図/図版11・20】

C区南端の西壁際、地表面からの深さ約3.5mの面で検出した。遺構の西側半分は調査区外に広がっており、北側は不整形の土坑状の掘り込みと重複していた。平面形状は円形を呈すものと推定し、検出範囲では、南北約4.27m、東西約2.12m、確認面からの深さは90cmを測った。調査区内では炉を確認することはできなかったが、遺構中央付近の基16層にあたる埋設土中で焼土の堆積が確認された。また、覆土中からは住居の構築材と考えられる炭化物を探取し、年代測定を実施している(第4章)。はっきりした貼り床などは確認できなかったものの、床面は非常に硬く締まった土層となっていた。なお、検出したピット6基のうち3基は深さ50cm前後と他に比べて深く、柱穴の可能性が窺えた。また、土圧による影響なのか、床面だけでなく柱穴内の覆土も極めて固く締まっていた。床面上近くでは、住居構築材と推定する炭化材(クリ)を検出した。

遺構の断面観察(調査区西壁面)では、基13~15層までのスコリアのレンズ状堆積がみられた。基15層としたスコリア層直下からは、曾利IV式古段階の遺物〔138~144〕が出土した。前述のとおり、基16層では焼土の堆積が確認でき、さらに小片であったが土器片の出土も確認された。その他、曾利II式段階の遺物〔145〕も1点のみ出土したが、掘り方または北側の搅乱等による混ざり込みと考えられる。

竪穴住居跡の年代については、床面や柱穴内などからの出土遺物がなく明確ではない。堆積状況を考慮すると、同遺構は曾利IV式段階までは廃絶し、埋没過程での2次の利用がされた後、火山灰の降下によって埋没したと推定できる。なお、富士火山との関連については、少なくとも多量に降り注いだ火山灰は竪穴の埋没段階に降下したものであり、住居廃絶の直接的な要因ではなかったことが窺える。また、焼土堆積については、住施設の廃絶後しばらく時間が経過してから、この場所が何らかの目的で利用された痕跡とみられ、おそらくは曾利IV式段階頃にあたるものと推定される。

土坑

SK1【第18図/第35図/図版12・20】

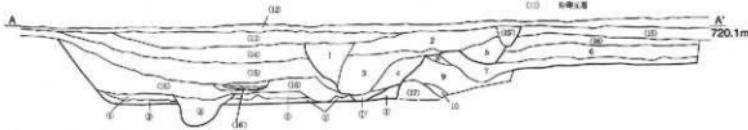
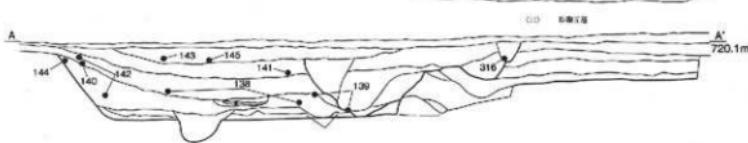
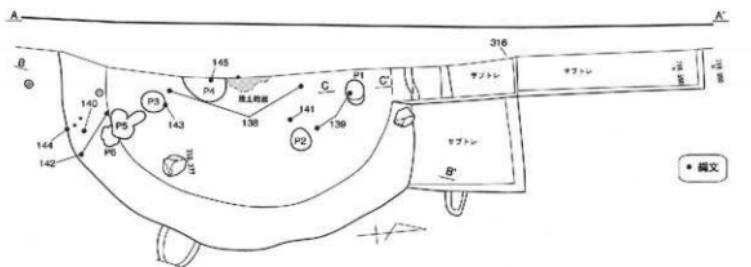
C区中央より南で検出した。地山層がはっきりせず、掘りすぎてしまった部分もあった。規模は長径2.18m、短径2m、深さは断面観察による計測で35cmを測った。確認面ではSI5と同じく、遺構プラン周辺にスコリアがみられたが、堆積量的に遺構内にレンズ状堆積したというよりは、遺構掘削時に上層の基15層より崩れ込んだスコリアと推定された。

出土遺物は曾利V式段階にあたり、曾利V式に比定する深鉢〔146~154・156〕、加曾利E式の小甕〔155〕などのほか、SK2周辺で出土した遺物と接合する曾利II式段階に比定する深鉢〔163〕などが出土している。

SK2【第18図/第36・37図/図版12・13・21】

西壁際で検出した。調査区外へ続いた形態は明確ではないが、検出範囲では約113cm、確認面からの深さ67cmを測り、円形を呈すものと推定する。土層観察ではSI5・SK1と異なり、遺構上面は基15層で覆われ、時期差は明確であった。なお、SK1同様に地山層がはっきりせず、遺構確認面である基16層部分が段状に掘り込まれるかたちとなつたが、断面観察からは遺構を掘削した影響で土壤の色調が変化しただけで、掘り方等ではなかった可能性も考えられた。

性格については、焼碟と焼土・炭化物が多量に出土しており、屋外炉の可能性も窺えた。遺物は曾利II式段階とする土器〔164~180〕が、碟の間や遺構側面に張りつくようなかたちで出土した。

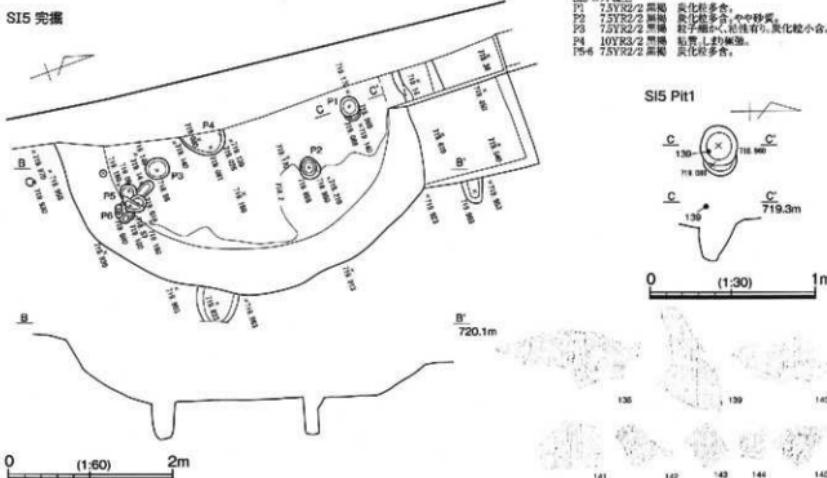


SI5 土壌

- ① 10YR2/2 黒褐色土・10YR3/3 細砂 土成土。炭化粒多含。
- ② 10YR2/3 黒褐色 土成土。炭化粒少含。
- ③ 10YR2/2 黒褐色 土成土。炭化粒少含。
- (12) 10Y3/3 黒褐色 火成岩・火山灰・溶岩・熱土成土。炭化粒多含。
- (13) 10Y3/3 黒褐色 1~2cmのスリップ層・火成岩・炭化粒多含。
- (14) 10Y2/2/1 黑褐色+10YR2/3 灰褐色 0.5~0.8cmの黒色スリップ層・0.1~0.3cmの黄褐色スリップ層。
- (15) 10YR2/1 黑褐色+10YR2/3 灰褐色 0.5~0.8cmの黒色スリップ層・0.1~0.3cmの黄褐色スリップ層。住居内堆積土。
- (16) 10YR2/1 黑褐色 灰化粒多含。住居内堆積土。(16)-30YR2/6 黑褐色 埋没後利用の火成岩。遺物出土。
- (17) 10YR2/3 灰褐色 核子細かい。0.5cmのスリップ層。

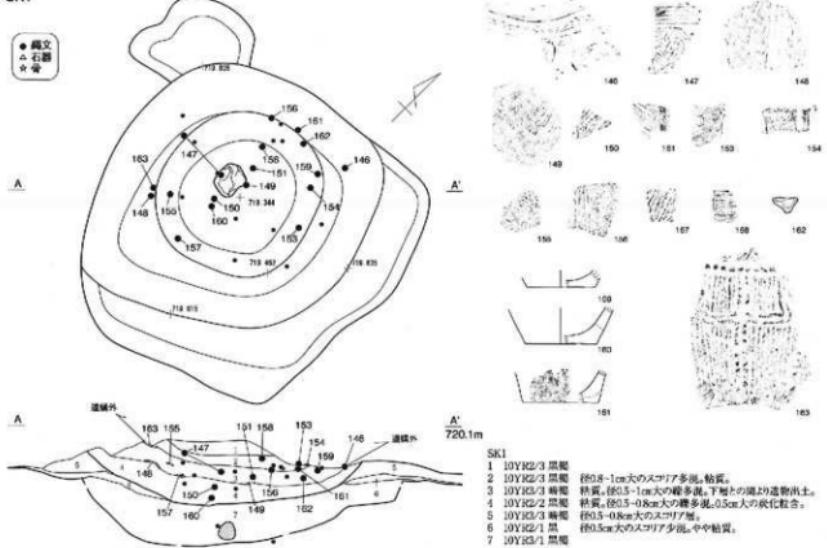
- SI5北端地質及びサブトレ
- 1 10YR2/2 黒褐色 程度km大的漂砾。(0.5~1m大的スリップ層・良泥化粘土・粘質・土状块状耕土上)。
 - 2 10YR2/2 黒褐色 程度km大的漂砾・スリップ層・良泥化粘土が多量。上部は塊状耕土。
 - 3 10YR2/2 黒褐色 黄褐色土上層・炭化粒多含。1mm粒径黄色漂砾・土状块状耕土。
 - 4 10YR2/2 黑褐色+10YR2/3 灰褐色 3mmと基本層17層の漂砾。1cm大的炭化粒多含。
 - 5 10YR2/2 黑褐色 黄褐色少含。0.5~0.8cmのスリップ層。
 - 6 10YR2/2 黑褐色 黄褐色少含。0.5~0.8cmのスリップ層。
 - 7 10YR2/3 黑褐色 6mm漂砾。やや黄色漂砾。
 - 8 10YR2/1 黑褐色 貫入。
 - 9 10YR2/3 黑褐色 黄褐色漂砾。
 - 10 10YR2/2 黑褐色 0.5~0.8cm大的スリップ層がワッカ状に堆積。

SI5 完鑿

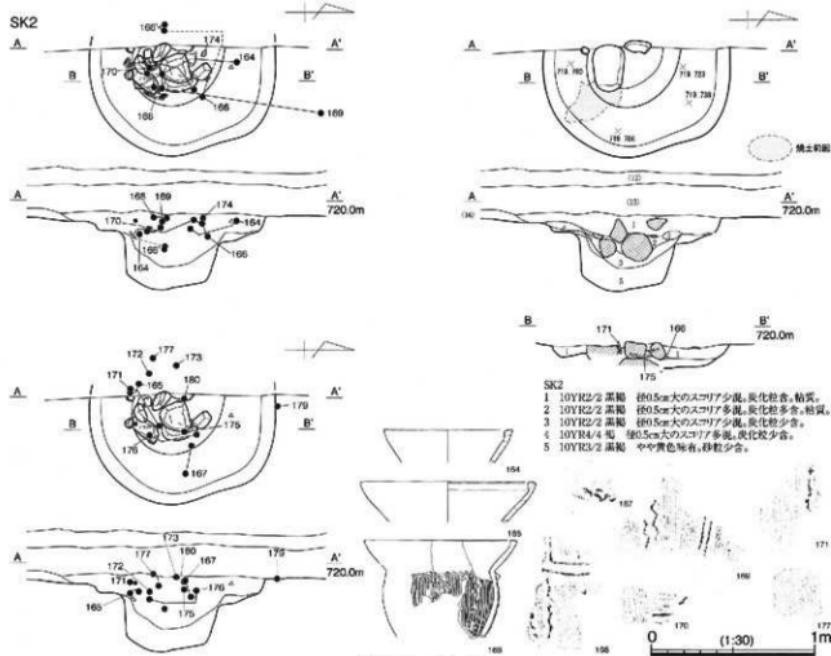


第17図 SI5

SK1



SK2



第18図 SK1・2

SK3【第19図/一/図版13】

長径77cm、短径68cmの円形を呈し、確認面からの深さ67cmを測った。底面はほぼ平で、柱痕や抜痕等は確認できなかった。SK5、SX4と直線上に並んでいるが、性格は不明である。出土遺物はなかった。

SK4【第19図/第37図/図版13・21】

調査区東壁際で検出した。遺構の東側は調査区外へ広がっており、検出した範囲では、径132cm、確認面からの深さは70cmを測った。断面観察から、SK1と同様に上層から掘り込まれた遺構であると断定した。またSK2と同様に、確認面の基16層部分が段状に掘り込まれるかたちになったが、基16層上面が遺構を掘削した影響で周辺の土壤の色調が変化した可能性が考えられる。

最も特徴的であったのは、埋め立てた土坑の上面に、深鉢口径で1/4程度の大きさにした土器片〔181〕を伏せて置き、その脇に礫を並べ、獸骨の混った黄褐色の粘土で覆った状況を確認した。断面観察では、粘土層はマウンド状に盛られた状況ではなく、覆土のうちの1層とみられた。なお、上層と下層で別遺構が重複している可能性も検討したが、下層からも同時期の土器片が出土し、骨片も検出されていることから、同一の遺構と判断した。出土遺物については曾利V式の土器〔182～194〕が出土した。

SK5【第19図/一/図版13】

長径66cm、短径63cmの円形を呈し、確認面からの深さ59cmを測った。SK3とはほぼ同規模であり、掘立柱建物等の可能性も検討したが、調査区内では検出できなかった。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

SK6【第19図/第37図/図版13・22】

調査区東壁際で検出した。確認できた範囲では径75.9cm、確認面からの深さ18.2cmを測り、円形を呈すものと推定した。SK1と同様に、東壁面の観察から上層の基15層上面からの掘り込みであることが確認でき、さらに基12層の火碎サージ推定層の堆積もみられた。出土遺物はいずれも小片であったが、曾利V式古段階の土器〔195～201〕が出土した。

表5 検出遺構一覧(竪穴住居跡・土坑)

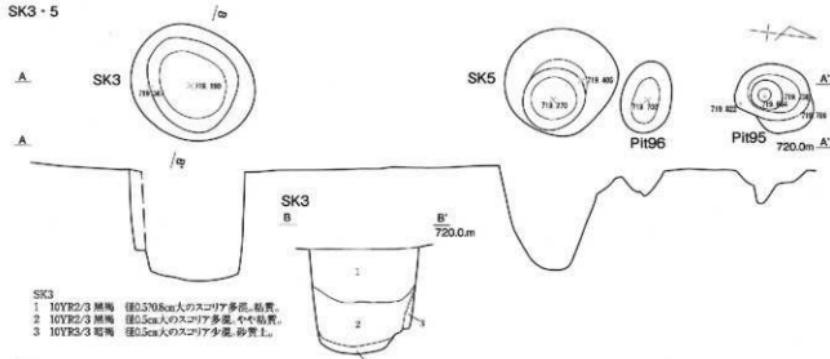
遺構名	位置	平面形状	時期	遺物	直径(m)	短径(m)	深さ(m)
SI1	C区	方形か	平安	○	3.57	[1.25]	0.21
SI2	C区	円形か	弥生	○	—	—	0.17
SI3	C区	円形か	弥生	○	(5.80)	—	0.20
SI4	C区	方形か	平安	○	(5.00)	—	0.20
SI5	C区	円形か	縄文	○	[4.27]	[2.12]	0.90
SK1	C区	不整形	縄文	○	2.19	2.00	0.35
SK2	C区	円形か	縄文	○	1.13	[0.67]	0.41
SK3	C区	稍円形	縄文	—	0.77	0.68	0.67
SK4	C区	円形か	縄文	○	1.32	[0.78]	0.70
SK5	C区	不整円形	縄文	—	0.66	0.63	0.59
SK6	C区	円形か	縄文	○	0.759	[0.511]	0.182

ピット【第20～22図/一/一】

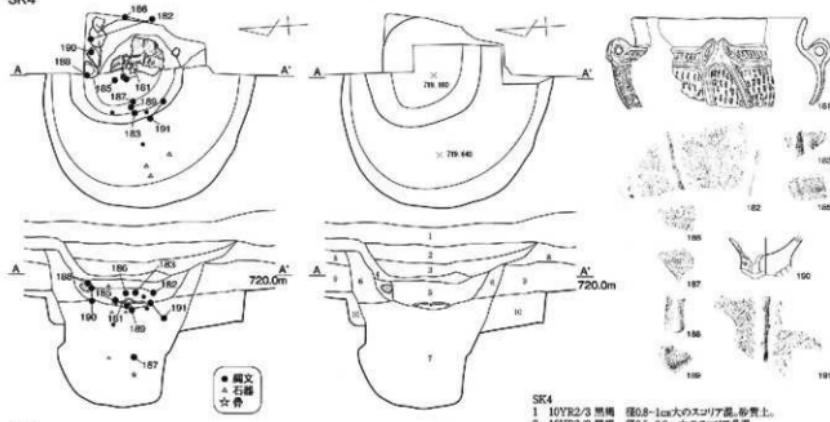
今回の調査ではSI5以外に柱穴と断定できるものはなかったが、それ以外では計106基を検出した(表6)。特徴として覆土はほぼ1層であり、底面の整ったものは少なく、平面形状も不整形なものが多くみられた。

周辺調査の事例では、本遺跡よりも北に立地する上暮地新屋敷遺跡において検出された217基の土坑のうち、降灰や火碎流によって燃えた木根の痕跡を焼木痕として報告されている。同報告では掘り込み面がスコリア直であること、覆土上層に炭化物を多量に含むこと、遺物を伴わないこと、形状が不定形で底面に凹凸があり、分布に規則性がないことを共通点としてあげている。今回の調査で検出したピットは、焼木痕に比べて規模は小さく、覆土中に炭化物が明確に混在するものはなかった。しかしこれらの相違点は、当時の環境や植生、また降灰もしくは土石流などの埋没状況などの違いによるものとも考えることができ、土地様相の違いを考える上で重要な検討材料として捉えられよう。

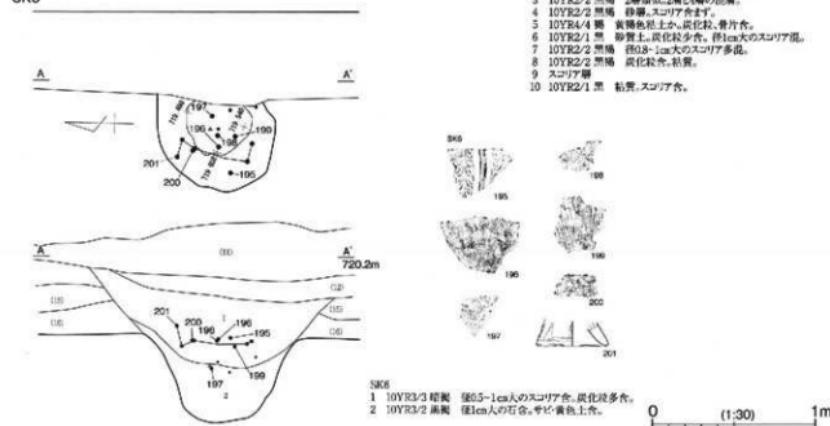
SK3・5



SK4



SK6

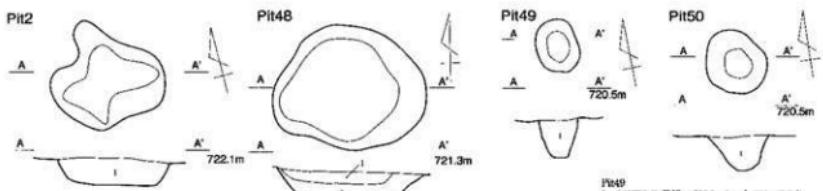


第19図 SK3~6, Pit95・96

表6 検出遺構一覧(ピット)

遺構名	位置	平面形状	時期	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
Pit1	C区SI1	円形	平安	345	28.0	13.5
Pit2	C区	不整形	平安か	46.5	38.7	10.0
Pit3	C区	楕円形	—	39.9	32.8	11.0
Pit4	C区	不整円形	—	19.7	18.4	22.0
Pit5	C区	円形	—	17.5	16.4	21.0
Pit6	C区	円形	弥生か	18.8	17.5	19.0
Pit7	C区	楕円形	弥生か	20.7	16.4	16.8
Pit8	C区	不整楕円形	—	49.1	36.4	25.0
Pit9	C区	不整円形	—	31.2	27.0	10.0
Pit10	C区	不整円形	—	30.8	28.1	16.0
Pit11	C区	不整椭円形	—	46.0	36.8	12.0
Pit12	C区	楕円形	—	22.8	19.9	13.5
Pit13	C区	不整椭円形	—	33.2	21.0	11.5
Pit14	C区	楕円形	—	21.3	13.9	4.5
Pit15	C区	不整椭円形	—	22.2	12.7	5.0
Pit16	C区	楕円形	—	21.6	16.4	8.5
Pit17	C区	円形か	—	31.6	[19.8]	10.0
Pit18	C区	円形	—	25.2	15.7	11.0
Pit19	C区	楕円形	—	53.3	16.3	13.5
Pit20	C区	—	—	27.0	29.8	7.5
Pit21	C区	不整円形	—	16.9	21.4	8.0
Pit22	C区	不整椭円形	—	24.3	23.6	11.0
Pit23	C区	不整円形	—	30.1	15.8	11.5
Pit24	C区	円形	—	22.4	15.6	16.3
Pit25	C区	円形	—	24.8	21.6	10.3
Pit26	C区	楕円形	—	23.7	39.2	11.8
Pit27	C区	楕円形	—	21.4	25.4	12.3
Pit28	C区	不整円形	—	23.5	21.6	13.8
Pit29	C区	不整椭円形	—	52.8	39.2	14.8
Pit30	C区	不整形	—	31.6	25.4	10.6
Pit31	C区	不整椭円形	—	28.6	16.2	10.9
Pit32	C区	楕円形	—	30.1	26.3	10.8
Pit33	C区	楕円形	—	41.2	34.1	11.0
Pit34	C区	不整円形	—	16.9	14.7	11.0
Pit35	C区	円形	—	19.5	18.6	13.6
Pit36	C区	不整円形	—	19.5	16.7	9.0
Pit37	C区	不整形	—	22.4	19.8	10.9
Pit38	C区	不整形	—	43.0	21.5	11.5
Pit39	C区	円形	—	22.9	21.3	13.0
Pit40	C区	円形	弥生か	25.3	23.5	11.0
Pit41	C区	楕円形	—	43.9	34.7	11.6
Pit42	C区	不整椭円形	—	49.4	34.1	18.0
Pit43	C区	円形	弥生	28.1	26.5	10.5
Pit44	C区	楕円形	弥生	38.3	33.2	8.5
Pit45	C区	楕円形	弥生	21.3	18.8	9.5
Pit46	C区	不整形	弥生	27.9	25.1	6.5
Pit47	C区SI4	楕円形	平安	54.0	42.0	16.0
Pit48	C区	不整椭円形	縦文	62.3	50.8	13.0
Pit49	C区	楕円形	縦文	22.0	16.7	16.4
Pit50	C区	不整円形	縦文	27.2	23.6	13.6
Pit51	C区	楕円形	縦文	35.9	33.9	13.6
Pit52	C区	不整椭円形	縦文	28.4	27.2	14.0
Pit53	C区	円形	縦文	27.8	25.5	13.4

遺構名	位置	平面形状	時期	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
Pit54	C区	不整椭円形	縦文	28.3	23.0	32.8
Pit55	C区	不整椭円形	縦文	41.7	33.8	9.0
Pit56	C区	不整椭円形	縦文	38.2	31.3	12.0
Pit57	C区	不整形	縦文	25.5	24.9	9.1
Pit58	C区	不整円形	縦文	18.9	17.4	7.2
Pit59	C区	不整円形	縦文	26.0	24.9	14.5
Pit60	C区	円形	縦文	15.2	14.6	8.0
Pit61	C区	不整円形	縦文	18.8	18.4	5.6
Pit62	C区	不整椭円形	縦文	27.2	18.7	6.8
Pit63	C区	不整椭円形	縦文	33.9	24.4	9.0
Pit64	C区	不整椭円形	縦文	33.6	29.4	11.0
Pit65	C区	不整椭円形	縦文	40.4	34.6	7.2
Pit66	C区	不整椭円形	縦文	44.0	33.3	8.0
Pit67	C区	楕円形	縦文	56.4	40.0	8.4
Pit68	C区	円形	縦文	18.0	17.9	11.6
Pit69	C区	円形	縦文	26.9	24.4	8.5
Pit70	C区	円形	縦文	47.7	44.5	8.7
Pit71	C区	円形	縦文	19.7	17.3	8.7
Pit72	C区	楕円形	縦文	22.1	18.9	13.0
Pit73	C区	円形	縦文	30.5	28.5	13.0
Pit74	C区	円形	縦文	20.1	18.4	7.2
Pit75	C区	円形	縦文	27.2	25.3	11.2
Pit76	C区	円形	縦文	18.7	18.4	8.0
Pit77	C区	不整椭円形	縦文	51.9	41.7	11.4
Pit78	C区	不整椭円形	縦文	66.8	54.5	14.8
Pit79	C区	楕円形	縦文	48.3	39.9	24.8
Pit80	C区	円形	縦文	25.7	24.1	14.0
Pit81	C区	—	縦文	28.4	-28.0	19.6
Pit82	C区	円形か?	縦文	40.2	38.9	5.6
Pit83	C区	円形	縦文	24.2	23.9	4.8
Pit84	C区	楕円形	縦文	43.1	23.9	9.9
Pit85	C区	円形	縦文	58.0	53.5	13.8
Pit86	C区	円形	縦文	54.4	49.2	7.2
Pit87	C区	円形	縦文	40.0	39.2	4.8
Pit88	C区	—	縦文	69.7	[38.6]	30.5
Pit89	C区	不整椭円形	縦文	62.5	41.0	13.0
Pit90	C区	不整椭円形	縦文	102.7	70.7	25.2
Pit91	C区	楕円形	縦文	44.9	39.3	44.2
Pit92	C区	円形か?	縦文	38.1	33.9	17.1
Pit93	C区	楕円形	縦文	63.6	46.0	16.2
Pit94	C区	円形	縦文	27.5	26.9	11.0
Pit95	C区	不整形	縦文	49.1	36.9	19.0
Pit96	C区	楕円形	縦文	44.5	30.6	13.0
Pit97	C区	円形	縦文	31.3	30.6	7.0
Pit98	C区	円形	縦文	40.9	40.0	9.0
Pit99	C区	楕円形	縦文	23.6	18.1	9.0
Pit100	C区	楕円形	縦文	27.0	23.0	11.0
Pit101	C区	楕円形	縦文	38.7	29.8	19.0
Pit102	C区	楕円形	縦文	26.6	23.6	5.5
Pit103	C区	円形	縦文	28.1	27.5	5.5
Pit104	C区	楕円形か?	縦文	56.1	[38.9]	10.1
Pit105	C区	楕円形か?	縦文	63.7	[45.6]	9.1
Pit106	C区	円形	縦文	30.1	28.5	7.1

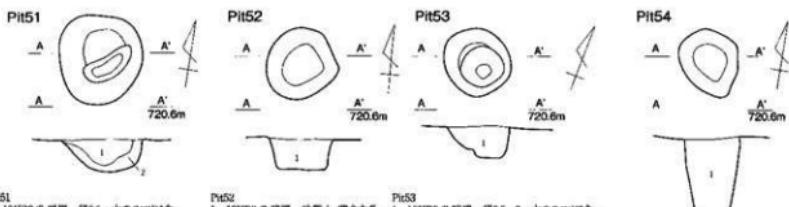


Pit2
1 10YR2/3 帯褐 砂質土上粒多含。

Pit48 (A面)
1 10YR3/3 帯褐 上より強2層より黑色地塊。径1~2cm大球少含。
2 10YR3/3 帯褐 黑色チブロック多含。径2~3cm大の球状。

Pit49
1 10YR2/3 黒褐 径0.5~1cm大のスコリア含。やや粘質。

Pit50
1 10YR2/3 黑褐 径0.5~1cm大のスコリア含。やや粘質。

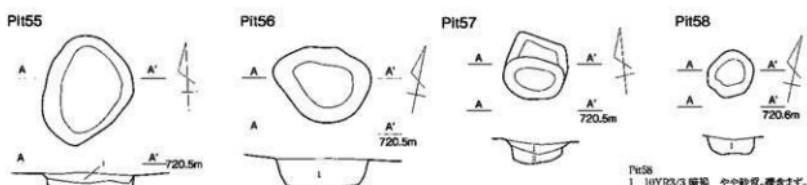


Pit51
1 10YR2/3 黑褐 径0.5cm大のスコリア含。砂質土上。

Pit52
1 10YR3/3 帯褐 砂質土。球含まず。

Pit53
1 10YR3/3 帯褐 径0.5~2cm大のスコリア含。砂質土。

Pit54
1 10YR2/2 黑褐 径0.5~2cm大のスコリア含。砂質土。

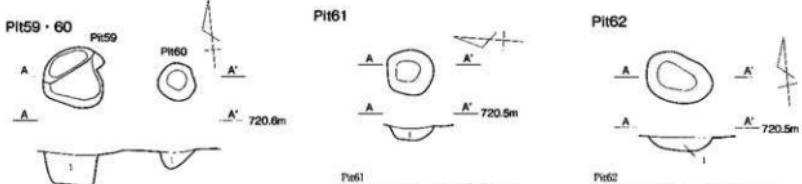


Pit55
1 10YR2/3 帯褐 径0.5cm人のスコリア含。やや粘質。
2 10YR3/4 帯褐 球含まず。やや粘質。

Pit56
1 10YR3/3 帯褐 砂質土。しり張。

Pit57
1 10YR2/3 帯褐 径5cm大の塊状。しり張。
2 10YR3/4 帯褐 径5cm大の塊状。しり張。

Pit58
1 10YR2/3 帯褐 やや砂質。球含まず。



Pit59
1 10YR3/3 帯褐 径5cm大の塊状。しり張。

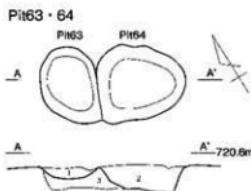
Pit60
1 10YR3/3 帯褐 径5cm大の塊状。しり張。

Pit61
1 10YR3/3 帯褐 やや砂質。球含まず。

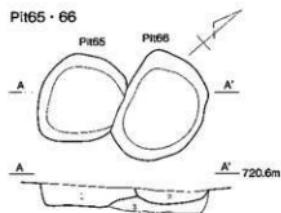
Pit62
1 10YR3/3 帶褐 径5cm大の塊状。しり張。

0 (1:20) 1m

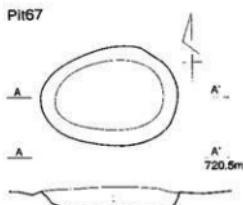
第20図 ピット①



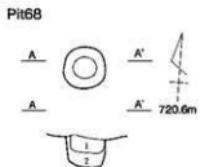
Pit63・64
1 10YR3/3 埋場 径5cm人の埋没。しまり無。Pit63覆土。
2 10YR3/3 埋場 径5cm人の埋没。しまり無。Pit64覆土。
3 地山。



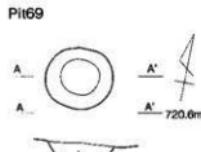
Pit65・66
1 10YR3/3 埋場 径5cm人の埋没。しまり無。Pit65覆土。
2 10YR3/3 埋場 径5cm人の埋没。しまり無。Pit66覆土。
3 地山。



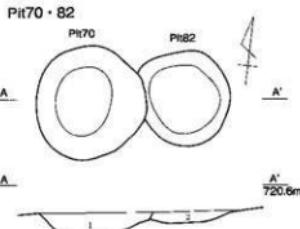
Pit67
1 10YR3/3 埋場 径5cm大的埋没。しまり無。
2 10YR3/3 埋場 径5cm大的埋没。しまり無。Pit67覆土。
3 地山。



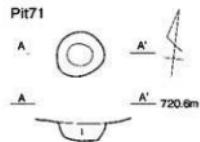
Pit68
1 10YR3/3 埋場 砂質土。サビ合。径5cm大的埋少合。



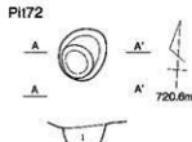
Pit69
1 10YR3/3 埋場 やや粘質。徑5cm人の埋没。



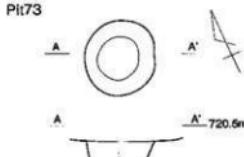
Pit70・82
1 10YR3/4 埋場 径0.5~3cm大的埋没。砂粒多合。しまり無。Pit70覆土。
2 10YR3/3 埋場 砂質土。粒子細かく。しまり無。Pit82覆土。



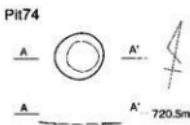
Pit71
1 10YR3/4 埋場 径0.5~3cm大的埋没。しまり無。



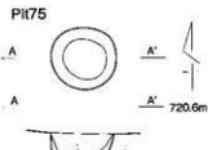
Pit72
1 10YR2/3 埋場 砂質土。しまりやや弱。徑0.5~1cm大的埋少合。



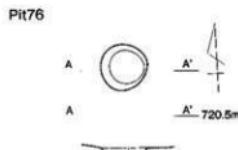
Pit73
1 10YR3/3 埋場 径0.5~1cm大的埋多混。しまり無。



Pit74
1 10YR2/2 埋場



Pit75
1 10YR3/3 埋場 砂質土。徑0.5~3cm大的埋少合。

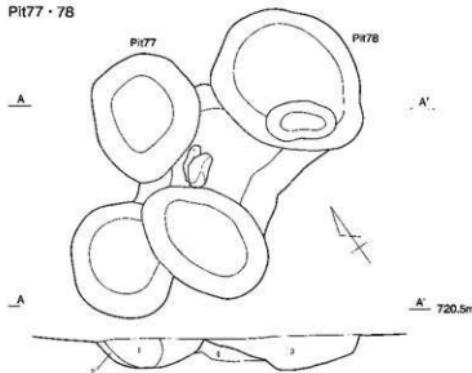


Pit76
1 10YR3/3 埋場 砂質土。徑0.5cm大的埋少合。
2 10YR3/3 埋場 砂質。しまり無。

0 (1:20) 1m

第21図 ピット②

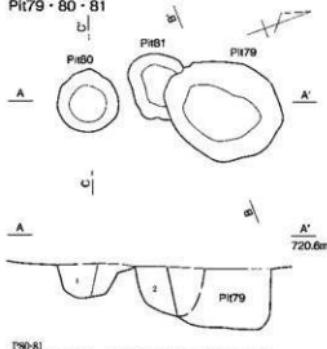
Pit77・78



Pit79

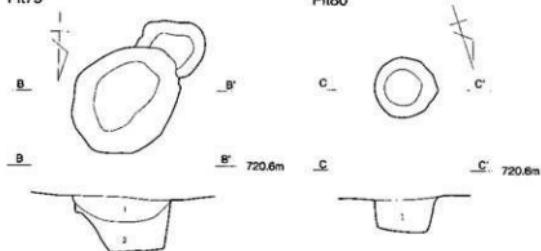
- 1 10YR3/3 砂質 砂質土。径0.5m大的礫多量。Pit77覆土。
2 10YR2/2 黄褐色 色化鉄多量。径0.5~3cm人の頭蓋。Pit77覆土。
3 10YR3/2 黄褐色 砂質土。6805~2cmの大粒少量。しり鉄。色化鉄多量。Pit78覆土。
4 10YR2/2 黄褐色 砂質土。径0.5m大的礫少量。地山。

Pit79・80・81

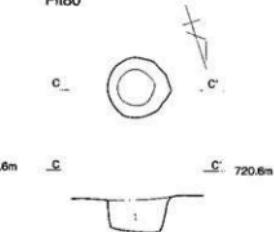


- Pit81
1 10YR2/2 黄褐色 径0.8cm大的礫多量。やや粘質。Pit80覆土。
2 10YR3/4 黄褐色 砂質土。しり鉄や鉄。Pit80覆土。

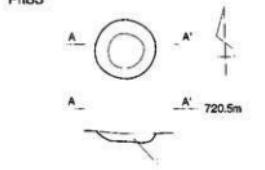
Pit79



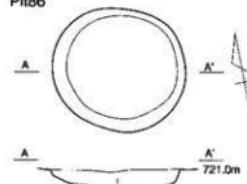
Pit80



Pit83

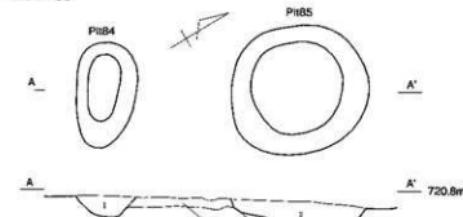


Pit86



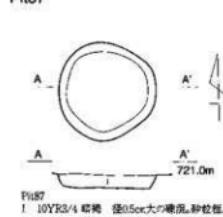
- Pit86
1 10YR3/4 黄褐色 径0.5cm大的礫多量。鉄柱跡。

Pit84・85



- Pit84
1 10YR3/3 砂質 Pit84覆土。
2 10YR2/4 砂質 砂質土。径4cm大的礫少量。鉄柱跡。Pit85覆土。
3 地山。

Pit87



- Pit87
1 10YR3/4 黄褐色 径0.5cm大的礫多量。鉄柱跡。

0 (1:20) 1m

第22図 ピット③

不明遺構

SX1 【第23図/第38図/ 図版13・22】

C区南側、基10層で確認した。加曾利E式の土器〔202〕とその周辺に同固体と推定する細かい土器片が散在していた。性格については不明であるが、調査時の観察で剥離した破片が周囲に散在していたことから、河川による流れ込みとは異なり、その場所で何らかの目的で使われたものである可能性が窺えた。

出土した土器は口縁から胴部までの破片であり、口径では1/4ほどの大きさであった。内側を上向きにして置かれ、炭化物等は目立たないものの、土器自体も被熱により剥離した痕跡がみられた。

調査範囲内では同型式の土器は相対的に少なく、同一個体と推定するB区〔205〕、遺構外〔325〕以外に目立った出土はなく、すべて加曾利E式に比定するものであった。

SX2 【第23図/第38図/ 図版14・22】

C区北側において、ほぼ完形に近い土器が埋もれていた土坑状の掘り込みをSX3内で検出した。

この土器については、加曾利E式系の有溝小把手土器に類するもので、複節繩文を施したU字状の縄文帯と、渦巻状のモチーフがみられる。平成19年度の調査では、土器内に磨製石斧と黒曜石を入れて埋納したアボ遺構が検出されており、検出した段階にこれに類似する遺構の可能性を考慮して、SX2とした。

土器上面は基11層の砂粒に覆われており、非常に硬く締まった土層の下で確認した。土器周辺は長径64cm、短径48cmほどの不整形の窪地となっていた。しかし流水の影響を受けており、人為的に掘られたものであるか、はっきりしなかった。また土器周辺では流水による南側から北側への砂粒の動きがみられ、土器内部からの出土物もなく、砂粒が充填していたのみであった（図版14-2・6）。

これらの状況から、土器がこの場所で使用されたもののかは明確ではないが、最終的には自然埋没したものと推定した。なお、土器内の堆積土（砂）は取上げて計量し、フローテーションを試みたが特に内容物は確認できなかった。その他、周辺からは土製円盤〔207〕（SX3）が出土している。

SX3 【第24・25図 / 第38~42図 / 図版14・15・22~26】

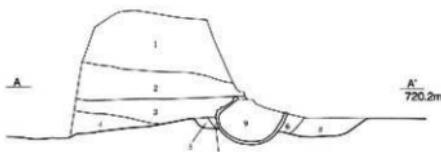
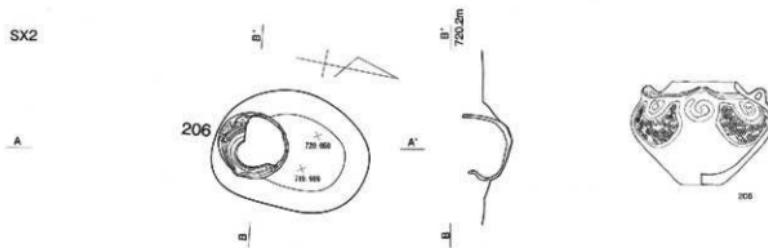
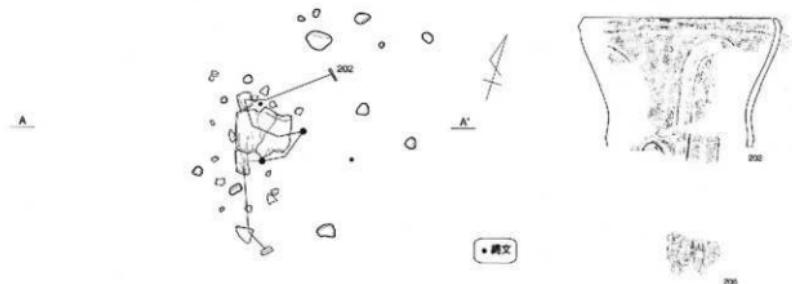
C区北側で確認した。旧流路による堆積の一部と思われ、砂層部分より遺物が多量に出土した。住居跡・水場・土器捨て場などを想定し、人為的な痕跡の有無について注視しながら調査した。

上層観察では、SX3とした覆土は基15層の上に堆積した砂質土で、主に曾利V式期を包含する層であった。上杉氏のご教示により、基12層がSX3部分では途切れ、部分的な堆積となっている状況を確認した。また同層が途切れている部分から遺物が多数出土する傾向があり、SX2もこの一部にあたることから、水流による影響を受けた堆積であると推定した。

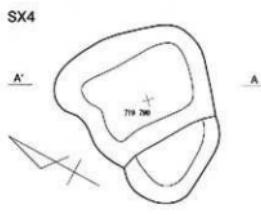
その他、上層の基11層の砂質土や礫層が入り込んでいる状況から、雪代などの土石流が覆い被っていることが推定された。同層については、遺物を含む砂質土に切り込まれている状況もみられ、不安定な土壤であったと考えられる。また、B区旧河道等の河川堆積と異なり、一定のレベルから遺物がまとまって出土しており、土器の断面が比較的摩耗していない遺物が出土している。但し、微量ではあったが、検出された礫は富士山系の石質だけではなく、大沢川によって運ばれた丹沢山地系の緑色凝灰岩～頁岩と推定する石も含まれていた。その他、周辺地域にはないチャート（図版15-7）なども検出した。遺物の分布では層序的なまとまりはみられたが、平面的には不明瞭で人為的な痕跡がみられなかつたことから、水場や土器捨て場に近い性格と推定した。但し、遺物の接合関係はあまりなく、大半は小片なものが多くみられた。出土遺物は、曾利V式期を中心とする土器片〔207~305〕などが多数出土した。

SX4 【第23図/ - / -】

C区南端で確認した。炭化物を含み、不整形で縦70cm、横53cm深さ8cmを測った。人為的な痕跡はみられず、窪地に上面のスコリア層が堆積しており、木根跡等の可能性が窺えた。



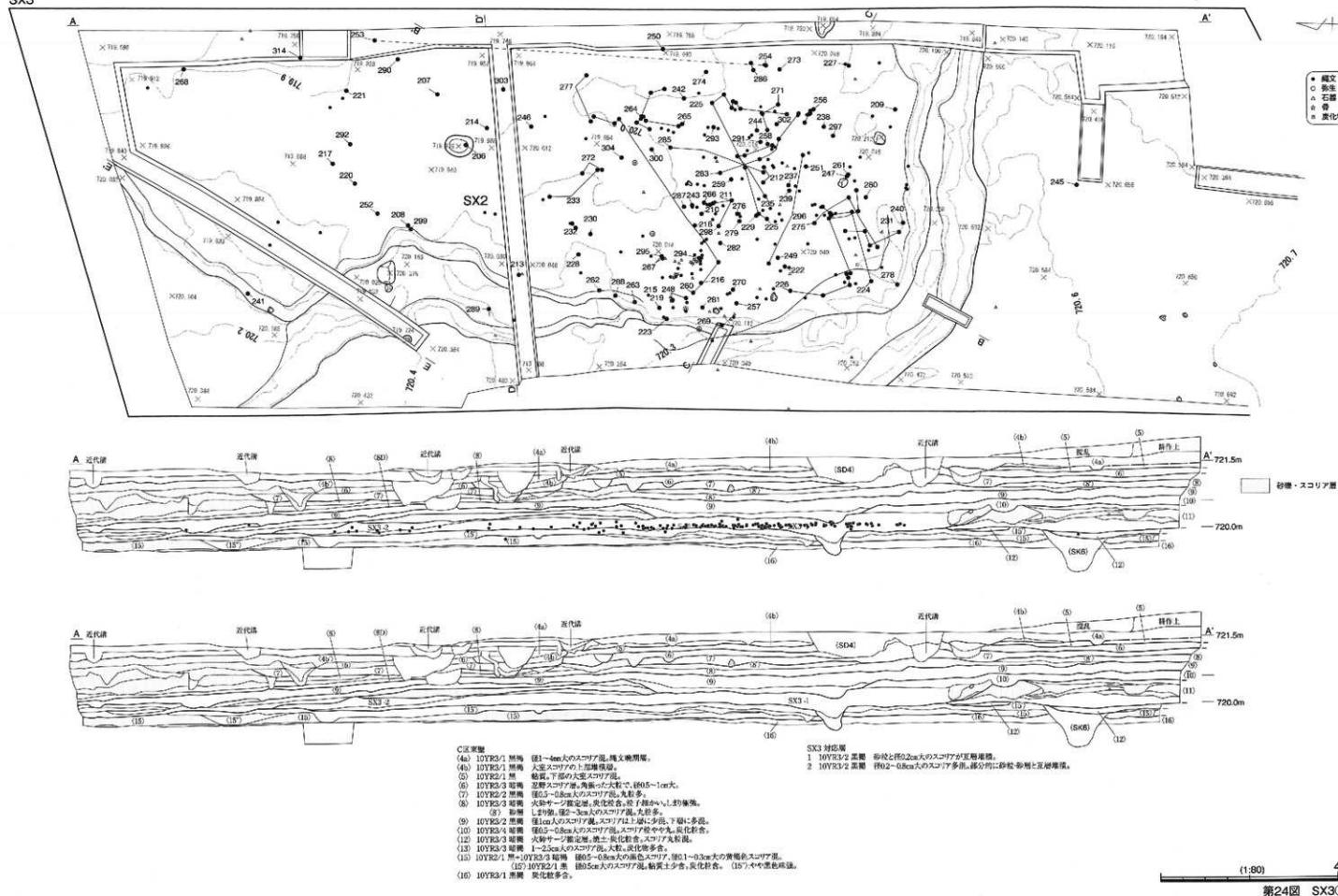
- SX2**
- 1 10YR2/4 砂質 形質土。径0.5~1cm大のスコリア混。
 - 2 10YR2/3 黒褐 地質土。互層。スコリアほとんど含まず。
 - 3 10YR2/3 黒褐 地質土。互層。スコリア少混。
 - 4 75YR2/3 黑褐 径1cm大のスコリア多混。
 - 5 10YR3/4 砂質 斜面多合。7層との混層。
 - 6 10YR2/3 砂質 スコリア混合。砂質土。
 - 7 10YR2/3 砂質 径0.3~0.6cm大のスコリア多混。
 - 8 10YR2/3 黑褐 径0.5~0.8cm大のスコリア混。砂質土。
 - 9 10YR2/2 黑褐 砂層。粒子種が混。土層内埋積砂。

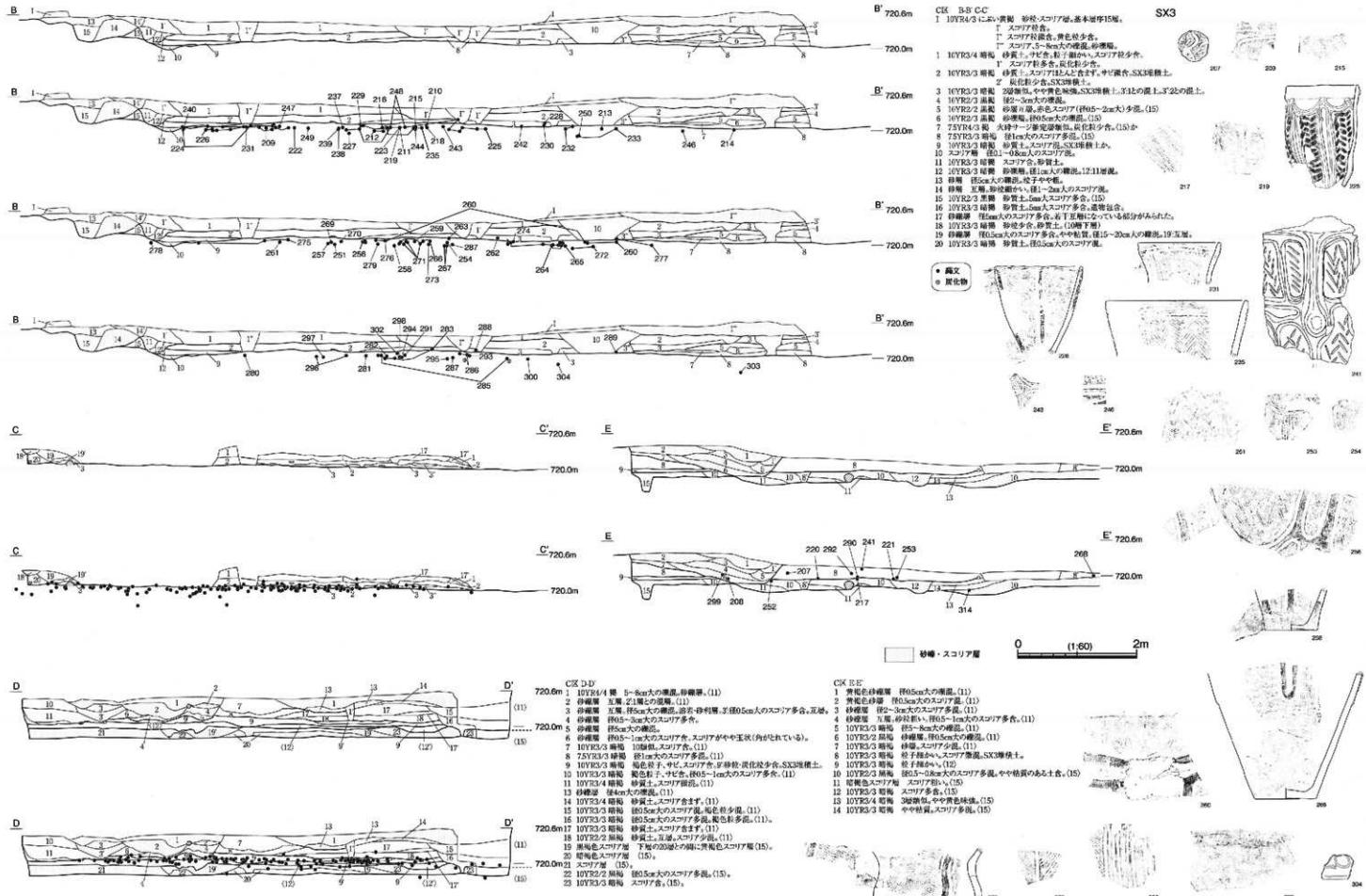


- SX4**
- 1 10YR4/6 棕褐色 径0.5cm大のスコリア混。炭化物含。
 - 2 10YR2/1 黑色 径1cm大のスコリア混。

0 (1:20) 1m

第23図 SX1・2・4





縄文時代の出土遺物について

今回の調査で出土した同時代の遺物は、一個体の重さの違いはあるものの、出土した遺物の重量比では全体の79.8%、取上点数でも61.6%と最も多かった。主に縄文時代中期後半にあたる曾利II～V期段階までの遺物が出土し、僅かであったが縄文時代後期の遺物〔327～329〕が出土している。

曾利式土器の時期については、今福利恵氏の編年（今福2011）を参照して分類を試みた。なお、今福氏は、甲府盆地及びその周辺を中心として隆帯による施文技法の変化から編年を再検討し（第50回）、曾利II式・IV式についてはそれぞれ古段階と新段階、曾利V式については古段階・中段階・新段階と細分されている。今回出土した遺物の大半が破片資料であったことや、筆者の浅学のため詳細な位置づけが不十分なところもあり、この点についてはご叱正を頂戴し、今後の検討のなかで修正していくことにしたい。また、第26回で示したように、本調査区では厚く堆積した火山灰により、時期ごとに遺物の出土レベルが異なる状況が認められた。縄文時代についても、火山灰層によって、土器剣式を一定の時間枠のなかで位置づけられる可能性がある。詳細は総括で述べることにし、ここでは編年ごとに文様等の特徴に触れておくことにする。

曾利II式段階

曾利II式の遺物としては、基15層下で検出したSK2出土の遺物の他、掘削時の混入と思われるSI5の〔145〕やSK1の〔163〕、遺構外からはC区北側のサブトレで検出した〔314〕などがある。主な文様としては、半截竹管による条線を地文とし、粘土紐の貼付による頭部文様帶および胴部懸垂文としての隆線や波状隆線、胴部に3本の隆線からなる隆帯で施したJ字状もしくは渦巻状のモチーフなどがみられた。なお、SK2出土の〔166・167〕は、口縁部は無文で頸部に〔167〕は2段、〔166〕は1段の波状隆線があり、後者には隆線による渦巻文と、2本の隆線による波状懸垂文を施している。また、2本単位もしくは縁取り状に施した隆線が〔163・168〕などにみられる。同時期には纏手状に延びるモチーフなどが知られるが、〔163〕では胴部の最大径となる高さの位置に懸垂文から横方向に延び、上方方向へ鋭角に曲げられている。また、〔163〕は口縁部に斜行条線が施され、頭部にある1段の隆線と胴部の2本の懸垂文には半截竹管による刻みがある。〔145・314〕についても懸垂文上に半截竹管による押引を施しており、曾利I期段階の要素がみられることから、他よりも古手の様相にあたるものと比定した。

曾利IV式段階

調査区全体の出土量からは少ないが、SI5内に堆積した基15層直下から〔138～144〕、SX3から綾杉状の条線と蛇行沈線がみられる〔208～211、214～224〕が出土した。SI5の遺物は胴部破片のみで、地文の縦位条線上に沈線による2本単位の懸垂文と波状沈線文を施しており曾利IV式古段階に比定した。SX3出土の特徴的なものでは、口縁部内側が受け口状を呈しているもの〔209〕、時期は明確ではないが、長くやや深めに施文した櫛描条線があるもの〔216・217〕などが出土した。

曾利V式段階

SX3出土資料をはじめ、縄文時代の出土遺物の大半がこの段階に位置付けられたが、小片が多く時期の比定が難しいところもあった。しかし前述のとおり、同一層からの出土であるため、一定の時間枠のなかに位置づけられる点では良好な資料といえる。なお、比較的器形が判別できる資料もあり、バラエティに富んだ文様構成をみることができた。

出土資料の特徴としては、隆帯による区画の有無で文様の施文に違いをもつ点などがあげられる。まず、この段階の特徴的な遺物として、隆帯によるつなぎ弧文に2本単位で縦位区画する〔225〕、口縁部文様帶を省略して縦位の低隆帯を施す〔226〕があげられる。これらは隆帯とともに、隆帯脇を幅広の沈線が沿って縦コ字状の区画を持つ。区画内には櫛描条線を充填するが、〔225〕については口縁部の文様から前段階の要素が残り、〔212・213〕についても若干肥厚帶口縁部のモチーフを残しているものと思われる。

隆帯の有無からみると、隆帯をもつものでは1本もしくは2本の隆帯によって渦巻文〔146〕や窓枠区画〔241〕、縦位、H字状・U字状の隆帯〔228～230・247・256～269・271・272〕がある。いずれも隆帯脇を指

ナデによる幅広の沈線が沿っている。SK4出土の遺物〔181〕については、口縁部は無文で肩部の把手を繋ぐ窓枠状の隆帯、およびその脇に沿う幅広の沈線により横位の橢円形もしくは方形の区画がめぐっており、把手の下から延びる2本の隆帯によって縦位の区画をなしている。区画内は櫛歯刺突、櫛描条線、ハの字文などを充填している。なお、曾利IV・V式段階とともに口縁部の隆帯が省略されて横位沈線および沈線区画となるもの〔147・148・208～211・231・235～238・247・249〕が出土した。

その他、特徴的な遺物としては、台付土器〔190・201〕、波状口縁で沈線による渦巻文・区画文・ハの字文を施すもの〔242・243〕、地文は無文で2本の沈線による弧線文がめぐるもの〔253・254〕などが出土している。

加曾利E式

出土量は少ないが、曾利V式段階の遺物とともに出土している。SX1、SX2とした土器出土地点では、ともに加曾利式土器が出土した。SX1の〔202～205〕はキャリバーの深鉢で加曾利E4式に比定する。今回の出土遺物のなかでも法量が最も大きい土器であり、また確認した縄文時代中期末の層位では最も高い位置から出土した。縄文地文で口縁下に横位で1本、胴部に逆U字状に2本の山形の低隆帯を施し、その間を磨り消しを施している。SX2の〔206〕については、加曾利E式系の有溝小把手土器に類するもので、複節縄文を施したU字状の縄文帯と、渦巻状のモチーフを施している。

このほか、地文に縄文を用いた遺物は、〔274～284・324・325〕などがある。なお加曾利式の特徴以外に、縄文を施しているが、2本の隆線や波状隆線のある〔324〕や、櫛歯刺突とともに隆帯状に縄文を施す〔326〕など、曾利式などの影響がみられる遺物が出土している。

縄文時代後期

ごくわずかだが、磨り消し縄文が施された称名寺式の土器片〔327～329〕が出土している。基8層内の砂礫層からの出土で、土石流等により混入したものと思われる。

(4) その他の遺構

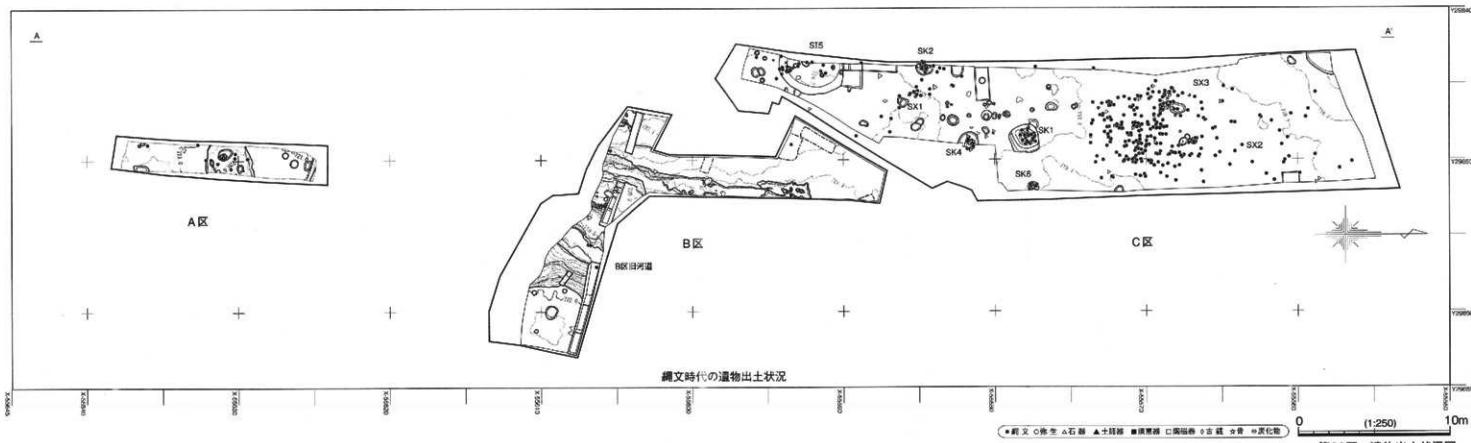
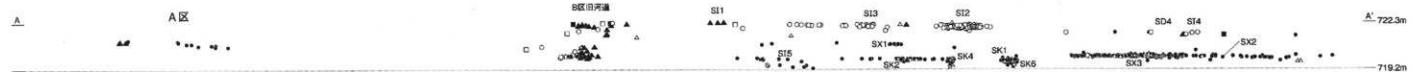
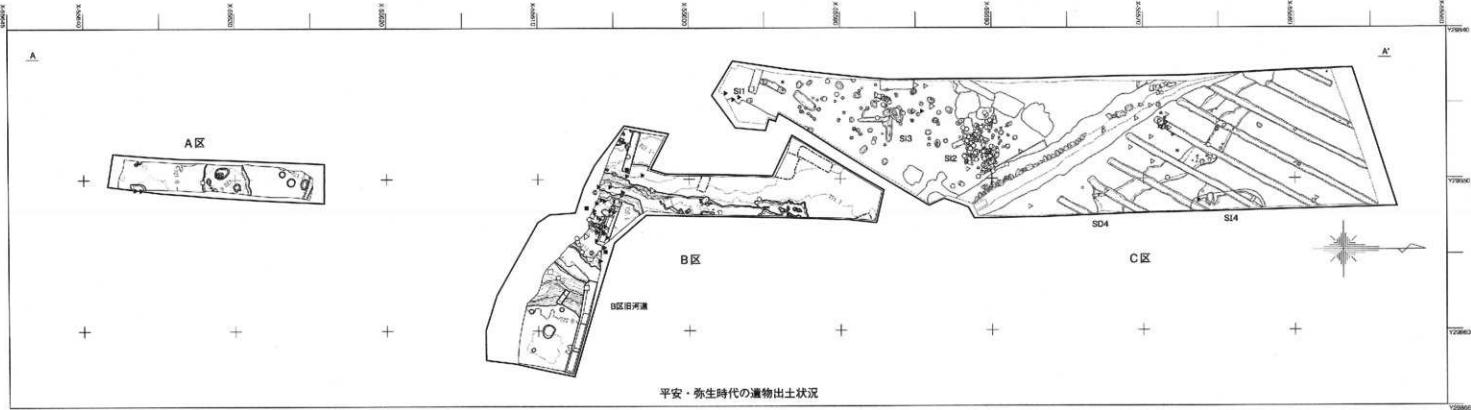
旧河道【第7・8図/第30図/図版4～6】

今回の調査区では、各調査区において流路の痕跡を確認した。今日では小佐野川と大沢川の合流点は護岸工事によって固定されているが、楡丸尾第1溶岩流の流出をはじめ、降灰や洪水の影響を受けて時代によつて流路が移り変わってきたことが堆積状況から窺えた。前述のとおり、堆積状況の観察から調査区内においては少なくとも3段階の流路変遷が窺え、平安時代の河床面を確認することができた。流路の方向や範囲については明確ではなかったが、堆積状況の観察から流路の変遷推定図を第7図中に示した。

遺物の出土状況については、既に各時代ごとに述べたが、旧河道では弥生時代、平安時代の遺物が多数混在した。中でも平安期の遺物は、B区内取上点数の約60%を占め、主に10世紀段階の遺物の混在が多く認められた。また、中世陶器片の〔46〕等の出土から、流路が最終的に埋没した年代は12世紀以降と推定される。なお、弥生期の河床面は平安期の流れで削平されて不明瞭であったが、縄文期にはさらに西側を北～北西方向に流れていたものと推定した。

C区近代溝【第28図/一/図版8】

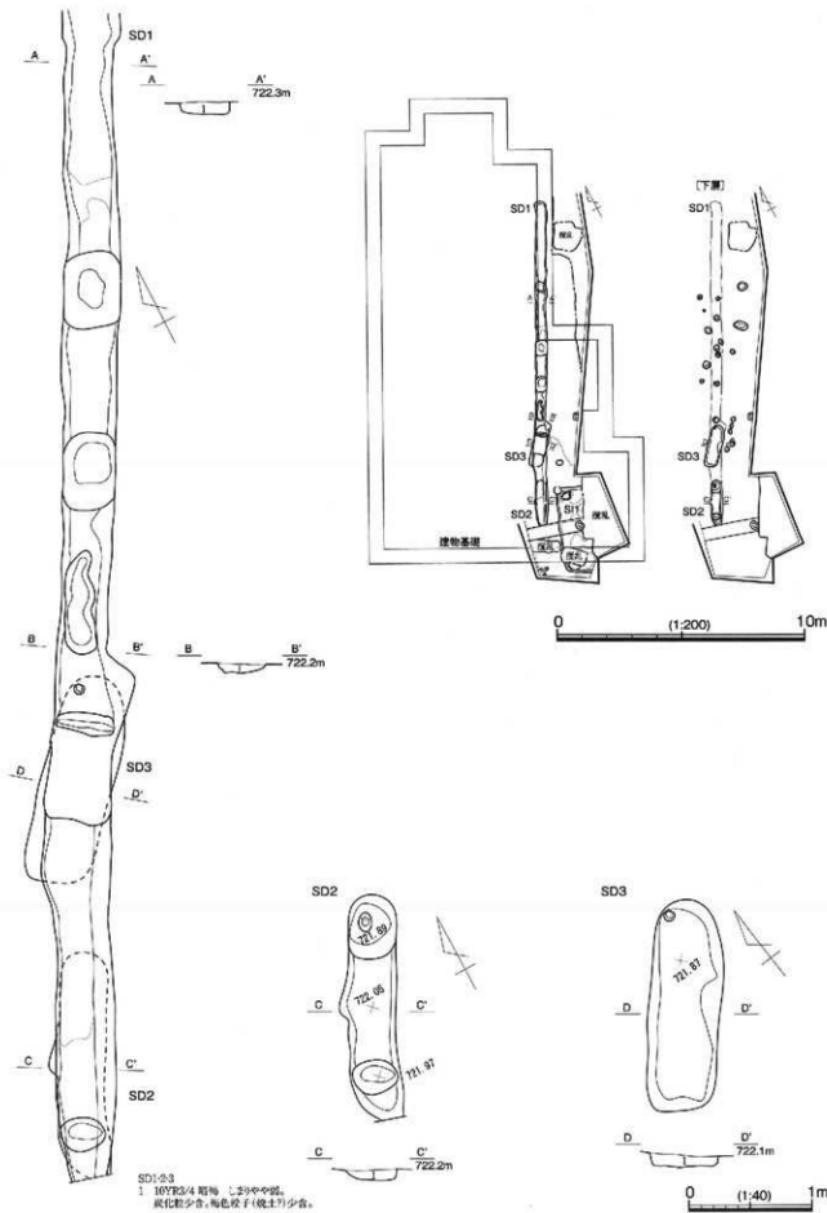
C区北側に均等間隔で掘削された複数条の溝を検出した。1本の幅は約30cm程度で、確認面からの深さは約20cmを測った。溝内からいくつか土器片が出土したが、いずれも耕作土中の混在と判断した。おそらくは機械を用いて直線的にほぼ一定の深さで掘られたもので、かつての耕作面からは30cm程の深さあったと推定される。稲作では、排水や土中の有毒ガスの除去を促す目的で行う溝切り（溝堀り）といった作業があるが、検出した溝ほど深い掘削は行わないという。同地点は以前より水田利用されてきた場所のため該当しないが、富士北麓の高冷な気候は稲作に向かず、水掛麦や水掛菜といった富士山の伏流水を利用する独自の栽培が行われた地域である。この遺構の性格は不明であるが、火山灰土で非常に水はけの良い土地のため、水田耕作に伴って何らかの土地改良をした痕跡と考えておく。



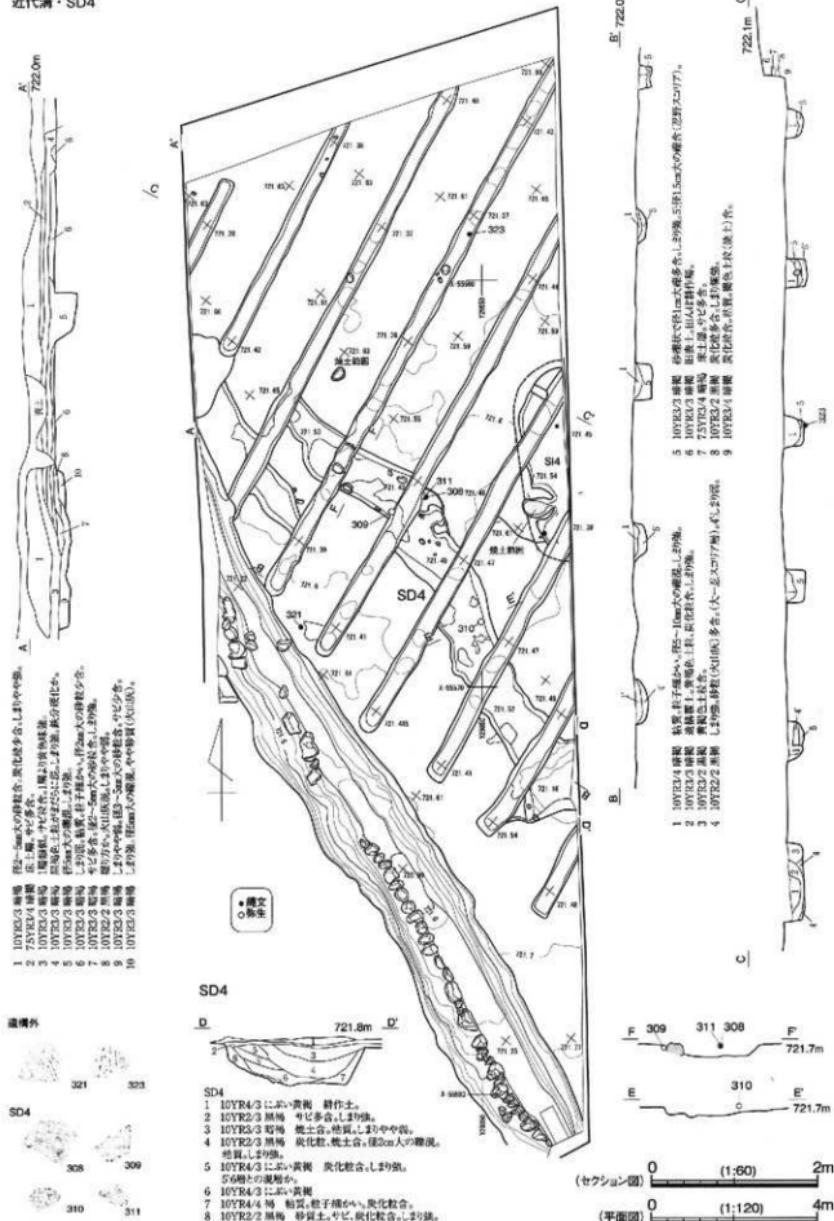
●縄文 ○弥生 △石器 ■土器器 □須恵器 ◇陶器 ◆古墳 ◉骨 ◉貝化物

第26図 遺物出土状況図

SD1・2・3



第27図 SD1~3



第28図 SD4・近代溝

表7 出土遺物觀察表(土器・陶磁器類)

回	地名	遺物 No.	種別	基層	時期	出目	内面/外面/裏面	色調 内/外	胎土	焼成	注記	実測 No.	備考		
29	A区	1	陶文	漆器	唐物V段階	138	ナチュラル面/-	黒褐色/白身	白、黒、黑色粒子共存	良	374	1			
29	A区	2	陶文	漆器	唐物V段階	139	ナチュラル面/-	黒	白、黒、黑色粒子共存	良	326	2			
29	A区	3	陶文	漆器	唐物V段階	140	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色/陶磁器 等色差	良	323	3			
29	A区	4	陶文	漆器	唐物V段階	141	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子共存	良	327	4		
29	A区	5	陶文	漆器	唐物V段階	142	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	白、黒、黑色粒子共存	良	315	8		
29	A区	6	陶文	漆器	唐物V段階	143	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色/陶磁器 等色差	良	320	7	丹波スヌ		
29	A区	7	陶文	漆器	唐物V段階	144	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	白、黒、白色粒子	良	316,317	5		
29	A区	8	陶文	漆器	唐物V段階	145	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	白、黒、白色粒子	良	319	6		
29	A区	9	陶文	漆器	唐物V段階	146	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	325	9		
29	A区	10	陶文	漆器	唐物V段階	147	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	白、黒、白色粒子	良	314	10		
29	A区	11	陶文	漆器	唐物V段階	148	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	白、黒、白色粒子	良	308	11		
29	A区	12	土器	漆器	平安	149	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	白、黑、黑色粒子	良	309	14	様子分類試料	
29	A区	13	土器	漆器	平安	150	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	白、黒、白色粒子	良	306	15		
29	A区	14	土器	漆器	平安	151	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色/紅 豆色系	白、黒、白色粒子	良	303	13		
29	A区	15	手掘	漆器	平安	152	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	312	12		
29	A区	16	手掘	漆器	近世近代	153	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	白、黒、白色粒子	良	305	16	上りA区S.D.I	
30	河内	17	陶文	漆器	漆器V段階	154	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	158	22	草軸している	
30	河内	18	明文陶	漆器	漆器V段階	155	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	152	21		
30	河内	19	明文	漆器	漆器V段階	156	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	265	38		
30	河内	20	明文	漆器	漆器V段階	157	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	29		
30	河内	21	明文	漆器	漆器V段階	158	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	26		
30	河内	22	明文	漆器	漆器V段階	159	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	24		
30	河内	23	明文	漆器	漆器	160	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	28		
30	河内	24	明文	漆器	漆器	161	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	29		
30	河内	25	明文	漆器	漆器	162	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	32		
30	河内	26	明文	漆器	漆器	163	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	30		
30	河内	27	明文	漆器	漆器	164	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	31		
30	河内	28	明文	漆器	漆器	165	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	34	口縁二方向からの組み	
30	河内	29	明文	漆器	漆器	166	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	33		
30	河内	30	明文	漆器	漆器	167	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	35	丸太式	
30	河内	31	明文	漆器	漆器	168	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区カワ	32	丹波スヌ付、植木袋あり 植木分子前田氏ENM02	
30	河内	32	明文	漆器	漆器	169	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	175	27		
30	河内	33	明文	漆器	漆器	170	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	184	摩耗している、二次試か		
30	河内	34	明文	漆器	漆器	171	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	183	摩耗している		
30	河内	35	明文	漆器	漆器	172	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	1	26		
30	河内	36	底板	漆器	古代	173	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	6			
30	河内	37	底板	漆器	古代	174	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区カワ	37	同上地割している	
30	河内	38	底板	漆器	古代	175	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	3	38		
30	河内	39	底板	漆器	古代	176	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	185	40		
30	河内	40	底板	漆器	古代	177	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区カワ	41		
30	河内	41	底板	漆器	古代	178	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	84	42		
30	河内	42	底板	漆器	古代	179	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区カワ	63		
30	河内	43	底板	漆器	古代	180	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	46		
30	河内	44	底板	漆器	古代	181	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区	45		
30	河内	45	底板	漆器	古代	182	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	91	39		
30	河内	46	底板	漆器	古代	183	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	44			
30	河内	47	底板	漆器	古代	184	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	93	50		
30	河内	48	底板	漆器	古代	185	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	177	37		
30	河内	49	底板	漆器	古代	186	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	166	50		
30	河内	50	底板	漆器	古代	187	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	133	51	摩耗している	
30	河内	51	土壤	漆器	古代	188	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	89	52	青面剥離、植木	
30	河内	52	土壤	漆器	平安	189	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	171	47 植木底		
30	河内	53	土壤	漆器	平安	190	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	B区カワ	49		
30	河内	54	土壤	漆器	平安	191	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	2	50		
30	河内	55	土壤	漆器	平安	192	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	164	51		
30	河内	56	土壤	漆器	平安	193	ナチュラル面/-	黒	に赤い茶褐色	中火候、白、黑色粒子	良	162	56		

品種	品種名	種別	種類	時期	地點	内観 / 外觀 / 葉部	色調 内 / 外	樹土	後端	注記	実生 No.	備考
日区												
S21	57	上球	馬白杏	平安	武	ナガミ御前ナグマ御前ナグマ御前モリ	黒白・赤・黒色枝子	碧・白・黒・赤色枝子	丸	150	54 黒色土群	
S21	58	上球	男	平安	同	ハカメスナガハカメスナガ	に白い葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	82	61	
S21	59	上球	女	平安	同	ハカメスナガハカメスナガ	に白い葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	81	62	
S21	60	上球	女	平安	同	ハカメスナガハカメスナガ	葉肉	碧・白・赤・黒色枝子	円	83	63	
S21	61	麻呂	津林	平安	同	ヨウヒキナガヨウヒキナガ	葉	碧・白色枝子	丸	13	64 1188 (青部分) 打ち矢多か	
S22	62	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生をもつて外見似因	に白い葉肉	碧・白・赤・黒色枝子	丸	110	80	
S22	63	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生をもつて外見似因	に白い葉肉	小葉白・白・赤色枝子	丸	192	77	
S22	64	生牛	兔	生牛	同	ヘラ状生によるナガミタガミ御前実生	葉肉・浅黄	やや緑・白・黒・赤色枝子	丸	512	84	
S22	65	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生ナガミタガミ	に白い葉肉	生葉小葉	丸	55	78	
S22	66	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生ナガミタガミ	葉肉	碧・白・赤・黑色枝子	丸	55	78	
S22	67	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生ナガミタガミ	葉肉	碧・白色枝子	丸	188,512 タクシ	65 條子分析試料KCN38BD	
S22	68	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生ナガミタガミ	葉肉・根	碧・白・赤・黑色枝子	丸	112,241	76	
S22	69	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生ナガミタガミ	葉肉・根	碧・白・黒・赤色枝子	丸	92,261	S12 タクシ	
S22	70	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生ナガミタガミ	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	81	85	
S22	71	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生ナガミタガミ	葉肉	やや緑・白・黒・赤色枝子	丸	100	C区中央	
S22	72	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミナガミ御前実生	葉肉	碧・白・赤・黑色枝子	丸	337	79	
S22	73	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミナガミ御前実生	葉肉	碧・白・赤・黑色枝子	丸	512	81	
S22	74	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	234	133	
S22	75	生牛	兔	生牛	同	ヘラ状生によるナガミタガミ	葉	碧・白色枝子多葉・赤色枝子	丸	224	99	
S22	76	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黑色枝子	丸	512	82	
S22	77	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黑色枝子	丸	187	83	
S22	78	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白色枝子多葉・赤色枝子	丸	263,221	71	
S22	79	生牛	兔	生牛	同	ヘラ状生によるナガミタガミ	葉肉	碧・白・黑色枝子多葉・赤色枝子	丸	57,225,233	25 外觀鑑定	
S22	80	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生の葉肉の裏面	葉肉・裏	碧・白・黑色枝子	丸	113,226	72 交叉授粉	
S22	81	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生の裏面の裏面	葉肉・裏	碧・白・黑色枝子多葉・赤色枝子	丸	48	70 外觀鑑定	
S22	82	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生の裏面の裏面	葉肉・裏	碧・白・黑色枝子多葉・赤色枝子	丸	195	69	
S22	83	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	73	86	
S22	84	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・赤・黑色枝子	丸	512 タクシ	87 同上種か	
S22	85	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・赤・黑色枝子	丸	191,229	88 KCS3 823	
S22	86	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	246	74 外觀鑑定	
S22	87	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	100	89 交叉試驗	
S22	88	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	74	111	
S22	89	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	512	99	
S22	90	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・赤色枝子	丸	22,47,56,94,160,191,93	67 同上種 823 分析試料KCN38BD	
S22	91	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・赤色枝子	丸	49,75,206	68 823 分析試料KCN38BD	
S22	92	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・赤色枝子	丸	93	93 條子分析試料	
S22	93	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	95	91	
S22	94	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	100	92	
S22	95	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	95	93	
S22	96	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	99,201	97	
S22	97	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	50,51	95	
S22	98	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	189	101	
S22	99	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	60	100	
S22	100	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	104	92	
S22	101	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	95	91	
S22	102	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	100	92	
S22	103	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	99,201	97	
S22	104	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	98	100	
S22	105	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	124	108	
S22	106	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	117	124	
S22	107	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	138	101	
S22	108	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	139,207	118	
S22	109	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	17,61	S12 タクシ	
S22	110	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	192	120 内外觀エス付番	
S22	111	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	123	113	
S22	112	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	116,131	116	
S22	113	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	126	116	
S22	114	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	115,132	114 外觀エス	
S22	115	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	232	115 外觀エス	
S22	116	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	108,109	122	
S22	117	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	130	117	
S22	118	生牛	兔	生牛	同	ナガミタガミ御前実生	葉肉	碧・白・黒・赤色枝子	丸	93	112	

回	地名	西經 No.	緯度	高程	時期	時代	内 地 / 外 地 / 濱 岸	色調	西 / 外	地 球	土	地質	注記	編號	備考
33	S12 114	赤生	東	海生	朝	ヘラクルスによるナツ/赤生文化	に赤/黄赤/に赤	赤、白	白色較多、赤色較少	砂、白色較多、赤色較少	良	31	12.	内西スヌ	
33	S12 115	赤生	東	美	朝	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色	赤、青褐色	青褐色	砂、白色較多、赤色較少	良	121	125		
33	S12 116	赤生	東	海生	朝	ヘラクルスによるナツ/赤生文化	に赤/青褐色	赤、白色較多、赤色較少	砂、白色較多、赤色較少	良	34	123			
33	S12 117	赤生	東	海生	朝	ヘラクルスによるナツ/赤生文化	に赤/青/明黃色	赤、白色較多、小量黑色	砂、白色較多、小量黑色	良	52	125			
33	S12 118	赤生	東	海生	朝	ヘラクルスによるナツ/赤生文化	明赤褐色	砂、白色較多、小量黑色	砂、白色較多、小量黑色	良	222	106			
33	S12 119	赤生	東	美	朝	ナツ/赤生文化	に赤/赤褐色	砂、白色較多、多量黑色	砂、白色較多、多量黑色	良	69	107			
33	S12 120	赤生	東	海生	朝	ナツ/赤生文化	赤褐色/灰褐色	砂、白色較多、赤色較少	砂、白色較多、赤色較少	良	247	102			
33	S12 121	赤生	東	海生	朝	ナツ/赤生文化/赤生文化	に赤/青褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	良	254	104			
33	S12 122	赤生	東	海生	日	ナツ/赤生文化	に赤/黄褐色/浅黃褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	良	111,512	107			
33	S12 123	赤生	東	海生	日	ナツ/赤生文化	赤褐色/灰褐色/暗褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	良	215	125			
33	S12 124	赤生	東	海生	日	ナツ/ミダリナツ/ミダリ	に赤/青褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	良	264	128			
33	S12 125	赤生	東	海生	日	ナツ/シカクの赤生/シカク代	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、淡褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	良	72,76,134	66 内西スヌ リンゴ分析試料 KANABUS			
33	S12 126	赤生	東	海生	日	ナツ/シカクの赤生/シカク	に赤/青褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	良	118	130 内西化物有者			
33	S12 127	赤生	東	海生	日	ナツ/ナツ/ナツ	に赤/青褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	良	129	130 内西スヌ			
33	S12 128	赤生	東	海生	日	ナツ/ナツ/ナツ	に赤/青褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	砂、白色較多、赤、淡褐色	良	155	132			
34	S13 129	海生	東	海生	口	竹管は直工具による別み文支差系 方頭と丸頭の直工具の系	に赤/青褐色/黑	砂、白、黑色較多、深褐色 砂、小量	砂、白、黑色較多、深褐色 砂、小量	良	134,143,178, 523,524,530	134			
34	S13 130	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白、黑色較多、深褐色	砂、白、黑色較多、深褐色	良	23	142			
34	S13 131	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	青褐色/黑/青褐色	砂、白色較多、多量赤、青褐色 砂、青褐色	砂、白色較多、多量赤、青褐色 砂、青褐色	良	86,87	145			
34	S13 132	海生	東	海生	新	ナツ/ミダリ/赤生文化	青褐色/黑/青褐色	砂、白色較多、多量赤、青褐色 砂、青褐色	砂、白色較多、多量赤、青褐色 砂、青褐色	良	125,136,138, 512	139			
34	S13 133	海生	東	海生	新	ナツ/ミダリ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	141	141			
34	S13 134	海生	東	海生	新	ナツ/ミダリ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	88,137,139,140, 142,513	140			
34	S13 135	海生	東	海生	新	ナツ/ミダリ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	262	145			
34	S13 136	海生	東	海生	新	ナツ/ミダリ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	268	147			
34	S13 137	海生	東	海生	新	ナツ/ミダリ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	268	146 亂葬場			
34	S13 138	海生	東	海生	新	ナツ/ミダリ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	743,768	148 内西スヌ			
34	S13 139	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	766,767	151 内西スヌ			
34	S13 140	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	661	149 内西スヌ			
34	S13 141	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	742	150 内西スヌ			
34	S13 142	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	687,714	152 二世祖地			
34	S13 143	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	662,674	152 二世祖地			
34	S13 144	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	658	154 内西スヌ			
34	S13 145	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	663	155 内西スヌ			
34	S13 146	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	578,791	156 内西スヌ			
34	S13 147	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	710,712	150			
34	S13 148	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	714	158			
34	S13 149	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	722	159 外加ス材面			
34	S13 150	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	761	156			
34	S13 151	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	723	155			
34	S13 152	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	711	364 仔子分析試料&NMIS 内西スヌ材面			
34	S13 153	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	695	162			
34	S13 154	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	797	153			
34	S13 155	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	795	161 内西スヌ			
34	S13 156	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	727	161 内西スヌ			
34	S13 157	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	799	157			
34	S13 158	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	799	166 整理している			
34	S13 159	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	705	161			
34	S13 160	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	702	169 附近材面			
34	S13 161	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	756	170 附近材面			
34	S13 162	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	724	172			
34	S13 163	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	703,780,781	155			
34	S13 164	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	483,772,774	174			
34	S13 165	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	788,799	160			
34	S13 166	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	681,884,776, 771,775	175,177			
34	S13 167	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	680,735	183			
34	S13 168	海生	東	海生	新	ナツ/赤生文化	に赤/青褐色/黑	砂、白色較多、赤、黑色較少	砂、白色較多、赤、黑色較少	良	478,876	182,185			

地點	標號 No.	種類	種類	時期	地質	内 / 外	外觀 / 葉 級	色調 / 内 / 外	動 土	地盤	裏面 No.	備考
35 SK2 149	國文	深根	當村V段階	鮮	ナツ/北緯, 沿岸, ナツナ	に点, 黄褐色, 小粒 表面に点, 小粒	小中粒, 白・黒色粒子多, 表面 白, 黑色粒子少, 表面	A 600-733,737, 778	178			
36 SK2 170	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/多葉, 遠近葉, 動植物	複葉(複葉)	白, 黑色粒子多, 表面	B 771	181			
36 SK2 171	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/遠近葉, 動植物	複葉(複葉)	白, 黑色粒子多, 表面	B 733,787	156			
36 SK2 172	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉, 多葉, 動植物	複葉(複葉)	白, 黑色粒子多, 表面	A 790	158			
36 SK2 173	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉, 多葉, 動植物	複葉(複葉)	白, 黑色粒子多, 表面	A 793	192			
36 SK2 174	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉, 多葉	複葉(複葉)	白, 黑色粒子多, 表面	A 679	190			
37 SK2 175	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉, 多葉	複葉(複葉)	白, 黑色粒子多, 表面	A 734	191			
37 SK2 176	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉	複葉(複葉)	白, 黑色粒子多, 表面	B 716,777	187			
37 SK2 177	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉	複葉(複葉)	白, 黑色粒子多, 表面	A 292	184			
37 SK2 178	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	白, 黑色粒子少, 表面	A 688	180	内部スズ		
37 SK2 179	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	白, 黑色粒子少, 表面	A 683	193			
37 SK2 180	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	白, 黑色粒子少, 表面	A 677	179			
37 SK4 181	國文	深	当村V段階	口-鮮	ナツ/複葉	複葉(複葉)	中粒, 白, 黑色粒子多, 表面	A 747,748,750, 751	194	25と同一		
37 SK4 182	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉	複葉(複葉)	中粒, 白, 黑色粒子多, 表面	A 796,798	201	紅熟		
37 SK4 183	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉	複葉(複葉)	中粒, 白, 黑色粒子多, 表面	A 746	204	後赤紅+鮮緑でしている		
37 SK4 184	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉	複葉(複葉)	中粒, 白, 黑色粒子多, 表面	A 584	205	多面地斑		
37 SK4 185	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉	複葉(複葉)	中粒, 白, 黑色粒子多, 表面	A 717	199			
37 SK4 186	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/複葉	複葉(複葉)	中粒, 白, 黑色粒子多, 表面	A 797	206	多面地斑		
37 SK4 187	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 739	202			
37 SK4 188	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 781	208			
37 SK4 189	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 718	198			
37 SK4 190	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 795	203			
37 SK4 191	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 721,738,SK4	196			
37 SK4 192	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 584	197			
37 SK4 193	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 735	219			
37 SK4 194	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 584	207			
37 SK5 195	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 794	213			
37 SK5 196	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 761	218			
37 SK5 197	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 735	219			
37 SK5 198	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 748	212			
37 SK5 199	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 788	217			
37 SK5 200	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 752,753,757, 759,760	214+			
37 SK5 201	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 281,282,291, 296,301	215			
38 SK1 202	國文	深根	当村V段階	口-鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 522	222	越界三・4式		
38 SK1 203	國文	深根	当村V段階	口-鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 523	223	越界三・4式		
38 SK1 204	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 524	224	越界三・4式		
38 SK1 205	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 525	225	越界三・4式		
38 SK1 206	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 649	226			
38 SK3 207	國文	土壌内	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 591	234	長51.643m厚13.6m 幅10m		
38 SK3 208	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 682	277			
38 SK3 209	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 691	278			
38 SK3 210	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 550	260			
38 SK3 211	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 615	278			
38 SK3 212	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 426,428	292	213と同一か		
38 SK3 213	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 575	293	212と同一か		
38 SK3 214	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 597	285			
38 SK3 215	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 523	279	斜面及び斜面に土木施		
38 SK3 216	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 516	287	王トノ同一		
38 SK3 217	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 539	286	王トノ同一・外斜面化		
38 SK3 218	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 531	288			
38 SK3 219	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 525	291	内斜面土木施		
38 SK3 220	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 610	301	内斜面度		
38 SK3 221	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 646	303	内斜面度		
38 SK3 222	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 555	284	内斜面スズ224と同一		
38 SK3 223	國文	深根	当村V段階	鮮	ナツ/葉	葉	中粒, 白, 黑色粒子少, 表面	A 535	321	内斜面スズ		

地番	面積	種別	基準	時期	内 / 外	外 / 内	色調	内 / 外	地土	地塊	注記	面積	備考
39 SX3 224 稲作 谷保	利根V段落	水田	ナ	筑波・霞ヶ浦盆地による河川水	湖	白、黒色粒子	良	569,378.353	577,739.629	289	22と同一外周又は		
39 SX3 225 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯、霞ヶ浦・ひな立川・利根川・利根運河・利根川左岸の河川水による河川水	湖	白、黑色粒子	良	410,450.434	455-455.616	227			
39 SX3 226 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	423,827					
39 SX3 227 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	379,271.379	380,340-380,605	229	内面化物付番		
39 SX3 228 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	586		289	紅葉スミ付番		
39 SX3 229 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	494		289	内面化物付番		
39 SX3 230 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	609		289	通航性しない河川又ス		
39 SX3 231 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	493		289	内面スミ付番		
39 SX3 232 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	378,361.363	379,315	228	内面化物付番		
39 SX3 233 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	491,492		273	内面化物付番		
39 SX3 234 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	487,490		273			
39 SX3 235 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	417,320.353	418,436	256	日本にSス外付ス238付番		
40 SX3 236 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	416		289	外付スミ付番	一	
40 SX3 237 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	589		289			
40 SX3 238 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	588		289	内面スミ付番		
40 SX3 239 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	389		271			
40 SX3 240 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	363		273	内面化物付番	黒葉	
40 SX3 241 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	616		289			
40 SX3 242 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	589		289			
40 SX3 243 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	537		289	付番付番		
40 SX3 244 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	439		289			
40 SX3 245 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	798		299	外周又は		
40 SX3 246 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	485		299			
40 SX3 247 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	598		229	内面ス		
40 SX3 248 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	419		299	加納口内周又は人水付番		
40 SX3 249 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	537		289	付番付番		
40 SX3 250 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	340		272	内面見度		
40 SX3 251 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	391		289			
40 SX3 252 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	635		302	254と同一内周又人水付番		
40 SX3 253 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	116		303	253と同一		
40 SX3 254 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	274					
40 SX3 255 稲作 霞ヶ浦	利根V段落	1~3回	ナ	ナガハラ低地農業地帯による河川水	湖	白、黑色粒子	良	404,496.367	405,594	228	八のやややまから外付ス付番		
41 SX3 256 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黒色粒子	良	518,321		229			
41 SX3 257 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	616		289			
41 SX3 258 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	557		289			
41 SX3 259 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	439		289			
41 SX3 260 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	798		299			
41 SX3 261 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	485		299			
41 SX3 262 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	598		229	内面ス		
41 SX3 263 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	441		289			
41 SX3 264 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	635		289			
41 SX3 265 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	391		289			
41 SX3 266 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	496		289			
41 SX3 267 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	592		299	295と同一		
41 SX3 268 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	625		289			
41 SX3 269 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	472,474,452		546	内面風景		
41 SX3 270 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	446,467,479,480		216	内面黒葉		
41 SX3 271 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	554,563,568,569,570		224	内面化物付番		
41 SX3 272 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	501,597		224			
41 SX3 273 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	581		289			
41 SX3 274 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	591		289			
41 SX3 275 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	612		312	通航不可		
41 SX3 276 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	475,583		304	通航不可		
41 SX3 277 風景 霞ヶ浦	神明V段落	堤	ナ	利根川堤防による八の字風景	堤	白、黑色粒子	良	554		305	利根川底		

地	地名	地圖 No.	種別	基期	西	西 / 東	東	地圖 No.	基期	地圖 No.	基期	
A2	SX3 275	國文 津井	津井V段落	国	ナ/ナ/津井前段~	に/に/津井前段~	津井	白、黑、黑色粒子	白	414	206	内蔵田式
A2	SX3 280	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡前段~	川島	白、黑、黑色粒子	白	368	307	津井川式	
A2	SX3 281	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	水原 - 鹿島 - 黒瀬 - 仁山 - 前山 -	水原 - 鹿島 - 黒瀬 - 仁山 - 前山 -	黒瀬、白、黑色粒子	白	576	308	鹿島川 - 鹿島 - 加賀田式
A2	SX3 282	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	仁山 - 鹿島 - 黒瀬 - 仁山 - 前山 -	仁山 - 鹿島 - 黒瀬 - 仁山 - 前山 -	黒瀬、白、黑色粒子	白	538	309	鶴見川 - 鶴見川沖合式
A2	SX3 283	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	前山 - 鹿島 - 游跡 - 前山 -	前山 - 鹿島 - 游跡 - 前山 -	白、黑、褐色粒子	白	338	309	鶴見川 - 鶴見川沖合式
A2	SX3 284	國文 小形井	小形井V段落	国	ナ/ナ/ナ/小形井文化~	水原 - 仁山 - 游跡 - 前山 -	水原 - 仁山 - 游跡 - 前山 -	白、黑、褐色粒子	白	341,409,415,425	303	外田底度 - 舞音田式
A2	SX3 285	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	前山 - 游跡 - 前山 -	前山 - 游跡 - 前山 -	白、黑、褐色粒子	白	CIXP	292	内蔵田化沟分層 加賀田式
A2	SX3 286	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	前山 - 游跡 - 前山 -	前山 - 游跡 - 前山 -	白、黑、褐色粒子	白	471,427	236	特固正常
A2	SX3 287	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	前山 - 游跡 - 前山 -	前山 - 游跡 - 前山 -	白、白色粒子	白	448,449	237	-
A2	SX3 288	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	前山 - 游跡 - 前山 -	前山 - 游跡 - 前山 -	白、黑、白色粒子	白	536	238	-
A2	SX3 289	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	前山 - 游跡 - 前山 -	前山 - 游跡 - 前山 -	白、黑、褐色粒子	白	647	240	内蔵田底度
A2	SX3 290	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	前山 - 游跡 - 前山 -	前山 - 游跡 - 前山 -	白、黑、褐色粒子	白	438	275	外田底度
A2	SX3 291	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	前山 - 游跡 - 前山 -	前山 - 游跡 - 前山 -	白、黑、褐色粒子	白	592	241	内蔵田底度のキヌカ内蔵田底度
A2	SX3 292	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	前山 - 游跡 - 前山 -	前山 - 游跡 - 前山 -	白、黑、褐色粒子	白	461	243	-
A2	SX3 293	國文 小形井	小形井V段落	国	ナ/ナ/ナ/小形井~	明吉路	白、黑、黑、黑色粒子	白	534	323	内蔵田底度	
A2	SX3 294	國文 小形井	小形井V段落	国	ナ/ナ/ナ/小形井~	三郎 - 水原	白、黑、白色粒子	白	568	319	-	
A2	SX3 295	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	風鳴	白、黑、白色粒子	白	501	317	-	
A2	SX3 296	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	風鳴	白、黑、褐色粒子	白	558,559	320	-	
A2	SX3 297	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	風鳴 - ハラ川真美によるナダ/ハラ丘上に	風鳴 - ハラ川真美によるナダ/ハラ丘上に	白、黑、褐色粒子	白	293	224	特固スズ
A2	SX3 298	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	風鳴 - ハラ川真美によるナダ/ハラ丘上に	風鳴 - ハラ川真美によるナダ/ハラ丘上に	白、黑、褐色粒子	白	534	323	内蔵田底度
A2	SX3 299	國文 小形井	小形井V段落	国	ナ/ナ/ナ/小形井~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	643	325	内蔵田底度	
A2	SX3 300	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	472	322	内蔵田底度スズ	
A2	SX3 301	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	三郎	白、黑、黑色粒子	白	414	318	-	
A2	SX3 302	國文 小形井	小形井V段落	国	ナ/ナ/ナ/小形井~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	534	311	-	
A2	SX3 303	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	499	314	-	
A2	SX3 304	國文 白石上野	白石V段落	国	ナ/ナ/ナ/白石上野~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	CIXSD1	326	特固黒スズ	
A2	SX3 305	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路 - 游跡	白、黑、白色粒子	白	CIXSD2	327	-	
A2	SX3 306	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	328	特固黒スズ	
A2	SX3 307	國文 土井	土井V段落	国	ナ/ナ/ナ/土井~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	329	特固黒スズ	
A2	SX3 308	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	330	特固黒スズ	
A2	SX3 309	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	331	特固黒スズ	
A2	SX3 310	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	332	特固黒スズ	
A2	SX3 311	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	333	特固黒スズ	
A2	SX3 312	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	334	特固黒スズ	
A2	SX3 313	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	335	特固黒スズ	
A2	SX3 314	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	336	特固黒スズ	
A2	SX3 315	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	337	特固黒スズ	
A2	SX3 316	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	338	特固黒スズ	
A2	SX3 317	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	339	特固黒スズ	
A2	SX3 318	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	291	340	内蔵田底度	
A2	SX3 319	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	472	343	-	
A2	SX3 320	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	785	339	-	
A2	SX3 321	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	699	331	-	
A2	SX3 322	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	580	340	内蔵田底度	
A2	SX3 323	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	472	343	-	
A2	SX3 324	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	785	339	-	
A2	SX3 325	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	699	331	-	
A2	SX3 326	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	270	338	内蔵田底度スズ	
A2	SX3 327	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	332	346	-	
A2	SX3 328	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	330	347	内蔵田スズ内蔵田底度	
A2	SX3 329	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	259	353	-	
A2	SX3 330	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	338	348	-	
A2	SX3 331	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	27	353	-	
A2	SX3 332	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	330	354	-	
A2	SX3 333	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	659	342	内蔵田底度	
A2	SX3 334	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	413	341	-	
A2	SX3 335	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	332	354	-	
A2	SX3 336	國文 游跡	游跡V段落	国	ナ/ナ/ナ/游跡~	明吉路	白、黑、白色粒子	白	330	355	内蔵田底度	

区	地名	遺物 No.	種別	器種	時代	断面	内・外 / 外・内 / 断面	色調 内/外	地 扇	断面	記号	文書 No.	備考
44	道場外	337	生瓦	瓦片	古生	44-1 瓦	ナツナテ / 木板模	赤褐色 / 深褐色	やや黒、白・黑色粒子、赤褐色	瓦	60	239	外壁スズ
44	道場外	338	瓦瓦	瓦片	古生	44-2 瓦	ナツナテ / ナツナテ	墨褐色 / ない赤	やや黒、白・黑色粒子、赤褐色	瓦	C区	261	内側・板模模
44	道場外	339	瓦瓦	瓦片	古生	44-3 瓦	ナツナテ / ナツナテ	墨褐色 / ない赤	やや黒、白・黑色粒子、赤褐色	瓦	778	249	
44	道場外	340	瓦瓦	瓦片	古生	44-4 瓦	ナツナテ / ナツナテ	に赤い黄斑	白・黒・赤色粒子、赤褐色	瓦	786	250	
44	道場外	341	土瓦	瓦片	古生	44-5 瓦	ナツナテ / ナツナテ	白	白・黒・赤色粒子、赤褐色	瓦	33	254	
44	道場外	342	土瓦品	瓦片	古生	44-6 瓦	ナツナテ / ナツナテ	白	白・黒色粒子、赤褐色	瓦	C区面瓦	362	

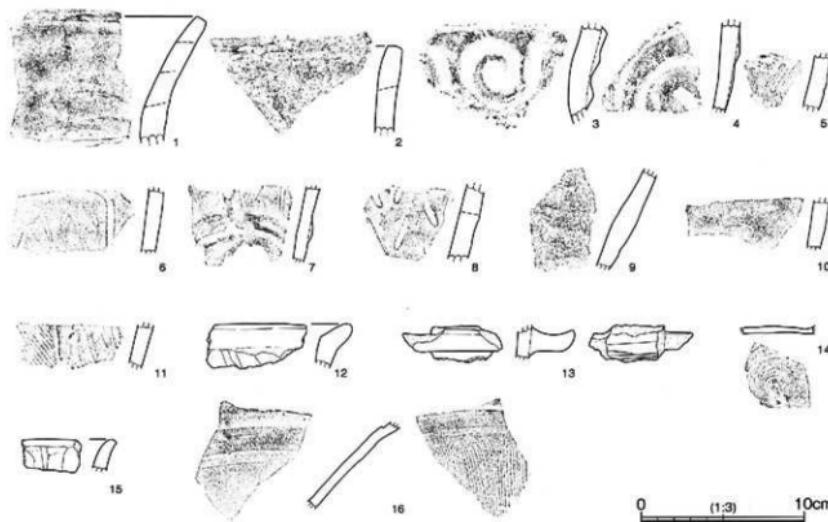
表8 出土遺物観察表（石器・石製品・古錢）

区	地名	No.	種別	断面	法面 (mm)	横面 (mm)	厚さ (mm)	色調	材質	実測No.	記号	備考
44	S63	343	G石	石斧	31	1.0	0.6	黒	黑曜石	143	28	
44	S64	344	G石	石斧	24	1.6	0.9	黒	黑曜石	144	149	
44	田中河原	345	石斧	石斧	25	1.65	0.65	黒	黑曜石	36	157	
44	C区面瓦	346	石斧	石斧	10.4	6.9	6.1	黒	69石	303	785	
91	A区	347	石斧	石斧	16	3.7	1.8	黒	灰岩	17	225	
44	田中河原	348	石斧	石斧	7.5	5.3	1.9	黒	69石	90	163	灰岩124
44	S22地盤	349	石斧	石斧	24	2.4	1.65	黒	-	1	11	
55	古流主	350	古瓦	瓦片	23	2.3	1	-	-	2	A区セララン土	

表9 出土遺物計量表

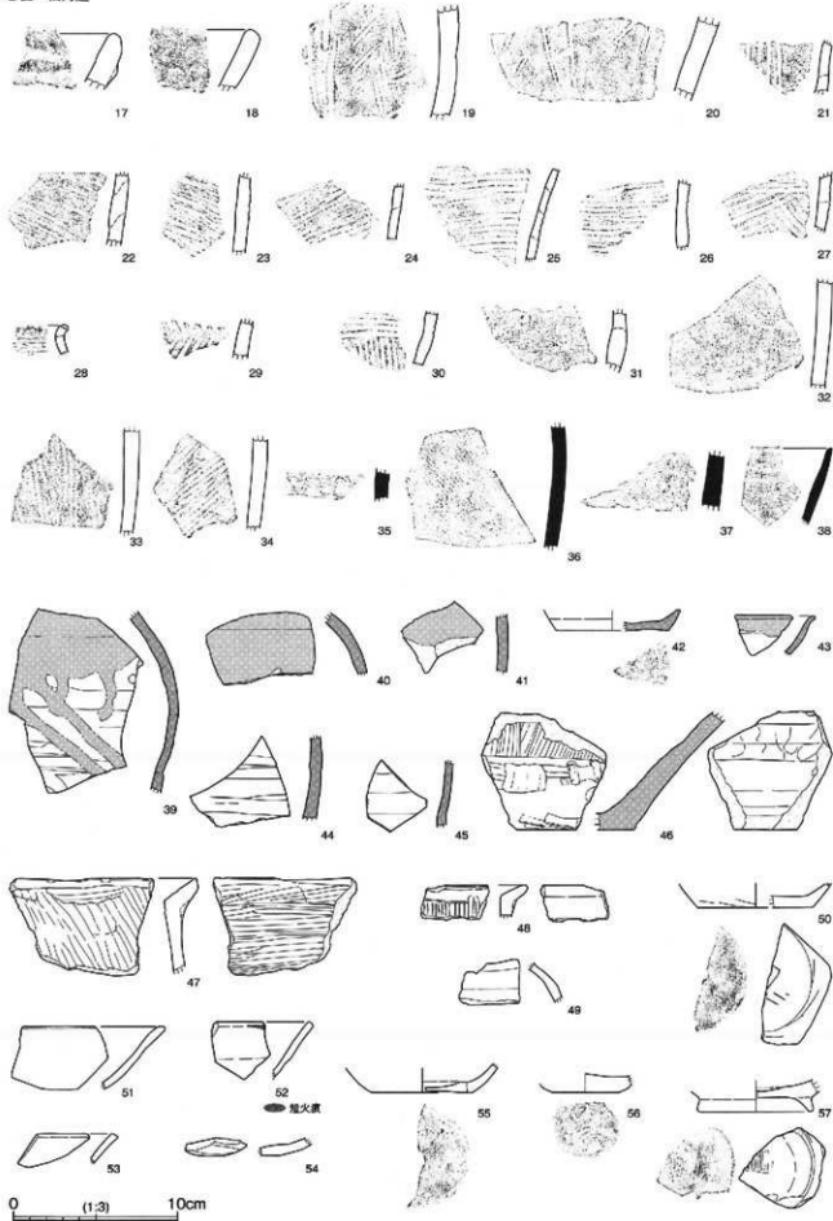
区・地名	東夷遺物				東夷遺物				小計				備考					
	破滅物	有形物	土器部	漆器部	破滅物	有形物	土器部	漆器部	破滅物	有形物	土器部	漆器部	遺物合計					
A区	515	30	72	0	0	40	49	18	12	0	0	1	6	703	71	771		
B区	282	336	231	137	262	67	9	349	236	229	11	4	0	2	1,305	796	2,065	
C区S11	0	6	87	0	132	0	0	0	0	0	0	0	0	189	0	189		
C区S2	0	1,800	0	0	0	0	3	9	1,276	0	0	0	20	0	1,293	1,060	3,412	
C区S3	0	1,000	40	0	0	3	0	9	936	0	0	0	1	0	1,043	26	1,234	
C区S4	30	6	74	33	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	137	0	137	
C区S5	470	6	0	0	0	0	0	9	48	0	0	0	0	0	470	60	530	
C区S51	1,800	0	0	0	0	0	0	139	0	0	0	0	3	0	1,869	183	1,883	
C区S62	3,200	0	0	0	0	0	0	139	0	0	0	0	15	0	3,209	148	3,358	
C区S64	2,100	0	0	0	0	0	0	20	0	0	0	0	528	0	2,109	728	2,828	
C区S66	600	0	0	0	0	0	0	19	0	0	0	0	20	0	609	20	629	
C区S67	0	6	9	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	6	0	6	
C区S62	0	6	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	7	
C区S24	10	30	0	0	0	0	0	0	30	2	0	0	0	0	40	22	62	
C区S61	1,580	0	0	0	0	0	0	30	0	9	9	0	20	0	1,580	36	1,616	
C区S62	3,170	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,170	0	3,170	
C区S3	13,200	6	0	0	6	0	0	2,860	0	0	9	0	450	0	12,800	3,320	15,520	
C区-M	2,200	500	0	0	0	592	0	80	480	0	0	0	528	476	3,202	2,578	6,270	
	29	27,627	3,092	341	185	364	726	63	4,249	2,888	231	14	4	1,950	672	33,142	18,217	63,369kg

A区



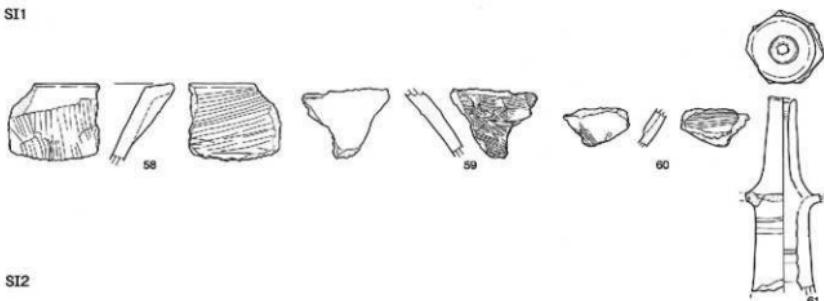
第29図 出土遺物 [A区]

B区 旧河道

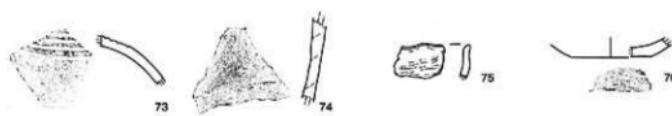
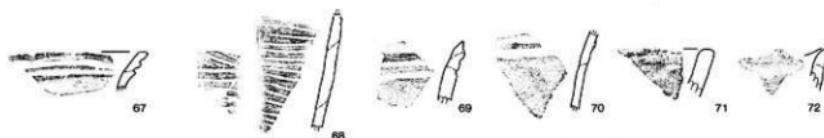
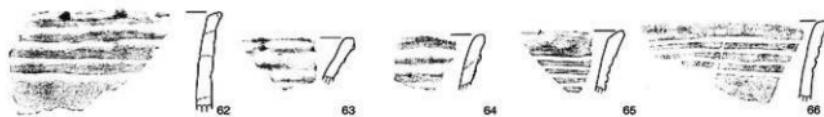


第30図 出土遺物〔B区旧河道〕

SI1

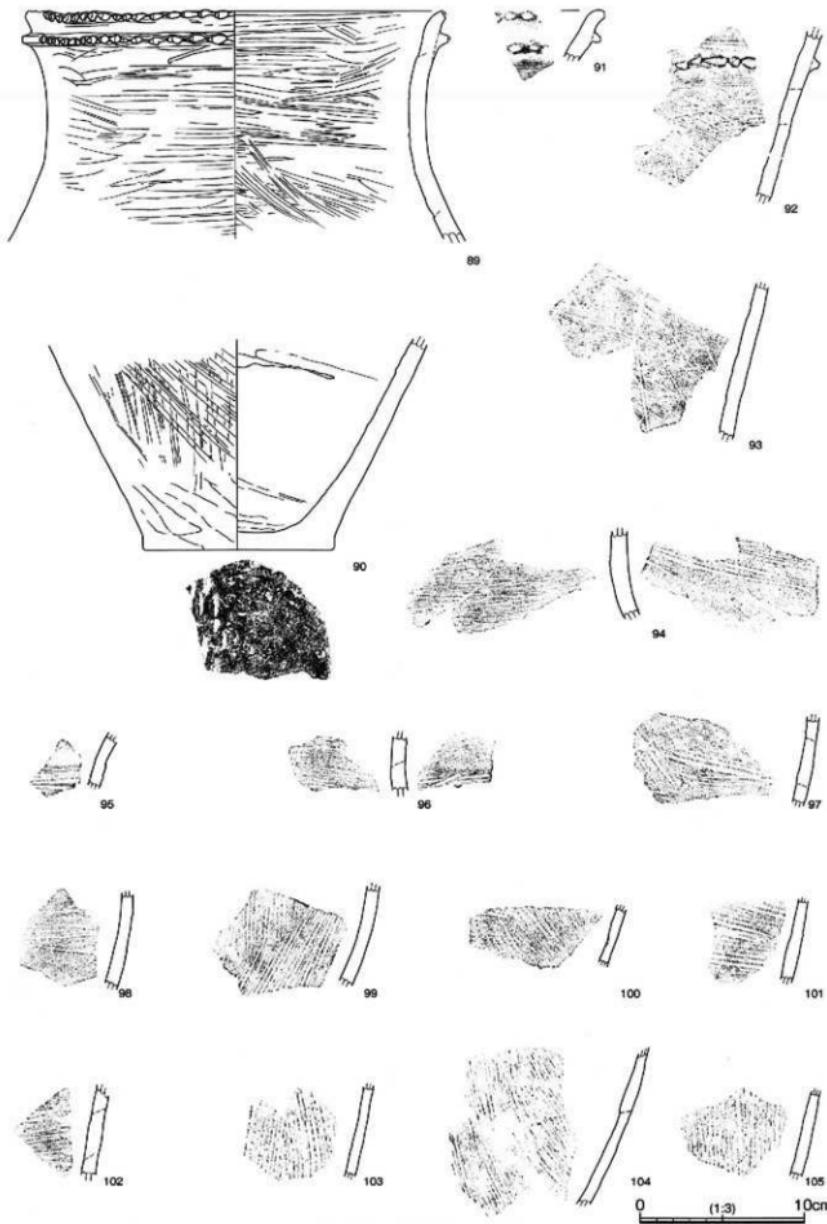


SI2

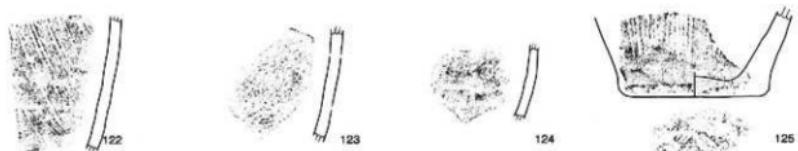
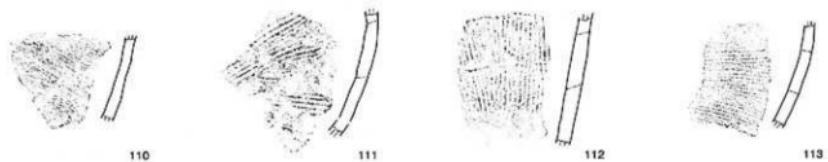


0 (1:3) 10cm

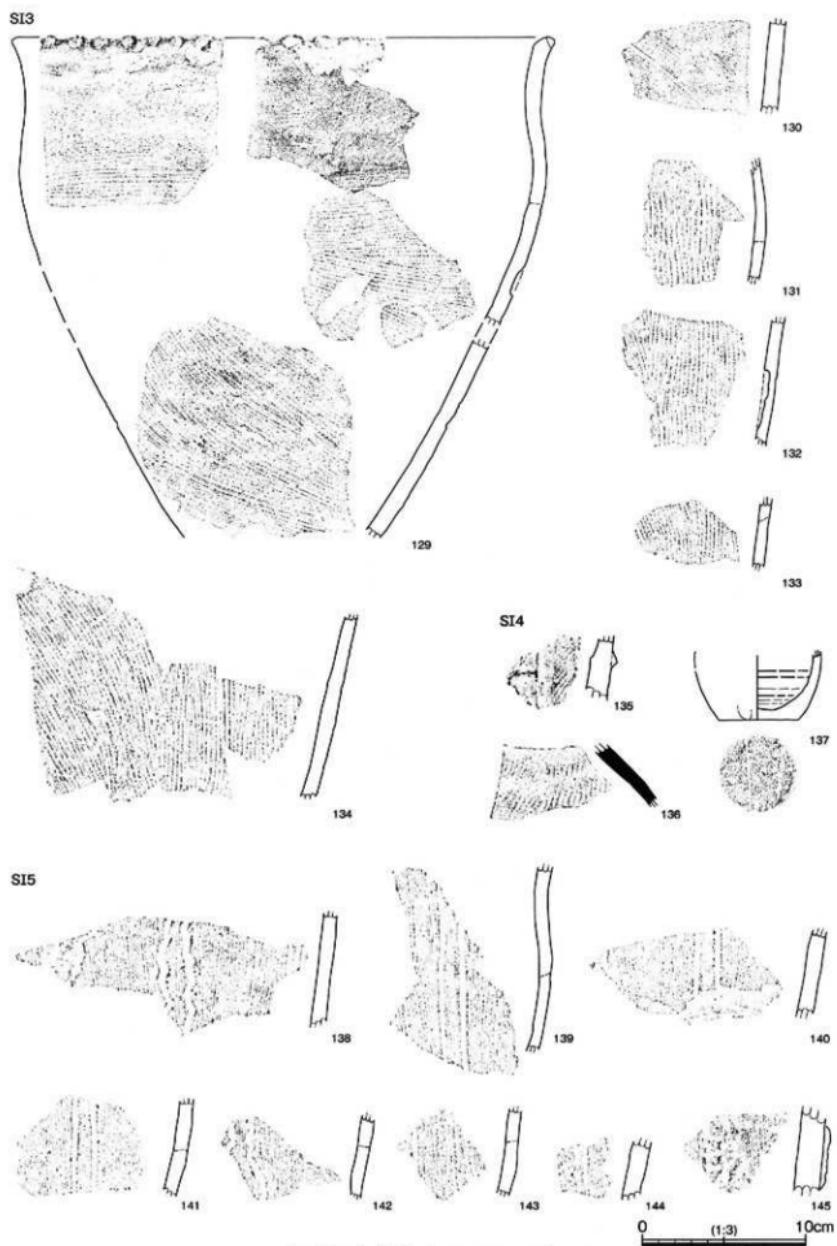
第31図 出土遺物 [SI1・SI2①]



第32図 出土遺物 (SI2②)

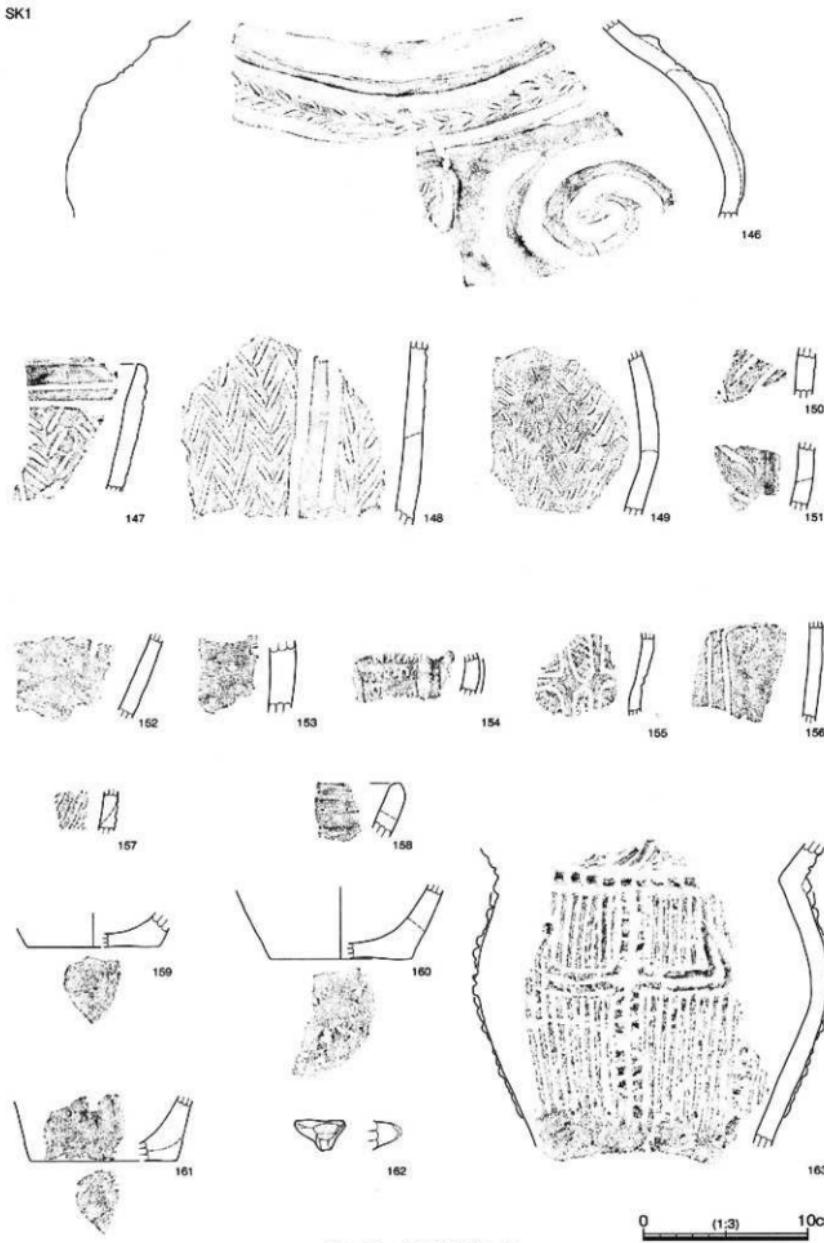


第33回 出土遺物 [SI2③]



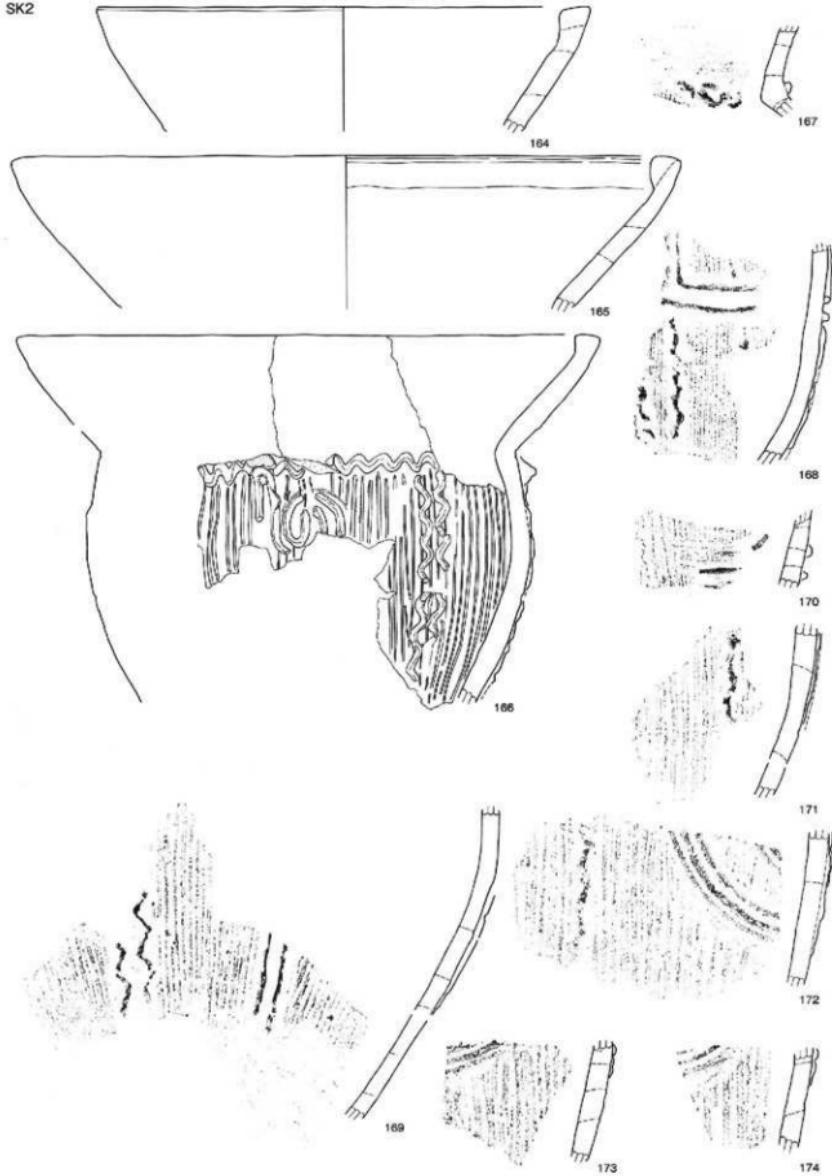
第34図 出土遺物 [SI3・SI4・SI5]

SK1



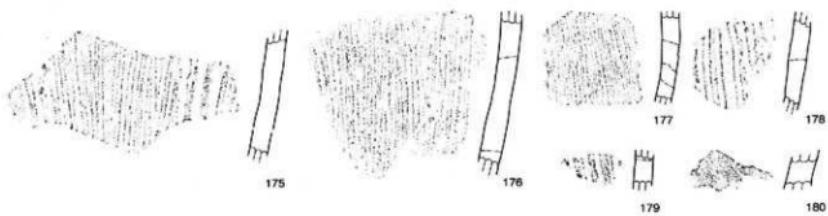
第35図 出土遺物 [SK1]

SK2

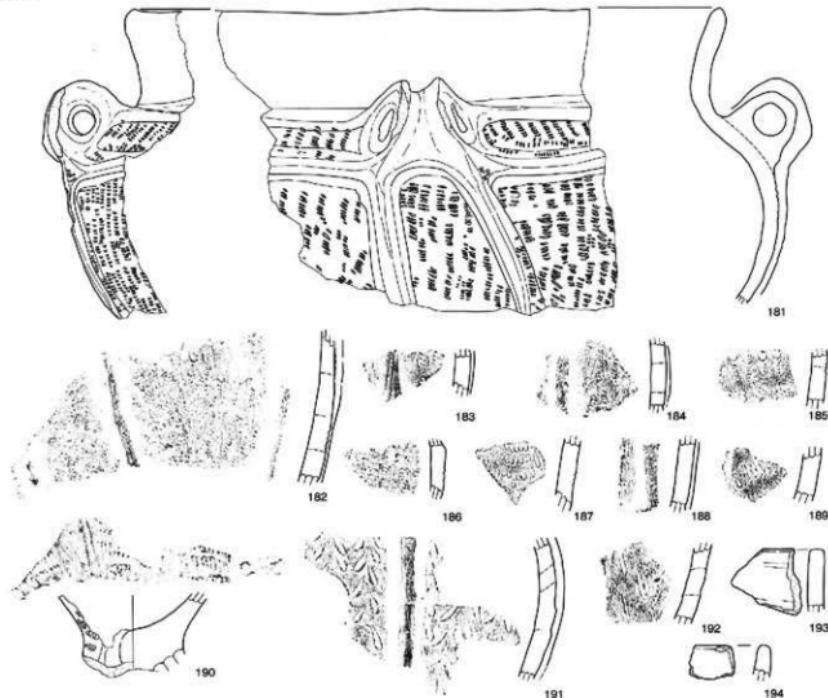


第36図 出土遺物 [SK2①]

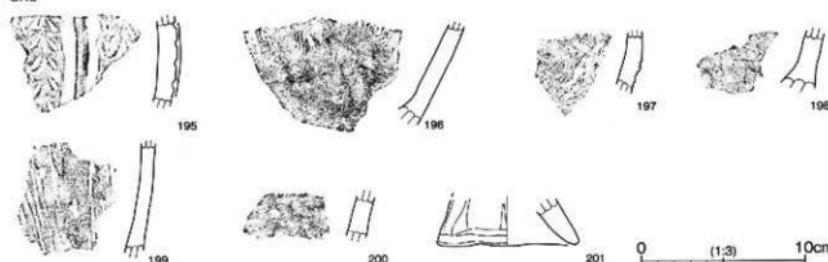
0 (1:3) 10cm



SK4

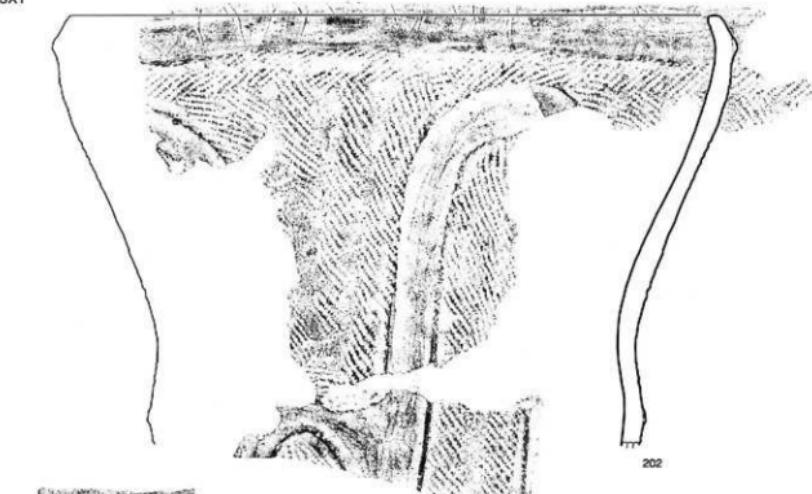


SK6

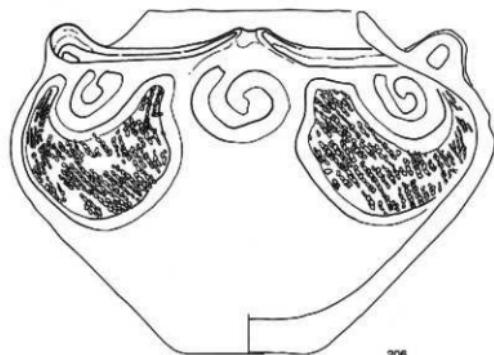


第37図 出土遺物 [SK2②・SK4・SK6]

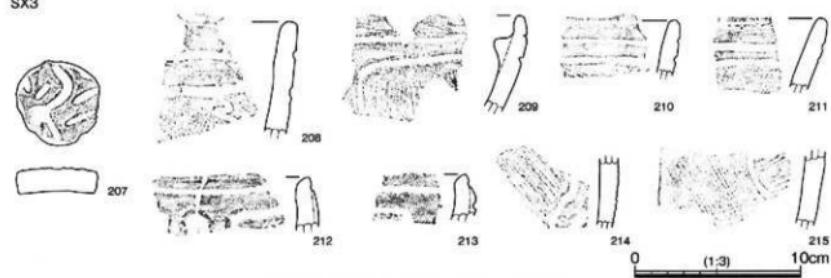
SX1



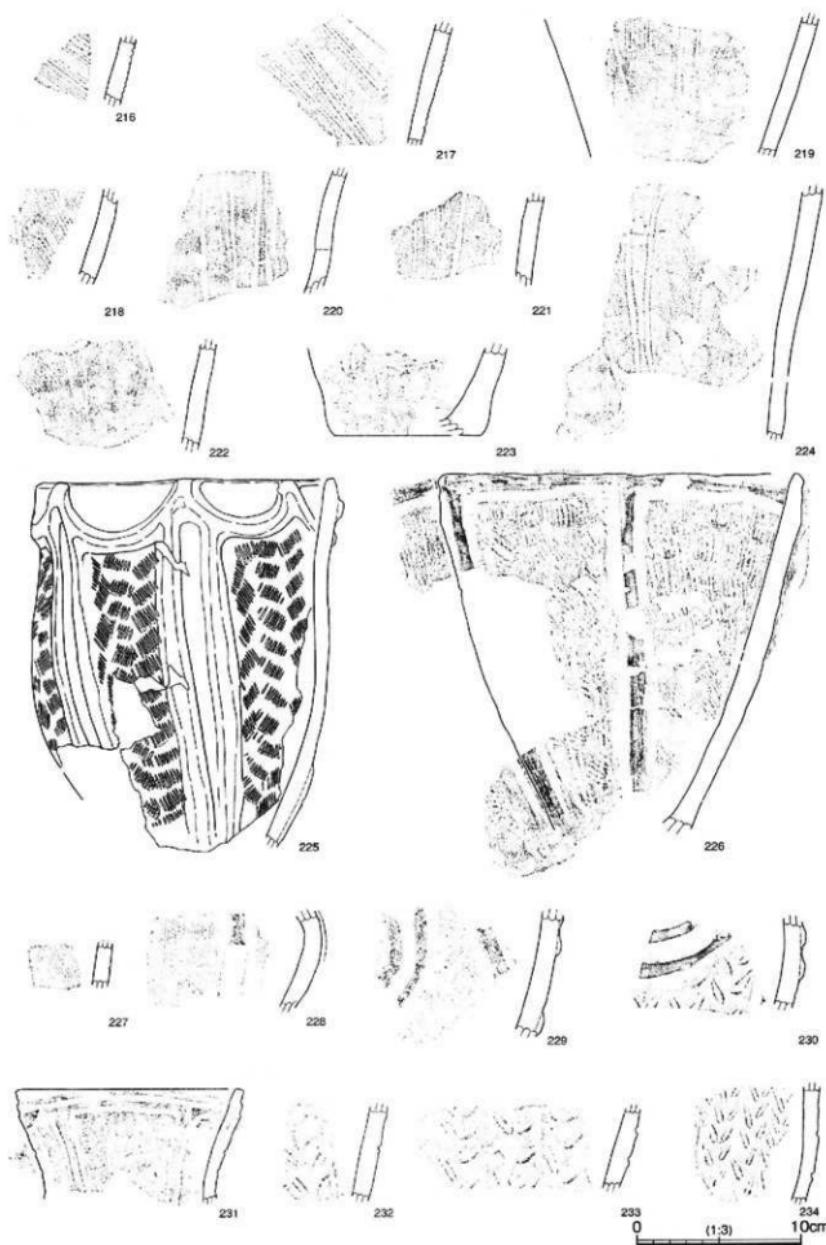
SX2



SX3



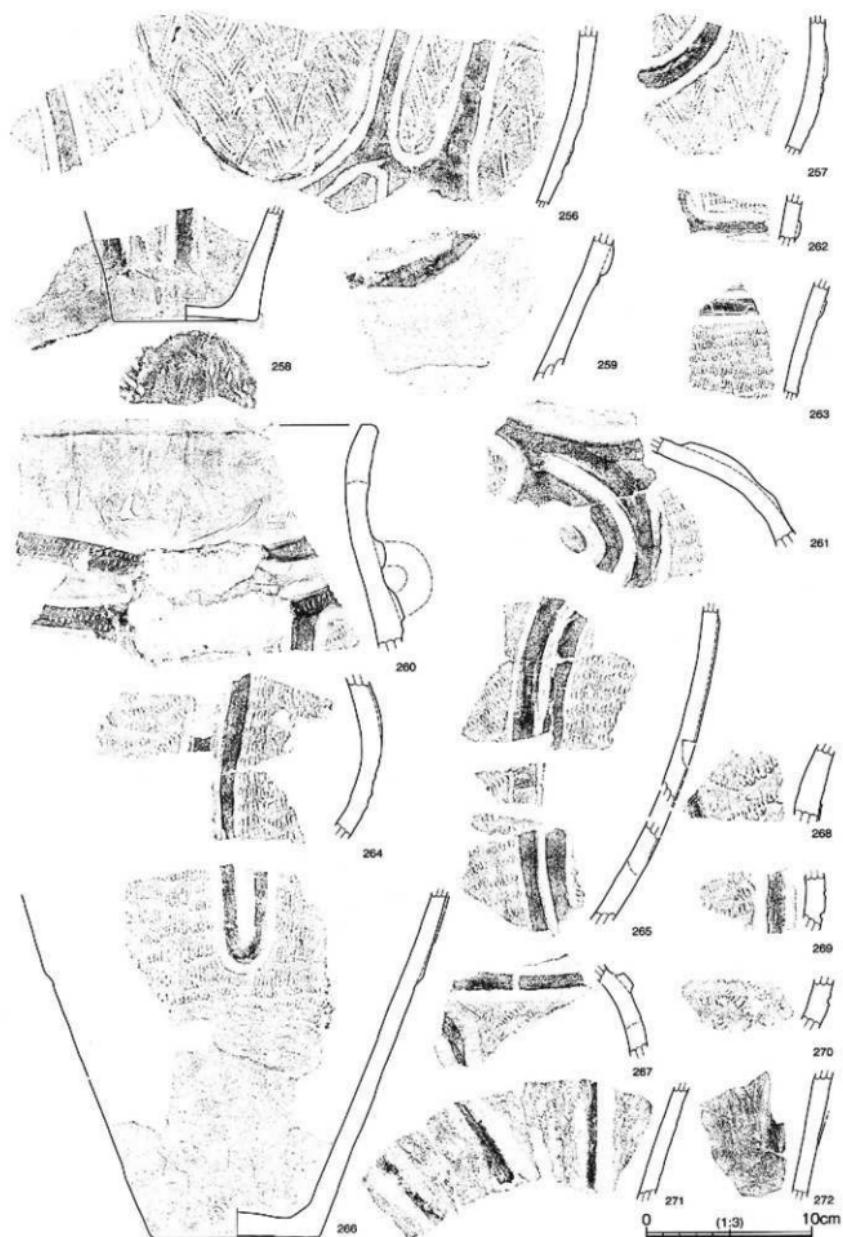
第38図 出土遺物 [SX1・SX2・SX3①]



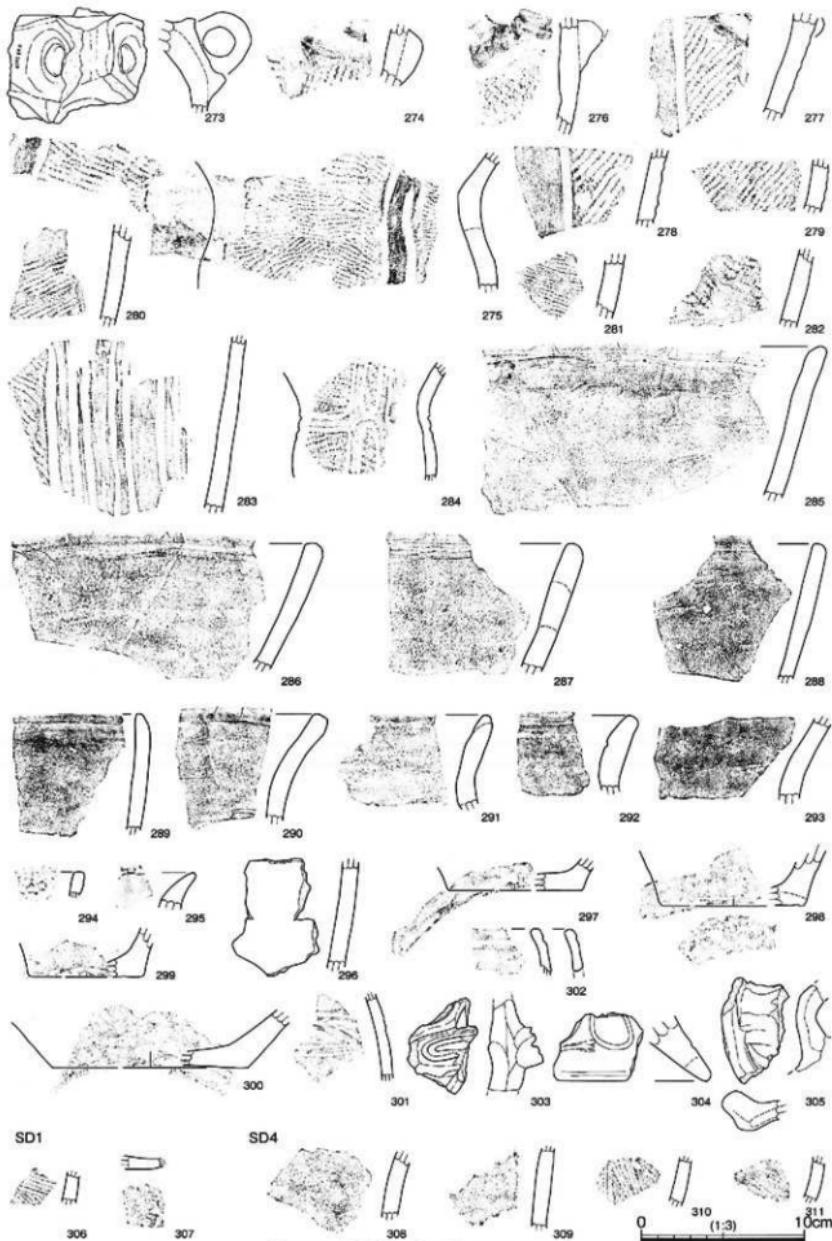
第39図 出土遺物 [SX3(2)]



第40図 出土遺物 (SX3(3))

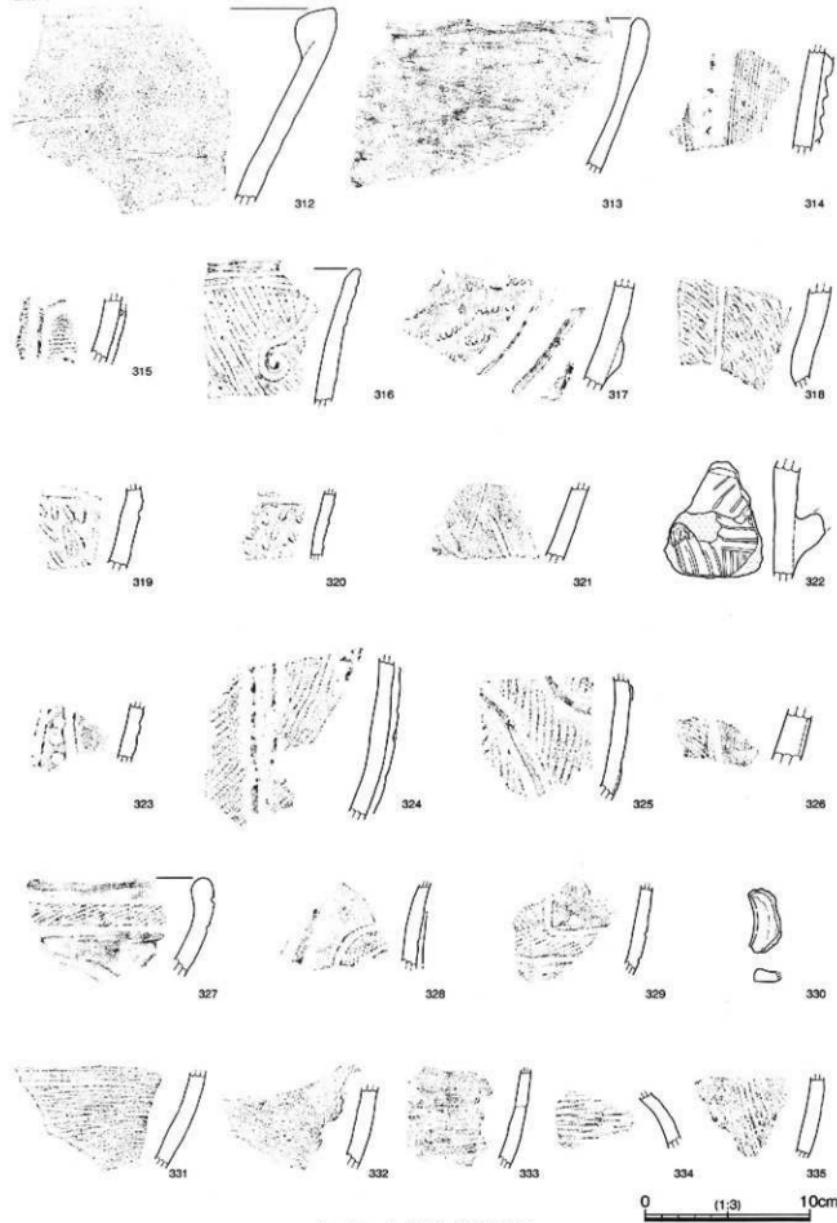


第41図 出土遺物 [SX3(4)]

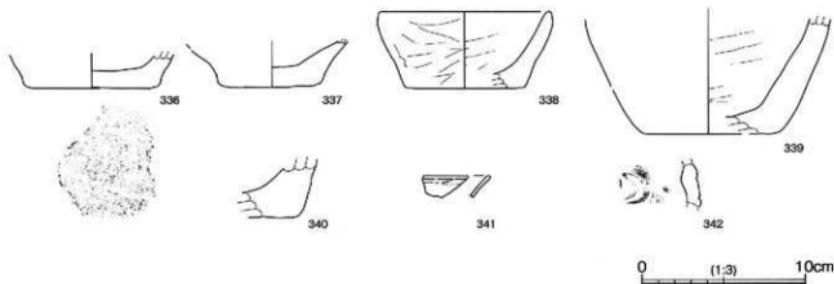


第42図 出土遺物 [SX3⑤、SD1・DS4]

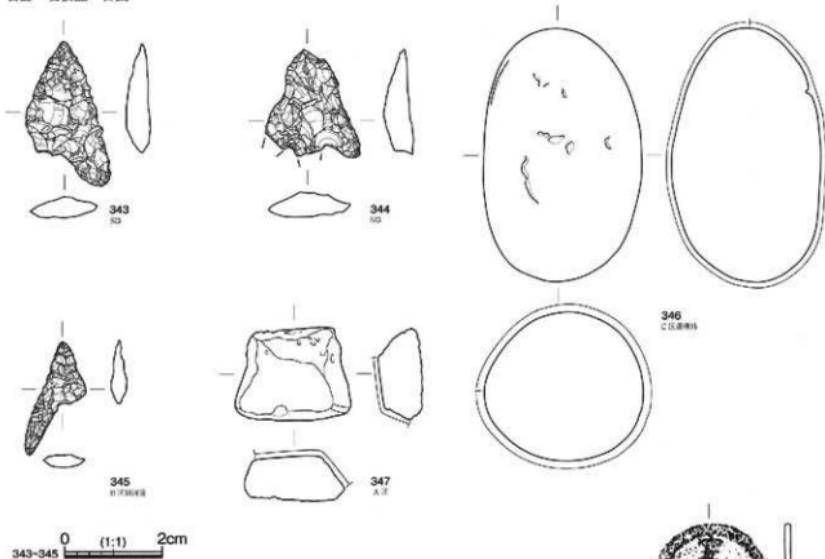
遺構外



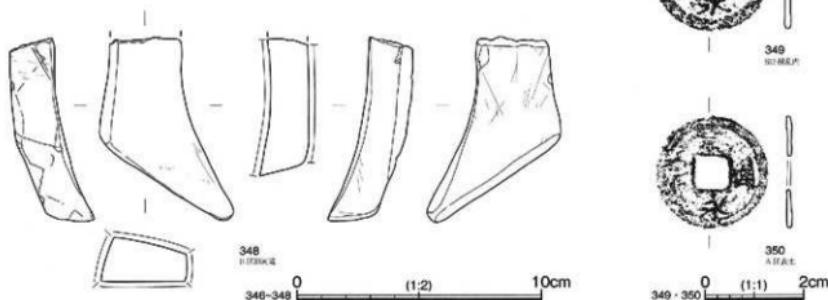
第43図 出土遺物〔遺構外①〕



石器・石製品・古錢



343-345
0 (1:1) 2cm



346-348
0 (1:2) 10cm



349
0 (1:1) 2cm

第44図 出土遺物 [造構外②、石器・石製品・古錢]

第4章 上中丸遺跡出土炭化物自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上中丸遺跡（山梨県富士吉田市小明見地内）は、吉村・平川（1982）によれば富士火山北麓に形成された山麓扇状地と丹沢山地より流下する河川が形成したと考えられる谷底平野に面した地点に位置する。なお、火山土地条件図（国土地理院、2003）には、この扇状地と山地とが面する部分は檜丸尾第1溶岩流の分布範囲として示されており、本遺跡はこの分布範囲に含まれる。上中丸遺跡では、発掘調査の結果、檜丸尾第1溶岩流より下位の堆積層より縄文時代中期、弥生時代前期、平安時代の各時期の遺構や遺物が確認されている。

本報告では、檜丸尾第1溶岩流および縄文時代の住居跡や土坑の年代、さらに縄文時代中期および弥生時代前期における植物利用の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

I. 放射性炭素年代測定

1. 試料

測定に供した試料は、発掘調査時に採取された炭化材を含む炭化物および水洗選別により回収された炭化材など3点である。内訳は、檜丸尾第1溶岩直下 炭サンプル②が最大5mm角程度の炭化物片、SI5 No.769が高さ約10mm×幅約10mm×厚さ約5mmの炭化材片、SK2 炭が約5mm角程度の炭化物片からなる。これらの3試料については、同一試料より分割した炭化材（SI5）および一括で採取された炭化物・炭化材（檜丸尾第1溶岩直下、SK2）を対象として、試料の履歴（由来）に関する情報を得るために、合わせて樹種同定を実施した。

2. 分析方法

試料に土壤や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma: 68%)に相当する年代である。なお、曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を校正することである。曆年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に曆年較正プログラムや曆年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。曆年

表10 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正値) (yrBP)	暦年較正結果				相対比 CodeNo.
				σ	cal AD 595	-	cal AD 641	
檜丸尾第1溶岩直下 炭サンプル②	1450 ± 30	-27.03 ± 0.57	1452 ± 26	2σ	cal AD 565	-	cal AD 618	1.000 IAAA- 113354
SI5 №769 炭化材(クリ)	4070 ± 30	-28.56 ± 0.49	4074 ± 29	σ	cal BC 2,833	-	cal BC 2,819	0.123
				2σ	cal BC 2,660	-	cal BC 2,650	0.076
					cal BC 2,634	-	cal BC 2,571	0.721
					cal DC 2,513	-	cal BC 2,503	0.080
					cal BC 2,853	-	cal BC 2,812	0.140 IAAA- 113355
					cal BC 2,745	-	cal BC 2,726	0.025
					cal BC 2,696	-	cal BC 2,563	0.712
					cal BC 2,534	-	cal BC 2,493	0.123
SK2 炭 炭化材(クリ)	4170 ± 30	-24.94 ± 0.47	4174 ± 28	σ	cal BC 2,877	-	cal BC 2,856	0.184
				2σ	cal BC 2,812	-	cal BC 2,747	0.584
					cal BC 2,725	-	cal BC 2,698	0.232
					cal BC 2,883	-	cal BC 2,835	0.213
					cal BC 2,817	-	cal BC 2,665	0.775
					cal BC 2,646	-	cal BC 2,638	0.012

較正は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が 68%、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果および考察

炭化材を含む炭化物試料の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、檜丸尾第1溶岩直下炭サンプル② 炭化物が $1,450 \pm 30$ yrBP、SI5 № 769 炭化材が $4,070 \pm 30$ yrBP、SK2 炭が $4,170 \pm 30$ yrBP を示す。また、これらの試料の較正暦年代（測定誤差 σ ）は、檜丸尾第1溶岩直下 炭サンプル② 炭化物が calAD 595–calAD 641、SI5 № 769 炭化材が calBC 2,833–calBC 2,503、SK2 炭が calBC 2,877–calBC 2,698 である（表 10）。

檜丸尾第1溶岩については、上杉ほか（1987）により、溶岩下位の焼けた黒色腐植土の放射性炭素年代測定から $1,730 \pm 120$ yrBP という年代が得られているが、その後、高田ほか（2011）により、溶岩基底の炭化材の放射性炭素年代測定から $1,510 \pm 40$ yrBP (calAD 530–calAD 610: σ 、calAD 440–calAD 640: 2σ) という年代も示されている。調査事例が少なく詳細な比較には至らないが、今回の結果は高田ほか（2011）と概ね同様の年代と言える。また、曾利式の土器が出土した住居跡（SI5）および土坑（SK2）の炭化材の較正暦年代は、小林（2008）の東日本の縄文土器の年代を参考とすると、ほぼ縄文時代中期後半頃に相当する。

なお、測定に供した試料の樹種同定の結果、SI5 № 769 と SK2 炭が落葉高木のクリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)、檜丸尾第1溶岩直下 炭サンプル② 炭化物は道管が認められたことから広葉樹と判断されたが、道管配列が観察できなかったため種類の特定には至らなかった。

II. 炭化種実同定

1. 試料

試料は、弥生時代前期の遺物が出土した住居跡（C区 SI2）と、曾利式期の土器を主体とする土器群つまり（C区 SX3）から出土した炭化物である（表11）。炭化物試料は、焼土やピットなどの埋積物の水洗選別によって回収された炭化物を含む微細遺物および発掘調査時に取上げられた炭化物からなる。本分析では、上記した目的を踏まえ、炭化種実の抽出と同定を主体とし、試料観察の際に確認された未炭化の種実遺体や炭化材、昆虫類などについては、その有無を結果に併記した。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて炭化種実を拾い出す。炭化種実の同定は、現生標

本および石川（1994）、中山ほか（2000）などとの対照から実施し、結果を一覧表に示す。分析後は、種実遺体を容器に入れて保管する。

3. 結果

結果を表IIに示す。全試料を通じて裸子植物1分類群（針葉樹のツガ）の針葉1個と、被子植物5分類群（広葉樹のオニグルミ、草本のアワ、ヒエ？、キビ、イネ科）の種実67個の、計68個が抽出・同定された。栽培種は、C区SI2焼土からアワの胚乳6個、ヒエ？の胚乳2個、キビの胚乳3個の、計11個が確認された。この他に、落葉高木のオニグルミの核の破片がC区SI2炭化物から43個、SX3から12個、SI2焼土から常緑高木のツガの針葉が1個、草本のイネ科の胚乳が1個確認された。以下に、確認された炭化した大型植物遺体の形態的特徴などを記す。

・ツガ (*Tsuga sieboldii* Carriere) マツ科ツガ属

針葉は炭化しており黒色、完形ならば長さ0.8～2cm、最大幅は先端部近くで1.5～2.5mm程度の偏平な線形で、先端部は鋸歯またはわずかに凹凸。基部は楔形に細まり、長さ1～1.5mmの柄が葉に直角に曲がる。葉表面には中肋に沿って凹む溝があり、裏面の溝の両側に灰白色の気孔帯が配列する。破片は基部が確認され、残存長1.8mm、幅1mm。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属

核は炭化しており黒色。完形ならば、長さ3～4cm、径2.5～3cm程度の広卵形。頂部が尖り、1本の明瞭な縦の縫合線がある。破片の大きさは、最大2cm程度。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・アワ (*Setaria italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ1.2～1.5mm、幅1.1～1.3mm、厚さ1mm程度の半偏球体で、腹面は平ら、背面は丸みがある。基部正中線上は、背面に長さ0.8mm、幅0.4mmの馬蹄形、腹面に径0.3mmの広倒卵形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。

・ヒエ (*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno) ? イネ科ヒエ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ1.3mm、幅1.2mm、厚さ0.9mmの半偏球体。背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上は、背面に長さ1.0mm、幅0.7mmの馬蹄形、腹面に径0.3mm程度の半円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。

・キビ (*Panicum miliaceum* L.) イネ科キビ属

胚乳は炭化しており黒色。径1.8mm、厚さ1.3mmのやや偏平な卵形。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部正中線上は、背面に長さ0.5mm、幅0.8mm、腹面に径0.4mmの半梢円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。なお、長さ1.5mm、幅0.8mmの細身で長さ1mm程度の胚の凹みがある胚乳をイネ科 (Gramineae) としている。野生種に由来する可能性と、生育状態が不良なアワ、ヒエ、キビなどの栽培種に由来する可能性がある。

4. 考察

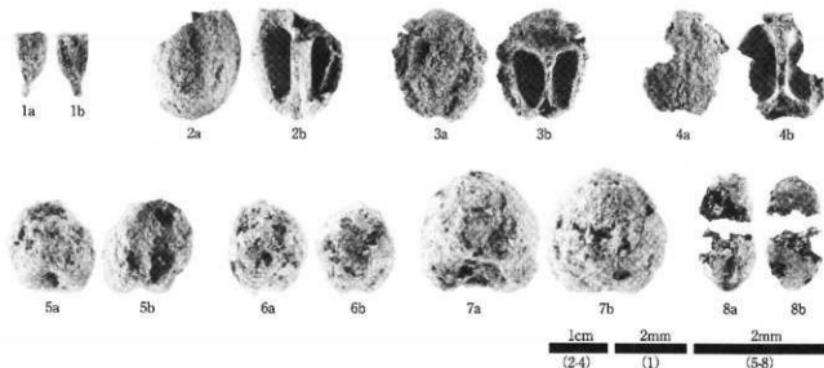
上中丸遺跡の住居跡や土器溜まりからは、アワ、ヒエ？、キビなどの栽培種のほか、木本のツガ、オニグルミおよび草本のイネ科などの炭化種実・葉が確認された。このうち、縄文時代中期後半の土器溜まり (SX3) と弥生時代前期とされる住居跡 (SI2) より検出されたオニグルミは、川沿いなどの湿潤な肥沃地に生育する落葉高木である。また、オニグルミは、核内部の種子が生食可能であり、古くより植物質食料として利用されてきた有用植物である。本遺跡周辺では、上墓地新屋敷遺跡の縄文時代中期前葉の焼土跡や中期後葉の林地を構成した樹木痕と想定される土坑出土炭化材などにもオニグルミの核や炭化材が確認されており（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2011）、周辺域にオニグルミが生育していたことや、当該期における植物質食料としての利用が推定される。

SI2焼土より検出された栽培種のアワ、ヒエ？、キビは、いずれも可食部である胚乳が確認された。これらは、出土地点や確認された部位などから、食糧として利用された雑穀類と推定される。上述した上墓地新屋敷遺跡における栽培種の出土状況についてみると、平安時代の住居埋積物の水洗選別により回収された

表11 炭化種実同定結果

試料	仮No*	分類群	部位	状態	個数	備考 (炭化種実以外)
C区SI2	燒土 上	1	アワ	胚乳 完形	3	炭化材
		キビ	胚乳 完形		1	
	焼土 下	2	ツガ 葉	破片(基部)	1	アカギゲンシ子(完形2破片2).
		イネ科	胚乳 完形	1	エノキゲンシ子(完形2破片1).	
No206	1	アワ	胚乳 完形	3	ケヤキ葉(1).炭化材.巻貝殻(1).	
	2	ヒエ?	胚乳 完形	2	炭化材.巻貝殻(1).昆蟲殼	
	-	-	-	-	-	種実確認されず.炭化材.
炭化物一括 クルミ?	-	オニグルミ	核 破片	43	計2個体以上.炭化材.	
	-	オニグルミ?	核 破片	4	炭化材	
C区SX3	炭化物 実	-	オニグルミ?	核 破片	8	炭化材

*同一名称の試料を区別するため、試料確認の際に付した番号。



第45図 大型植物遺体

炭化物より、アワ（近似種）を主体として、イネ、ムギ類、キビ、マメ類が伴うという結果（パリノ・サーゲイ株式会社, 2011）が得られており、試料の時期や数量が異なるものの雑穀類が多いという点は共通する。今回の結果は、本地域における弥生時代の植物質食糧の利用を示す事例と言え、さらに試料の年代の検討や同様の調査事例の蓄積による評価・検討が期待される。また、この他に検出された針葉樹のツガは、丘陵～山地の尾根や痩せ地に生育する常緑高木であり、イネ科は明るく開けた場所に生育する人里植物であることから、周辺域の森林や調査区近辺に生育していた個体に由来すると考えられる。

引用文献

- 石川茂雄, 1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄編刊行委員会. 328p.
 小林謙一, 2008. 純文土器の年代 (東日本). 小林謙一先生古希記念企画 総覧 純文土器. 株式会社アム・プロモーション. 896-903.
 国土地理院, 2003. 火山土地条件図 富士山 1:50000.
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000. 純文土器種子図鑑. 東北大出版会. 642p.
 パリノ・サーゲイ株式会社, 2011. 種実遺体と炭化材の同定. 上野寺新屋敷遺跡 - 農業集落建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-. 富士吉田市文化調査報告書第8集. 141-153.
 高田亮・石塚吉浩・中野俊・山元孝平・小林淳・鈴木雄介, 2011. 熊火割れ目が語る富士火山の特徴と進化. 荒牧重雄・藤井敏嗣・中田節也・宮地直道編 富士火山 (改訂版). 日本火山学会. 183-202.
 上杉陽・嶋内真・宮地直道・古原隆夫, 1987. 新富士火山最新期のテフラ-その細分と年代-. 第四紀研究. 26:59-68.
 吉村恵・平川一臣, 1982. I 地形分類図. 土地分類基本調査 山中湖・奈野・山梨県企画管理局土地水対策課. 13-20.

第5章 山梨県上中丸遺跡の植物圧痕の同定

山梨県立博物館 中山 誠二

1 分析資料

今回分析を行った資料は、山梨県富士吉田市上中丸遺跡から出土した土器で、KNM01・03～05がSI2、KNM02がSK1、KNM06がB区旧河道で出土している（第46図）。

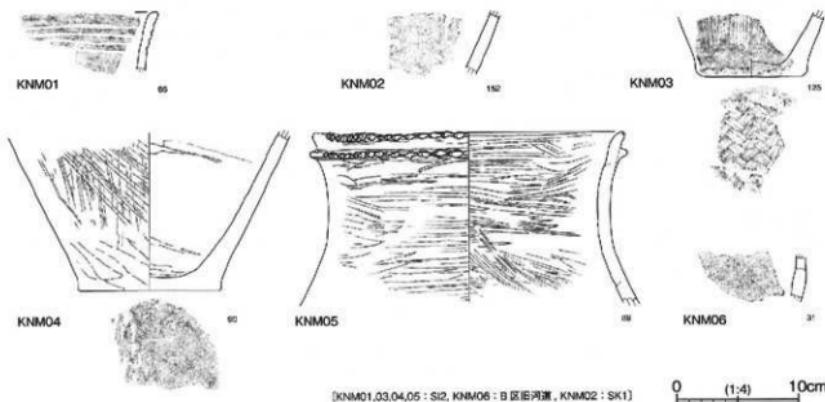
KNM01は、幅広の平行沈線を4条めぐらす口縁部で、水工式にみられる多条浮線文が沈線化し、型式変化したものと考えられる。KNM02・06は無紋の深鉢土器胴部片である。KNM03・04は条痕文を施す深鉢胴下半部から底部にかけての破片で、KNM03の底部には網代裏が認められる。KNM05は、指頭で刻みを入れた2条の突帯を口縁部にめぐらす広口壺で、胴部は条痕文を施している。これらの特徴から、弥生時代前期後葉の柳坪式に比定される条痕文土器と判断される。

2 分析手法

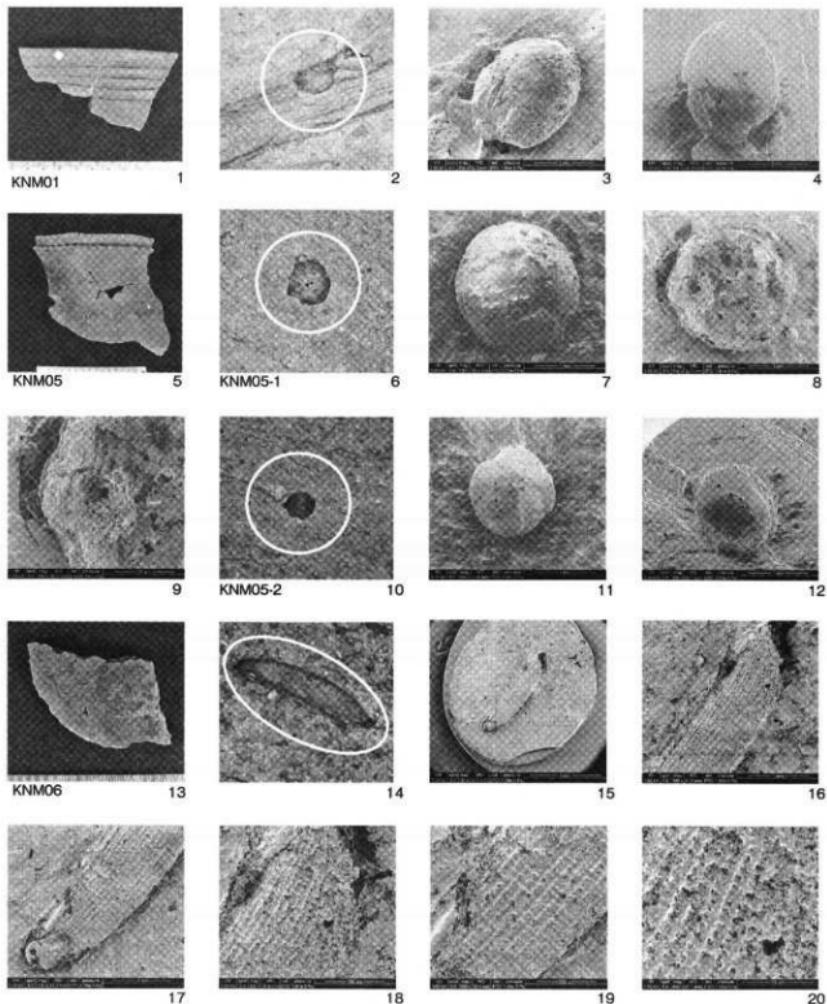
本調査では、縄文土器の表面に残された圧痕の凹部にシリコーン樹脂を流し込んで型取りし、そのレプリカを走査電子顕微鏡(SEM)で観察する「レプリカ法」と呼ばれる手法を用いる（丑野・田川 1991）。

作業は、①圧痕をもつ土器試料の選定、②土器の洗浄、③資料化のため写真撮影、④圧痕部分の実体顕微鏡での観察、⑤圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコーン樹脂の初期充填、⑥走査電子顕微鏡用の試料台に増粘剤を加えたシリコーンを載せ、初期充填を行った圧痕部分にかぶせ転写、⑦これを乾燥させ、圧痕レプリカを土器から離脱、⑧走査電子顕微鏡(ニコン製 Quanta600)を用いて転写したレプリカ試料の表面観察、⑨現生試料との比較による植物の同定という手順で実施した。

なお、離型剤にはアクリル樹脂(パラロイドB-72)をアセトンで薄めた5%溶液を用い、印象剤にはJMシリコンを使用した。



第46図 上中丸遺跡の圧痕土器



土器穿真：1,5,13
圧痕実態顕微鏡写真：2,6,10,14
圧痕 SEM 画像：3,4,7-9,11,12,15-20

第47図 上中丸遺跡土器圧痕

表12 上中丸遺跡圧痕一覧

番号	試料名	遺構名	部位	時期	型式名	種子圧痕の有無	植物同定
1	KNM01	SI2	深鉢口縁部	弥生時代前期後葉	柳坪式	○	不明種
2	KNM02	SK1	深鉢胴部	弥生時代前期後葉？		×	
3	KNM03	SI2	深鉢胴下半部・底部	弥生時代前期後葉	柳坪式	×	
4	KNM04	SI2	深鉢胴下半部・底部	弥生時代前期後葉	柳坪式	×	
5	KNM05-1	SI2	広口壺口縁部	弥生時代前期後葉	柳坪式	○	キビ (<i>Panicum miliaceum</i>)
6	KNM05-2	SI2	広口壺口縁部	弥生時代前期後葉	柳坪式	○	アワ (<i>Setaria italica</i>)
7	KNM06	B区旧河道	深鉢胴部	弥生時代前期後葉？		○	イネ (<i>Oryza sativa</i>)

3 分析結果（表12・第47図）

KNM01 （第47図1～4）

種子圧痕は、土器の口縁部直下から検出された。圧痕の長さ1.9mm、幅1.7mm、厚さ1.2mmで、曲線的な六角形を呈する。先端部は丸みをもつが、基部はやや尖り気味に突き出る。基部に胚とみられる楕円形の窪みが認められる。表面は平滑である。大きさ、形態的特徴はキビに類似するが、同定のカギとなる部位が認められないことから不明種とする。

KNM05-1 （第47図5～9）

土器の内外面から圧痕が2点検出された。

種子圧痕は、長さ22mm、幅21mm、厚さ1.9mmで、曲線的な六角形を呈する。先端部は丸みをもつが、基部はやや尖り気味に突き出る。表面は平滑で、上部の内頸部分を覆う外頸部との段差がわずかに観察される。大きさ、形態的特徴からキビ (*Panicum miliaceum L.*) の有ふ果と判断される。

KNM05-2 （第47図5・10～12）

種子圧痕は、長さ1.5mm、幅1.5mm、厚さ1.4mmで、全体に丸みを持ち、胚とみられる楕円形の窪みが中央部に認められる。大きさ、形態的特徴から脱稃した状態のアワ (*Setaria italica Beauv.*) の果実と判断した。

KNM06 （第47図13～20）

無紋の深鉢胴部片の内面に圧痕が認められた。

種子圧痕は、長さ5.3mm、幅1.2mmで、表皮に顆粒状突起列が明晰に認められる。形状および表皮の特徴からイネ類 (*Oryza sativa L.*) の内頸部分と判断される。

4 小結

今回、上中丸遺跡の圧痕分析を行った土器は、甲斐地域では柳坪式と呼ばれる条痕文土器で弥生時代前期後葉に比定される。

分析の結果、キビ有ふ果1点、イネ類1点およびアワ果実1点、不明種1点が検出された。上中丸遺跡が所在する山梨県内の東部地域では、ほぼ同時期の天正寺遺跡からイネ、アワ、キビの圧痕が確認されており（中山・網倉 2010）、当該地域において水稻農耕と雜穀の畠作農耕が混在していた可能性を示す資料と捉えることができる。

引用文献

- 丑野 錠・田川裕美 1991「レプリカ法による上部圧痕の検索」『考古学と自然科学』24 pp.13-35 日本国文化財科学会
 中山誠二・網倉邦生 2010「弥生時代初期のイネ・アワ・キビの圧痕－山梨県天正寺遺跡の事例」『山梨県立博物館研究紀要』第4集
 pp.1-14 山梨県立博物館

第6章 総括

今回の調査では、平安時代の堅穴住居跡2軒、弥生時代の堅穴住居跡2軒、縄文時代の堅穴住居跡1軒、土坑6基と出土遺物約13kgを検出した。遺構検出数・遺物出土量とも多くはなかったが、これらは富士火山灰堆積層に覆われていた希少な事例であり、他地域よりも一定の時間幅のなかで捉えられる可能性をもった資料といえる。また、富士吉田市域でこれまで確認されていなかった縄文時代中期後半、弥生時代の遺構を発見したことで、同地域の遺跡分布について再度検討が必要であることを示唆する結果となった。

総括では今後の調査研究に備え、検出した遺構と遺物、周辺環境などについて、できる限りまとめておくことにしたい。

第1節 遺構の変遷と土器編年について

検出した遺構の層序については第1章第4節で記したが、ここでは堆積状況の観察から得た知見とともに、層序の堆積順に遺構の変遷について述べておく。縄文時代中期後半段階については曾利II～V式期までの遺構・遺物が検出されたことから、第48図で縦軸を層序、横軸を土器編年として主な遺物と各遺構の検出状況を示した。また図中の隅丸方形の区画は遺構を示し、層序がはっきりしない部分は破線とした。なお、土器編年の位置づけについては、先述のとおり今福2011を元に筆者が比定したものである。以下、編年順に遺構の埋没状況と出土遺物の関係について述べておく。

【縄文時代】

基16層：曾利II式段階

本調査で検出した最も古い段階である曾利II式段階の土坑（SK2）を基16層下部から検出した。SK2では地文に条線を施し、2本の波状隆線と半截竹管内面で分割整形した3本の隆線からなる隆帯が見られた。土器資料では、SK1とSK2の近くから出土した破片が接合した〔163〕が最も古く、頭部隆帯と2本の隆帯による懸垂文など古段階に比定する要素がみられた。出土遺物から曾利II式新段階と位置づけ、SK2で検出した炭化物の年代測定では、補正年代で $4,170 \pm 30$ yrBP、較正暦年代（測定誤差 σ ）は calBC 2,877–calBC 2,698といった測定値が得られた（詳細は第4章掲載。以下同）。

基16層：曾利IV式古段階

堅穴住居跡（SI5）を検出した。堅穴住居跡の年代を示す遺物がなく、SK2とほぼ同面での確認であったが、覆土に基13～15層のスコリア層の堆積がみられたことから、この段階に比定した。

同遺構では住居廃棄後の埋没過程においても、何らかの目的で利用した痕跡と推定する焼土堆積が確認できた。覆土（基16層）中にみられたもので、用途は不明であるが土器片の出土も確認している。また、この覆土上面において、曾利IV式の土器を検出している。住居床面直上の堆積土（基16層内）からは住居の構築材と推定する炭化材（クリ）を検出し、補正年代で $4,070 \pm 30$ yrBP、較正暦年代（測定誤差 σ ）は calBC 2,833–calBC 2,503 であった。なお、基15層に覆われていた状況から、次段階の遺構とは明確に時間差があることが認められ、テフラ分析においては、4300～4500年前頃と推定されていることから、年代についての相違はみられない。また、基16層以下はC区全面で比較的平坦な堆積状況であることが確認できた。この段階までは安定した土壤が広がっており、周辺に集落遺構が分布している可能性は十分に考えられる。

基15層上層：曾利V式古段階

基15層のスコリアの上層から掘り込まれていた土坑（SK1・4・6）を検出した。編年では曾利V式古段階に比定する遺物が出土している。基15層上面に堆積した基12層は、火碎サージ噴出物起源である可能性が指摘されていることから、周辺の様相に大きな変化を与えたことが推測される。但し、調査区内では基12層の堆積状況は疎らであり、同層に覆われていた状況が明確だったのはSK6のみであった。なお、同段階の他の遺構については11層中からの掘り込みと判断した。基11層については場所により堆積の厚さが異なり、砂層や砂礫層が互層となるなどの状況から、雪代等の土石流堆積と推察した。状況からは基15層上面に降

	新石器时代晚期 新石器时代中期	新石器时代晚期 新石器时代中期	新石器时代晚期 新石器时代中期	新石器时代晚期 新石器时代中期
图10 图				
图11 图				
图12 图				
图13 图				
图14 图				

SX3 通体素面深腹盆 (SAN) ◆磨制方式 ■磨制形式)

224 226 247 235 228 211 238 265 260 267 265 260
216 217 720m

第48图 繁年别土器出土状况图

示したスコリア層の堆積が明確でないことも含め、この段階に土地様相の大きな変化があったと考えられる。なお、この境部分にあたっていたのが、次段階とするC区北側のSX3と考えられる。

基11層：曾利V式段階（曾利IV式新段階～曾利V式中段階）

基11層堆積の一部で、水の影響を受けていた部分と推定したSX3で、小佐野川や大沢川などの流れが流入していた状況が窺えた。編年では主に曾利V式段階の遺物を包含しており、SX2などの加曾利E式の影響がみられる遺物も検出している。なお、小片で出土量も少なかったが、曾利IV式の特徴とされる蛇行沈線文や綾杉状の条線が施された遺物が混在した。出土状況については特段変化はみられず（第48図下）、別遺構から混入した可能性の他、曾利V式段階に残った前段階の文様要素とも考えられる。また、曾利V式古段階が主体であるが、2本単位の沈線による口縁部の弧線文と胴部の懸垂文のみでハの字文等が充填されない[253・254]なども出土しており、編年では曾利V式中段階までと比定している。

基10層：加曾利E4式段階

SX3、基11層を埋める基10層から、加曾利E4式の土器が出土した（SX1）。文様は曾利V式古段階に位置付けられる可能性もあるが、層序からSX3よりも後出する段階と比定しておく。なお、今回の調査では縄文時代中期末の痕跡は、基10層より上層では確認されなかった。

基8層：縄文時代後期

基11層と同じく、場所によって堆積の厚さが異なり、砂層や砂礫層が互層となっていた。遺物はほとんどなく、称名寺式の土器片が出土した。第3図②～④で示したように、調査区内で最も土地の起伏が大きく変化している層であり、緩やかに北斜する自然地形のなか③付近で起伏のピークがみられた。土層観察では均一な堆積ではないことは明らかで、流路等に沿って流入してきた土石流等の堆積と考えられる。なお、同層下部には火碎サージの可能性が高いとする堆積が確認されており、下層の基12層と同様でサージ堆積後の上層は堆積が乱れるというパターンが窺えた。その他、C区南側の同層堆積が薄い部分では、人頭大の礫や火山弾などが確認された。

基4層：縄文時代晚期

詳細な時期は明確ではないが、C区東壁の土層観察において、縄文時代晚期頃と推定する土坑状の掘り込みを確認した。覆土は黒褐色のスコリア層で、基4層面においては遺構プランの判別はできなかった。調査は試掘やH19年度の調査成果を元に進めたが、縄文時代中期段階の確認面までの掘り下げの際にも、遺物の出土は確認できなかった。同時期の遺構の性格を把握するためには、土色の変わる基5層または基6層段階において精査する必要があったといえ、今後の調査に期待したい。なお、平安時代の堅穴住居跡（SI4）も同層で確認しているが、上層からの掘削もしくは平安期には既に同面近くまで削平されていたと推定した。（弥生時代）

基3層：弥生時代前期後葉

明確な掘り込みは確認できなかったが、弥生時代の遺物が集中した2か所を住居跡と推定した（SI2・3）。同層はC区北側においては水田もしくは流路の影響で削平されていたと推定する。

〔古墳時代〕

基0～1層：古墳時代

榎丸尾第1溶岩流の流出により影響を受けた基1層、および溶岩流下部にあたる細かく砕けた溶岩の堆積を確認した。基1層中から採取した炭化物の年代測定では、補正年代 $1,450 \pm 30$ yr BP、較正暦年代（測定誤差 σ ）calAD 595～calAD 641 であった。

〔平安時代〕

基-2層：平安時代

遺物は少なかったが、10世紀頃に比定した堅穴住居跡（SI1・SI4）を検出した。土地の起伏が大きく、C区北側では掘削もしくは流路等により堆積しなかった可能性も窺えた。

第2節 検出した遺構・遺物の特徴について

(1) 遺物の出土傾向

遺構・遺物に関しては第3章で触れてきたが、各遺構別の出土重量と遺物取り上げ点数をまとめ、各計測値、比率をそれぞれグラフで表した(表13・14)。調査時の遺物の取り上げ目安としては、土器類はおよそ500円硬貨大以上のものとし、「遺構くん」によって種別ごとに取り上げ、総点数は800点であった。

遺物の種別に関しては、整理作業の段階において、洗浄後の遺物をすべて観察し、種別・年代等の確認を実施した上で、各時期、種別ごとの総重量と比率をまとめた。

種別により個体の重量は異なるが、今回の調査では取上点数においても縄文時代の遺物が最も多く出土しており、さらには縄出土遺物重量の約半分がSX3から出土したものであった。弥生土器に関しては、搅乱等の影響で遺構外出土(C区一括)も多くなったが、調査時の初見ではほぼSI2・SI3の2箇所に分布が集中していた。また、表4でも示したが、B区ではほぼ旧河道からの出土で、土師器の出土量は全体の約60%を占めた。縄文時代から幾度かの流路変遷があったと推定したが、今回の調査で確認した範囲では、遺物の分布状況からも、槍丸尾第1溶岩流の流出以後に堆積した部分が大半であったことが窺えた。

今回の調査では石器の出土が際立って少なく、チャートなどの石材やサンプルとして取上げた自然石等をあわせても、取上点数の比率で、わずか4.8%であった。平成19年度調査でも同じ傾向であったことから、同遺跡の特徴のひとつといえよう。石器の石材としては、黒曜石、砂岩、玄武岩などが使用されていた(表8)。

その他、富士山周辺地域の特徴を示す資料として、基8層上面から玄武岩の火山弾が出土している。(巻頭図版2)。その形状から独鉛石等の石器と考えたが、人為的な加工痕ではなく、紡錘状火山弾の特徴である細長いアーモンド状で縱長の溝がみられ、(図版28)土石流等により運ばれてきたものと判断した。

表13 各調査区・遺構別出土遺物重量一覧

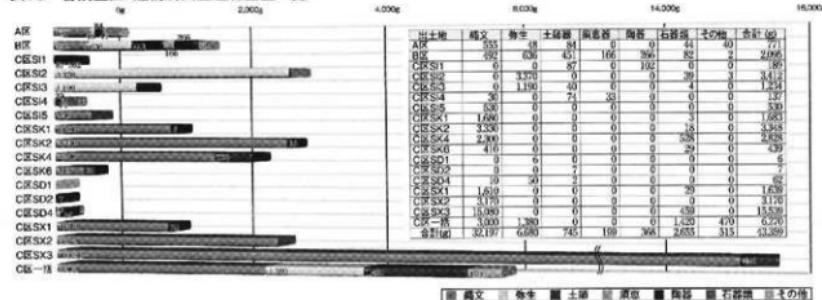
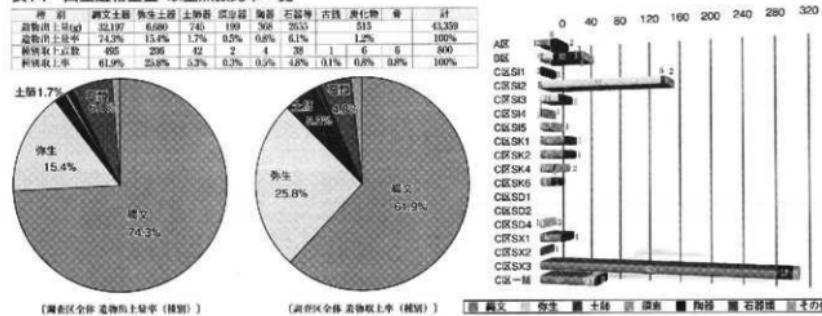


表14 出土遺物重量・取上点数比率一覧



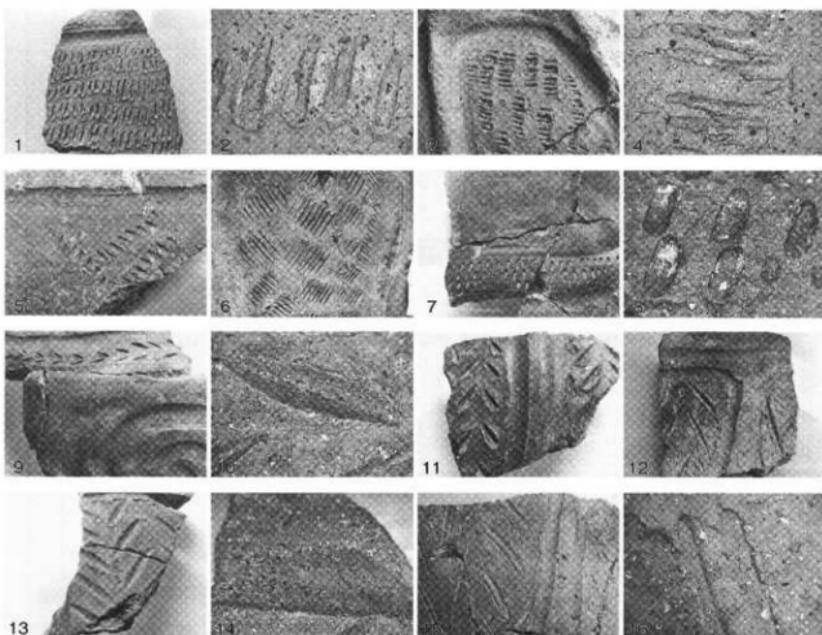
(2) 清瓶の出土について

SII からは仏教関連の遺物とされる灰釉陶器製の清瓶が出土した。頸部のみの出土であったが、出土遺物は金属器を模写したもので、ラッパ状に開く環台に円錐状の尖台部を載せて繋げたものである。県内では希少で、発掘調査事例では南アルプス市百々遺跡、笛吹市大原遺跡などが知られるが、いずれも小片である。出土した清瓶は、鍔状の環台部分がすべて欠損しており、打ち欠き行為の痕跡と思われる。なんらかの祭祀行為に使用されたもので、立地的には富士火山に対するものと考えられるが、想像の域をでない。但し、調査区周辺には小明見富士浅間神社が鎮座し（第1図参照）、春祭りに行う御輿渡御は平安時代の面影を残すものとして伝承されている。立地的にも檜丸尾第1溶岩流と集落との境あたりに位置しており、古くから富士に関する地鎮祭祀などが行われていた可能性は十分考えらるよう。今回の清瓶の出土についても、このような土地柄に連関した資料と位置付けておきたい。

(3) 曾利V式期の文様について

今回最も多く出土した資料となった曾利V式の土器については、甲府盆地よりむしろ富士北麓方面にかけて比較的多くの資料がみられると指摘されており（今福 2011）。なかでも特徴的であったのが櫛歯刺突・櫛歯条線を施文したものであった。これに関しては、静岡県富士宮市に所在する千居遺跡の報告で千居式土器と名付けた分類がされている。本調査では、今福氏編年を元に比定したため、千居式についての詳細には触れない。しかしこの文様も含め、富士山周辺地域で特徴的にみられる土器群とする視点は注目でき、同地域における土器様相を示すものと考えた。今回の資料は小片が多く、時期や形態が不明瞭な点もあったため、ここでは隆帶の観察と施文具・施文方法について若干の考察を行っておく。

まず、櫛歯刺突・櫛歯条線（第49図1～6）についてであるが、今回の報告では下図1、3のように充填する文様については刺突文として報告したが、細部の観察では半截竹管状の工具を2～3本ほど横に連ねて短い条線状に施文したものであった。竹管状工具の本数は異なるが、ハの字状に施文された5・6について



第49図 施文技法（櫛歯刺突・条線、ハの字文）

も同様で、条線の長短の違いによるものといえる。また、隆帯上にも刺突を施した〔260〕については、条線状に引かず、刺突面も平らなスタンプ状の施文がみられた（第49図7・8）。

隆帯施文技法については、1本隆帯の脇を指ナデした6類と、隆帯が断面台形状を呈し器面までナデが及ばない7類の両方がみられ、やや7類が少ないと傾向はあったが、観察した調整痕との関連性は特に見出せなかった。但し、〔260〕と同じように、隆帯については隆帯上をヘラ等で平坦に調整し、6類同様に器面まで指ナデを施したもののが観察できた（第49図9～12）。これらについては充填するハの字文をヘラ状工具で施文するものが多く出土している。また、隆帯が省略され、半截竹管背面による沈線による区画を施文したもの（13・14）は、当然ながら光填するハの字文も同じ工具によって施文しており、曾利IV式に比定した〔316〕についても同様であった。

その他、SX3では半截竹管による2本沈線で浅く施文するハの字文（第49図15～16）や、曾利V中段階にみられる細くまばらなハの字文〔249～252〕、また曾利IV式に位置付けたが深く長い櫛歯条線を施したもの〔215～218〕なども出土した。

以上、火山灰により一定の時間幅のなかに収められた資料について述べた。但し、周辺遺跡との比較や地域性についての検討、特に加曾利E式についての検討が足りず、出土した資料の様相を十分に示すことができなかった。この点についても今後の課題とし、文様の構成や傾向について考察を重ねていくことにしたい。

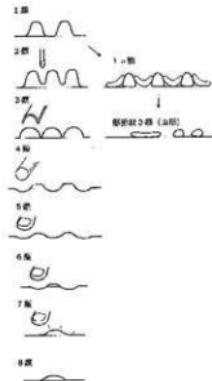
第3節 上中丸遺跡周辺における遺跡の変遷について

最後に、本調査の成果と周辺に分布する遺跡に関して、年代や遺構の分布、遺跡の変遷等について触れておくことにしたい。富士北麓地域における遺跡分布については、新津健氏により詳細にまとめられている（新津2012）。このデータを元に、第51図では本遺跡周辺における遺跡の変遷を示した。富士吉田市域の遺跡分布に関しては、末木健氏により1985年に市史編さん事業の一環として実施した調査の報告がなされており、踏査で得た知見を詳細にまとめられている（末木1985）。

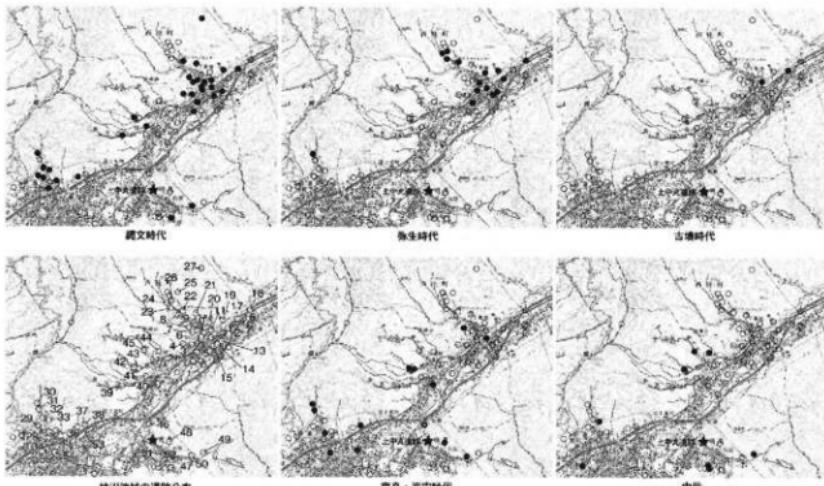
末木氏の報告においては、縄文時代について前期から中期にかけて遺物は出土するものの、遺構は発見されていないとし、弥生時代についても調査による特別な成果はなかったと報告されている。但し、市域の北においては、西桂町・都留市周辺で縄文時代・弥生時代の遺跡が桂川流域の山裾などに分布し、遺構・遺物が確認されており、同地域においても集落遺構の存在は推定されていたと思われる。今回の調査では、地表面から約3.5mほど下層から中期末の遺構を検出した。検出した堅穴住居跡については、西桂町宮の前遺跡で検出した第3号住居址に堆積状況が類似している。なお、宮の前遺跡の報告書では出土した土器は曾利III式とされているが、曾利IV式古段階に比定できるものと思われ、同時期に、同じような状態で埋没した遺構といえる。なお、富士吉田市史では溶岩流や河川によって削平されて流出した可能性も指摘しているが、遺構を検出した土層については比較的安定した土壤であったことが窺え、周辺地域でも同様に遺跡が遺存している可能性は高くなっている。

弥生時代についても、桂川流域で多く分布がみられていたが、今回の調査では前期後葉の遺物を伴う遺構を発見し、この地においても同時代に生活が営まれていたことが明らかとなった。但し、B区旧河道からの遺物の出土状況が示すように、土層観察からみた所見では、遺構を確認した弥生時代の層は（正確にはその下層であるが）、縄文時代中期末の層よりも起伏が大きく、河川や檜丸尾第1溶岩流の影響を直接的に受けていることが推定されるため、流出してしまっている可能性も高い。

さらに末木氏は奈良・平安時代について、古屋敷遺跡・池之元遺跡の平安住居が鍛冶工房である可能性を指摘し、この時期に活発化する山林原野の開発に伴って各地域ごとにおかれると推定されている。本調査では溶岩流以外、古墳時代から9世紀までは明確な痕跡はなかったが、10世紀代に再び居住し、淨瓶等の特徴



第50図 施文技法の分類
(今福2011より転載)



第51図 桂川流域遺跡分布図

的な遺物の出土もみられた。平安期の富士山周辺では、剣九尾第1溶岩流、檜丸尾第2溶岩流などの下に埋もれた遺跡が推定される一方で、小明見富士浅間神社の存在も含め、溶岩流や河川の影響を考えた土地利用や祭祀行為が行われていた集落の存在も重要と考える。溶岩流に沿った土地で遺構が検出される上中丸遺跡の性格、位置付けなどについては、今後の課題として検討を重ねていくことにしたい。

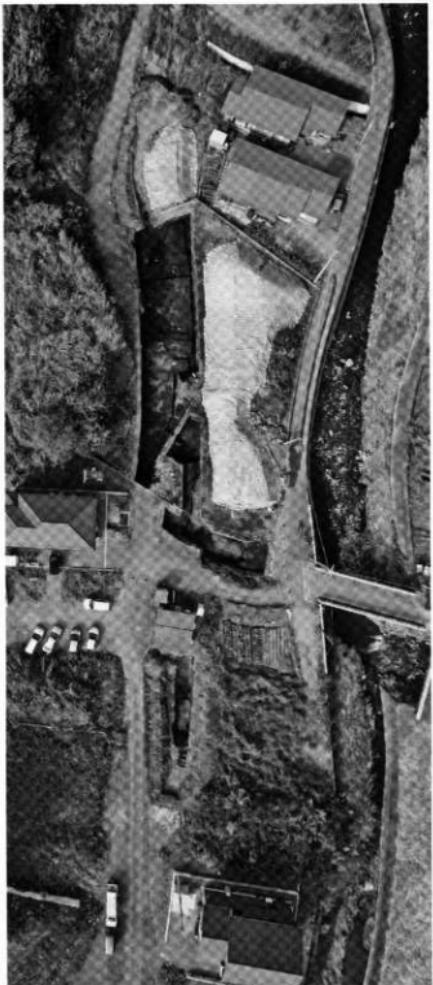
おわりに

本書では今後の調査研究に繋げるため、調査時および整理報告作業で得た知見をできる限りまとめるよう努めた。但し、考古学研究上の課題は多く、まだこれから周辺遺跡との比較検討をはじめとする段階にある。本書をまとめたにあたっては、多くの方にご助言、ご協力を賜ったが、内容に反映しきれなかった部分に対しては、ご叱正を頂戴しながら研究・検討を重ねていくことにしたい。本書が今後の調査研究および地域教育の一助として、活用して頂ければ幸いである。

なお、本調査の成果は、発掘開始から本書刊行に至るまでご尽力いただいた富士吉田市、富士吉田市教育委員会をはじめ、半数が初現場という状況にも拘らず、厳しい暑さと慣れない作業に耐えながら調査をやり遂げていただいた発掘調査スタッフ、詳細な記録をまとめあげていただいた整理作業スタッフ、そして小明見・向原地区をはじめとする地元の皆様のご協力があってこそ成し得たものである。末筆となりましたが、ご協力いただきました関係機関、各位に対しまして、心より御礼申しあげます。

引用・参考文献

- 富士吉田市史編さん委員会 1990『富士吉田市史』史料編第1巻自然考古
- 富士吉田市教育委員会 2011『上暮地新居敷遺跡』富士吉田市文化財調査報告書第8集
- 小林道雄編 2008『続鑑 純文土器』一小林道雄先生古希記念企画—『続鑑 純文土器』刊行委員会
- 今福利浩 2011『純文土器の文様生成構造の研究』未完成考古学叢書8
- 中山誠二 1993『甲斐勝生土器編年の現状と課題—時間軸の設定—』山梨県立考古博物館・山梨県歴史文化財センター研究紀要』第9集
- 末木 健 1987『富士吉田市内遺跡分布調査報告』『富士吉田市史研究』第2号、富士吉田市史編さん室
- 新津 雄 2012『富士山・山梨県富士山總合学術研究会報告書』
- 西桂町教育委員会 1993『宮の前遺跡発掘調査報告』西桂町文化財シリーズ第15号



1. 調査区全景（南から）



2. 周辺景観（北東から）



3. 周辺景観（南東から）



4. 調査前状況（A区）（南から）



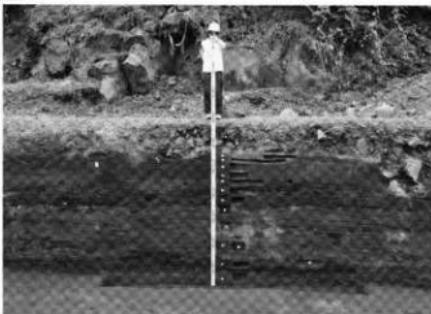
5. 調査前状況（B区）（東から）



6. 調査前状況（C区）（南東から）



1. 檜丸尾第一溶岩流



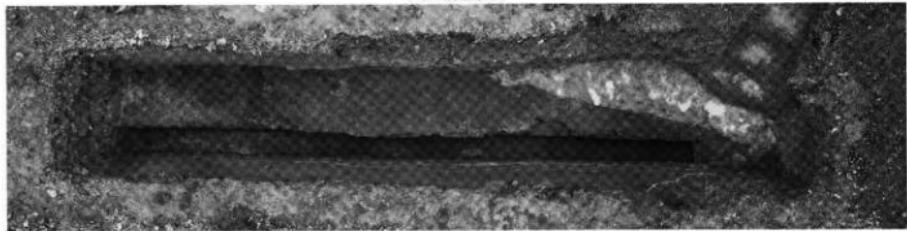
2. 同左下層堆積状況



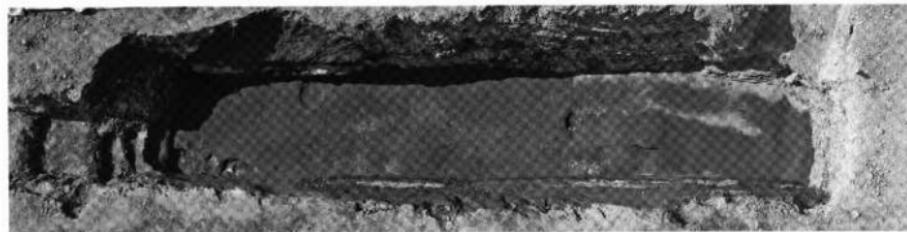
3. 檜丸尾第一溶岩流
東端部（南東から）



4. C 区堆積状況
(北東から)



1. A区 第1確認面（東から）



2. A区 第2確認面（東から）



3. A区からみた富士山（北東から）



4. A区 第1精査面（北から）



5. 同左 堆積状況（北西から）



6. A区 近景（南から）



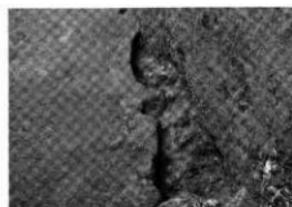
7. A区 第2精査面（南から）



8. 同左 堆積状況（北西から）



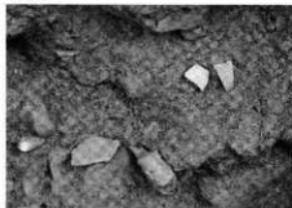
9. A区南東隅 堆積状況



10. 同左 遺物出土状況



11. 同左〔13・14〕



1. A区南東隅 遺物出土状況



2. A区 中央落ち込み確認状況



3. 同左 遺物出土状況



4. 同 [10]

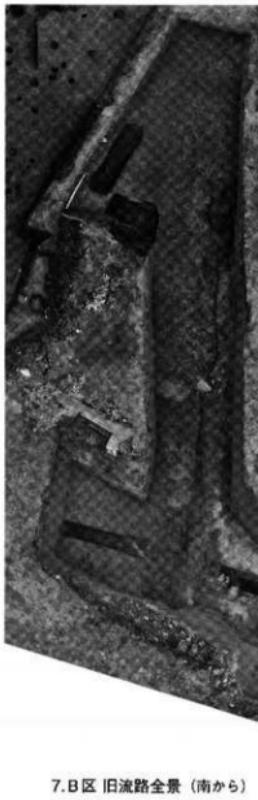


5. 同上 完掘状況（北東から）



6. 同 完掘状況（西から）

B区 調査状況



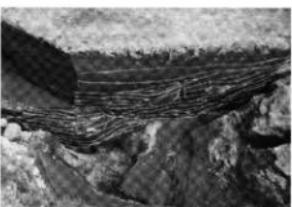
7. B区 旧流路全景（南から）



8. 旧流路西侧落ち込み（北から）



9. SK4 完掘状況



10. B区 旧流路堆積状況



11. B区 旧流路 完掘



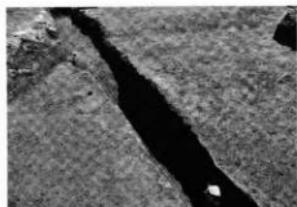
1. B区 近景（西から・大沢川方面）



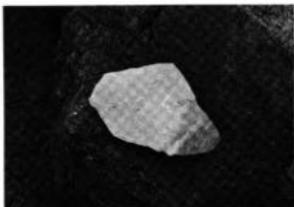
2. 調査風景



3. 旧流路 堆積状況（南西から）



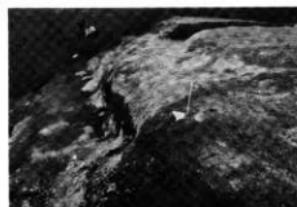
4. 遺物出土状況（南東から）



5. 遺物出土状況 [46]



6. 旧流路幅確認状況（南東から）



7. 旧流路左岸（西側）（北から）



8. 同左 遺物出土状況 [348]



9. 流路内出土状況（東から）



10. 流路内遺物出土状況 [50]



11. 同 [55]



12. 同 [56]



13. 同 [57]



14. 同 [38]



15. 同 [345]

B区 遺構・遺物出土状況



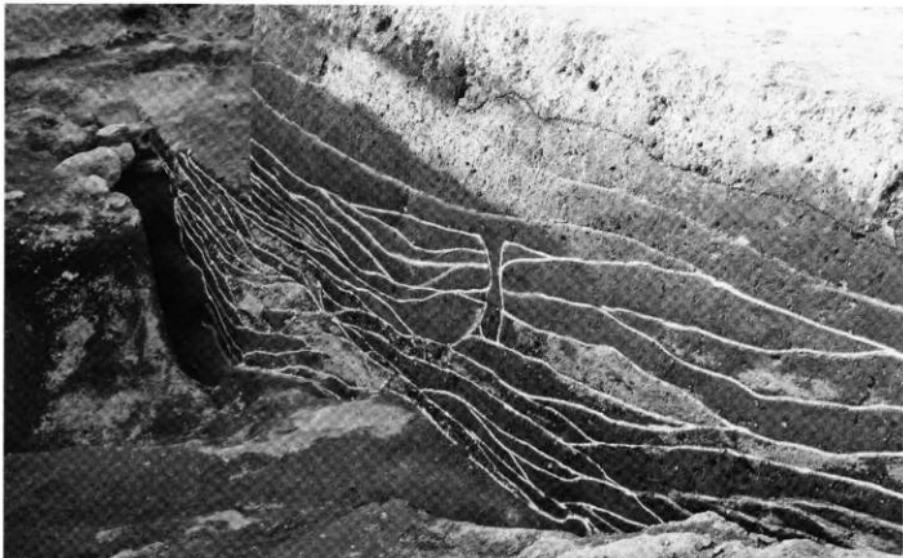
1. 流路内遺物出土状況 [25]



2. 流路最下層遺物出土状況



3. 同左 [19]



4. 旧流路堆積状況



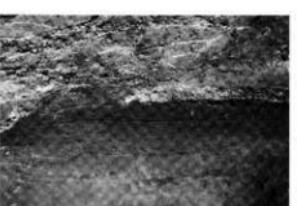
5. 大沢川・小佐野川合流点（台風時状況）



6. 台風による水没状況



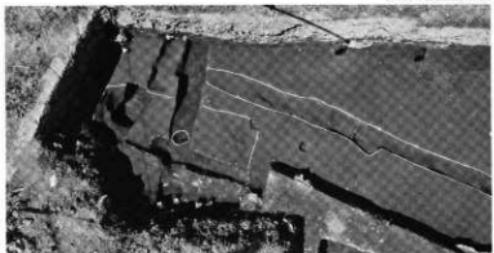
7. 流路下層掘削



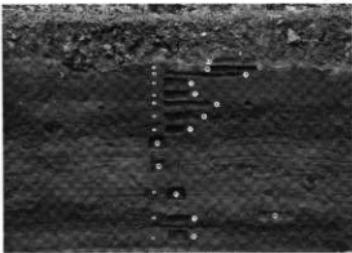
8. 流路下層堆積状況



9. 流路下層堆積状況



1.C区第1面 (SI1)



2.C区層序断面図



3.C区第2面 (SI2・3・4、近代溝)



4.C区第3面 (SX1、Pit)

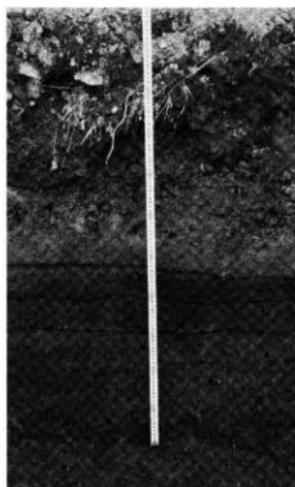


5.C区第4面 (SX2・3)



6.C区第5面 (SI5、SK1～5、Pit)

C区 調査状況



11. 5層目全景・完掘状況 (南から)



1.SI1 プラン確認・遺物出土状況



2. 同 清瓶 出土状況 [61]



3. 同 遺物出土状況



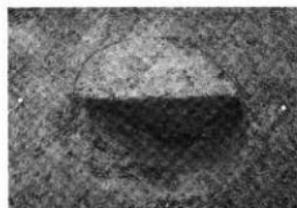
4.SI1 遺物出土状況 [58]



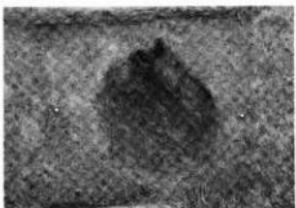
5. 同 [59]



6. 同 [60]



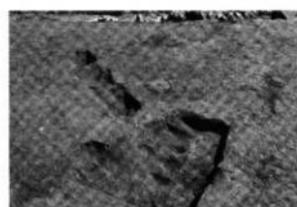
7.SI1 Pit 半截状況（北から）



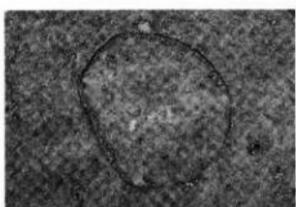
8. 同左 完掘状況（北から）



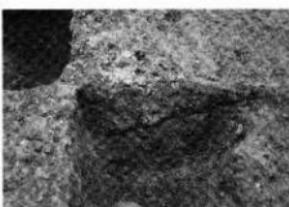
9.SI1 完掘状況



10.SI2 確認状況



11.SI2 焼土（炉）確認状況



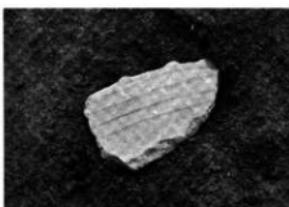
12. 同左 堆積状況（南から）



13.SI2 確認状況（北から）



14.SI2 遺物出土状況（北から）



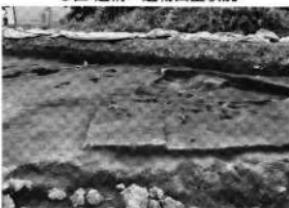
15. 同左 [62]

図版 10

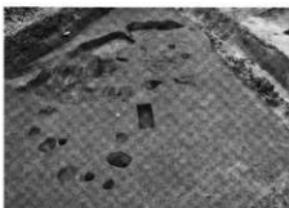
C 区 遺構・遺物出土状況



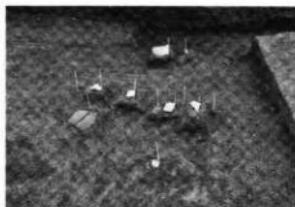
1.SI12 調査状況（南東から）



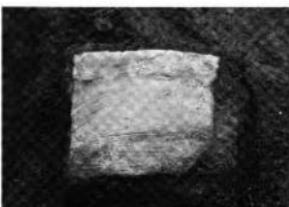
2. 同 遺物出土状況（北東から）



3. 同 完掘状況（北から）



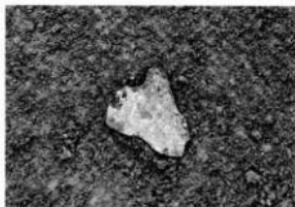
4.SI3 遺物出土状況



5. 同 [129]



6. 同 [343]



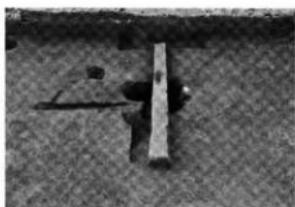
7. 同 [344]



8.SI3 焼土（炉）半截状況



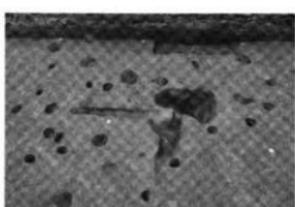
9. 同 完掘状況



10.SI3 周辺ピット確認状況（東から）



11. 同 罩土堆積状況（南東から）



12.SI3 完掘状況（東から）

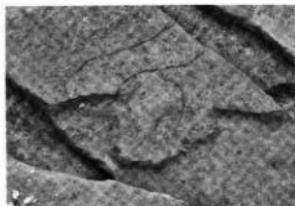


13.SI12・3 完掘状況（南から）



14.C区 2層目 完掘状況（南から）

C区 遺構・遺物出土状況



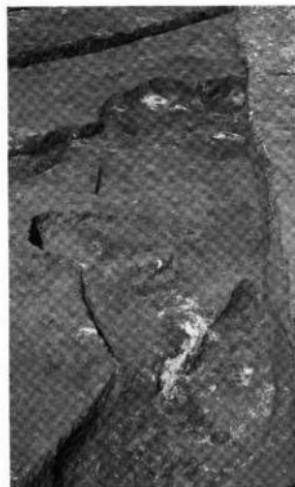
1.SI4 確認状況



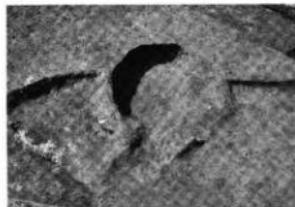
2.SI4 挖乱内遺物 [135]



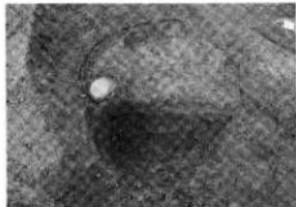
3.SI4 カマド内堆積状況



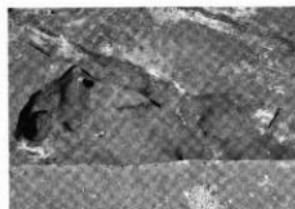
4.SI4 近景（南から）



5.SI4 カマド調査状況



6.SI4 カマド脇ピット 半截状況(東から)



7.SI4 完掘状況



8. 同上 遺物出土状況 [137]



9.SI5 確認状況（東から）



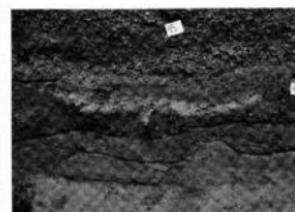
10. 同 スコリア堆積除去後



11. 同 覆土掘削後



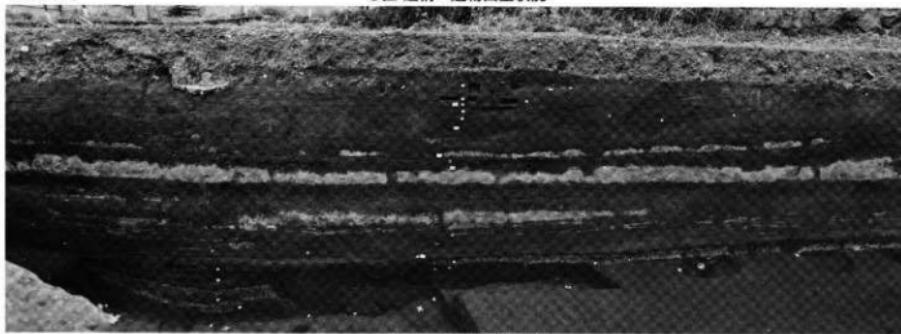
12. 同 柱穴掘削後



13. 同 覆土中の焼土堆積状況



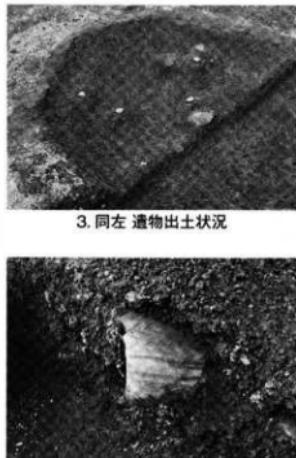
14. 同 完掘状況



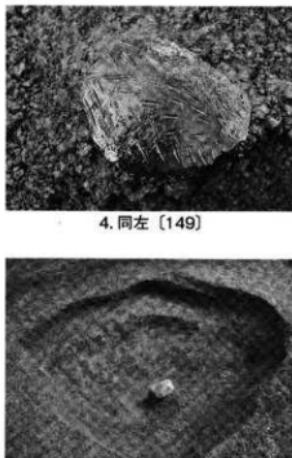
1.5 層目 C区西壁堆積状況



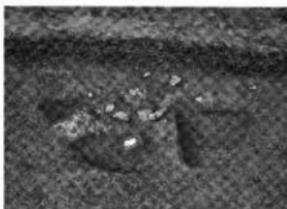
2.SK1 半載状況（南東から）



5. 同上 [148]



6.SK1 完掘状況



7.SK2 遺物出土状況（東から）



8. 同 碲・炭化物確認状況



9. 同 碲堆積状況



10. 同 碲・遺物出土状況

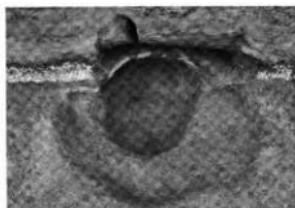


11. 同 遺物出土状況



12. 同左 [167 ~ 173]

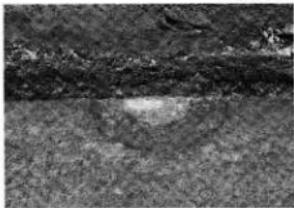
C区 遺構・遺物出土状況



1.SK2 完掘状況



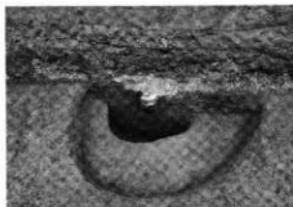
2.SK3 半截状況 (南から)



3.SK4 確認状況 (西から)



4.SK4 遺物出土状況 (東から)



5. 同左 半截状況



6. 同左 粘土下遺物出土状況



7. 同上 粘土下遺物出土状況 [181]



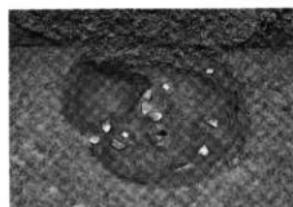
8. 同左 [182・190]



9.SK4 掘削後状況



10.SK5 半截状況 (南から)



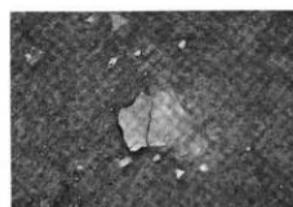
11.SK6 遺物出土状況 (西から)



12.SK6 堆積状況 (北西から)



13.SX1 確認状況 (北から)



14. 同左 出土状況 [202] (北から)



15. 同左 下部 (南から)

図版 14

C区 遺構・遺物出土状況



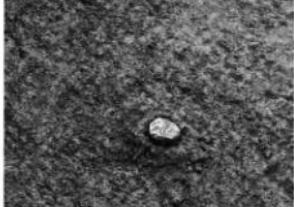
1.SX2 [206] 確認状況



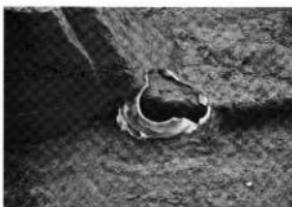
4.SX3 土製円盤 [207] 出土状況



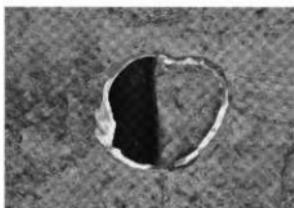
2. 同上 半截状況



3.SX2, 土製円盤 出土状況



5.SX2 半截状況



6. 同上 半截状況



7. 同左 範囲確認状況



8. 同 完掘状況



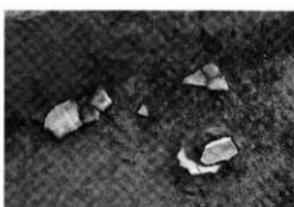
9.SX3 遺物出土状況（東から）



10. 同左（南東から）



11. 同左（南東から）



12. 同上（北から）



13. 同左 [266]



14. 同左 [225]

C区 遺構・遺物出土状況



1.SX3 遺物出土状況〔209〕



2.同左〔275〕



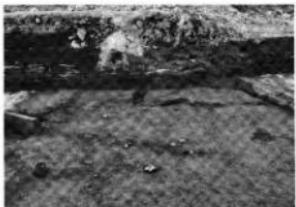
3.同左〔235〕



4.同上〔264〕



5.同左〔240〕



6.同左(東から)



7.同上(チャート)



8.同左〔241〕



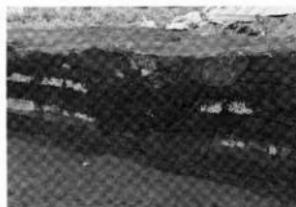
9.SX2・3 調査状況(南東から)



10.SX3 完掘状況(南東から)



11.SX2・3 完掘状況(北西から)



12.C区東壁



13.C区北東部サブトレ(南西から)



14.同サブトレ内出土遺物〔314〕



15.同左〔268〕

調査風景・埋め戻し状況



1. 表土掘削（A区）



2. 調査風景（A区）



3. 調査風景（B区）



4. 調査前測量実習



5. 調査風景



6. 同左



7. 調査風景（C区）



8. 火山灰分析調査



9. 重機による掘り下げ



10. 堆積土サンプリング状況



11. H19年度調査出土 デボ造構



12. 埋め戻し



13. 埋め戻し後（A区）

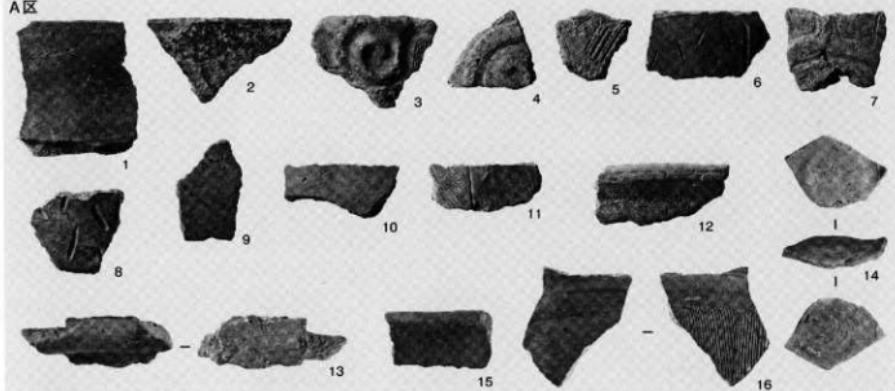


14. 埋め戻し後（B区）

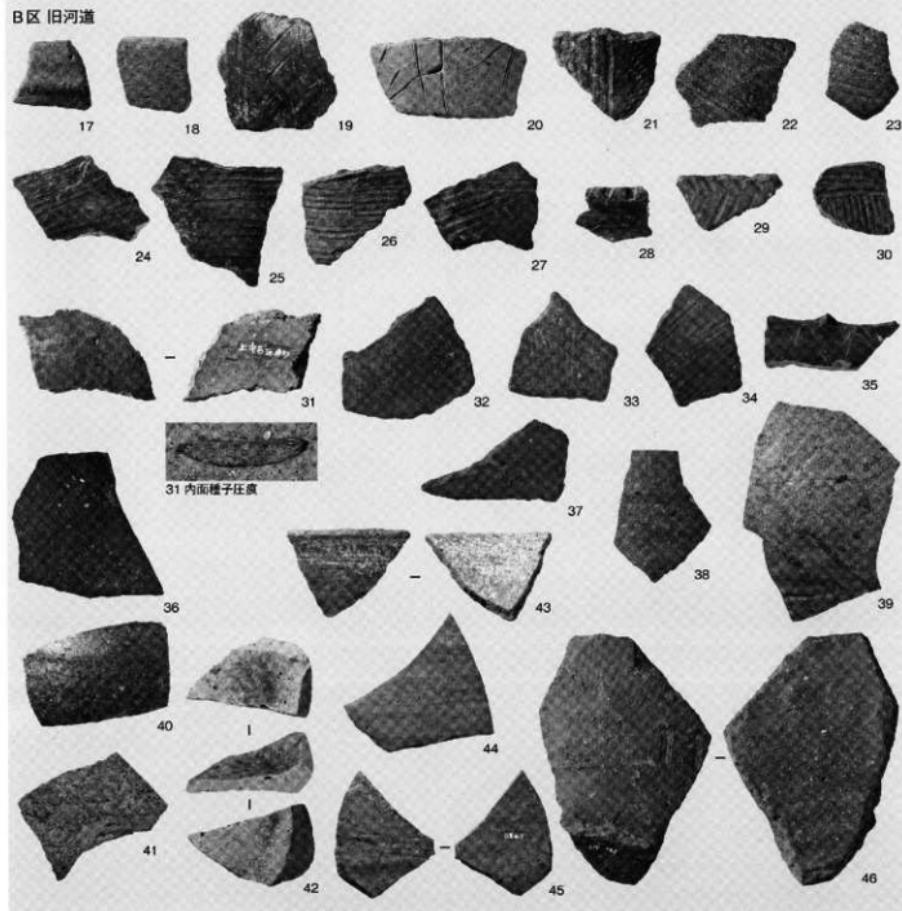


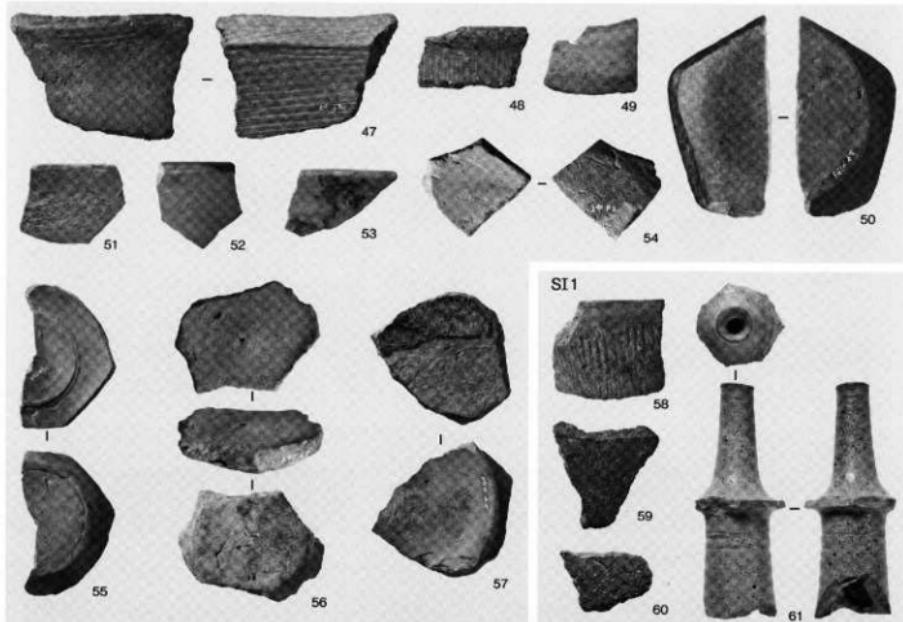
15. 埋め戻し後（C区）

A区

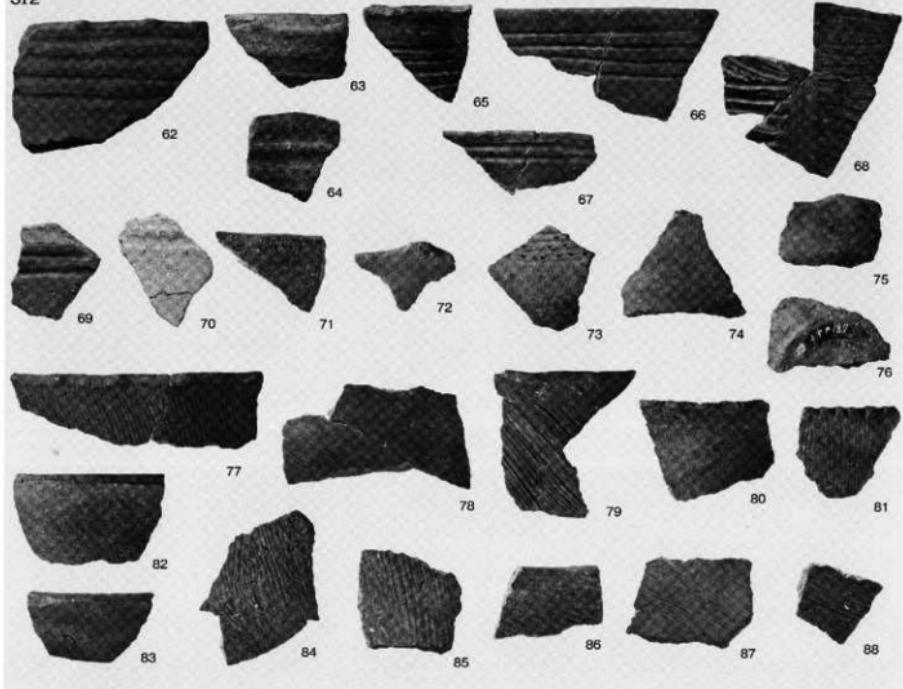


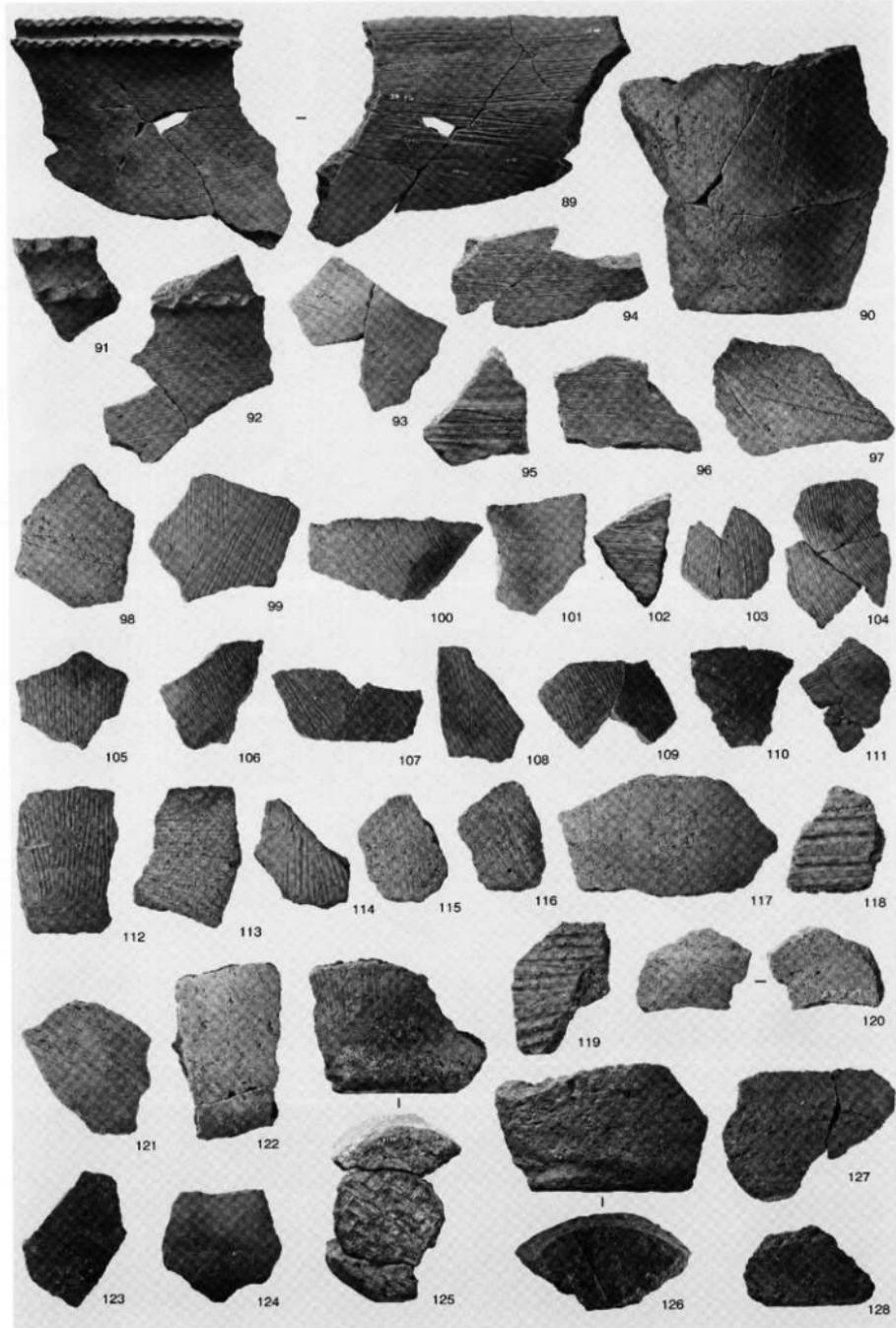
B区 旧河道



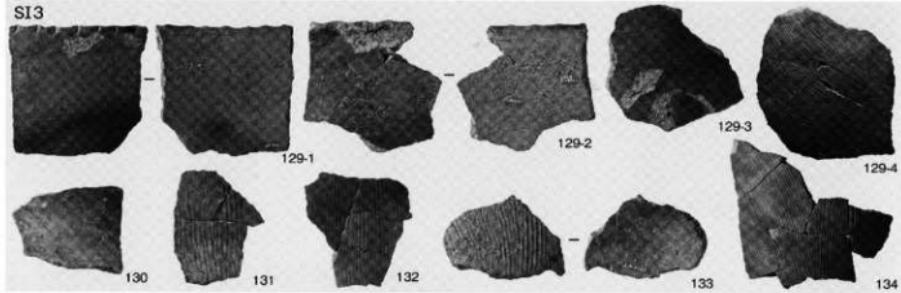


SI2

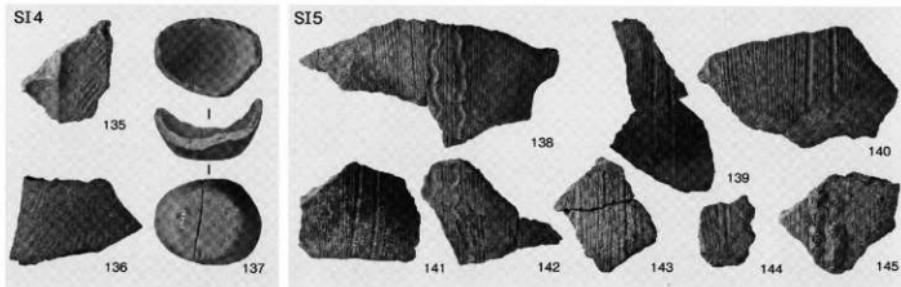




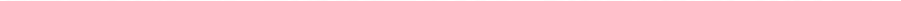
SI3



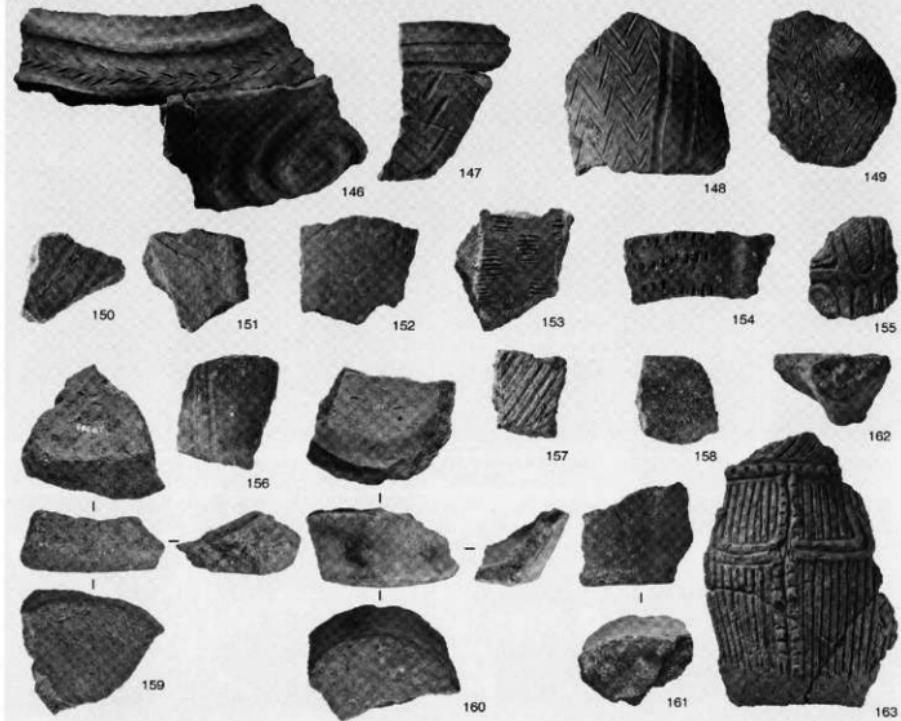
SI4



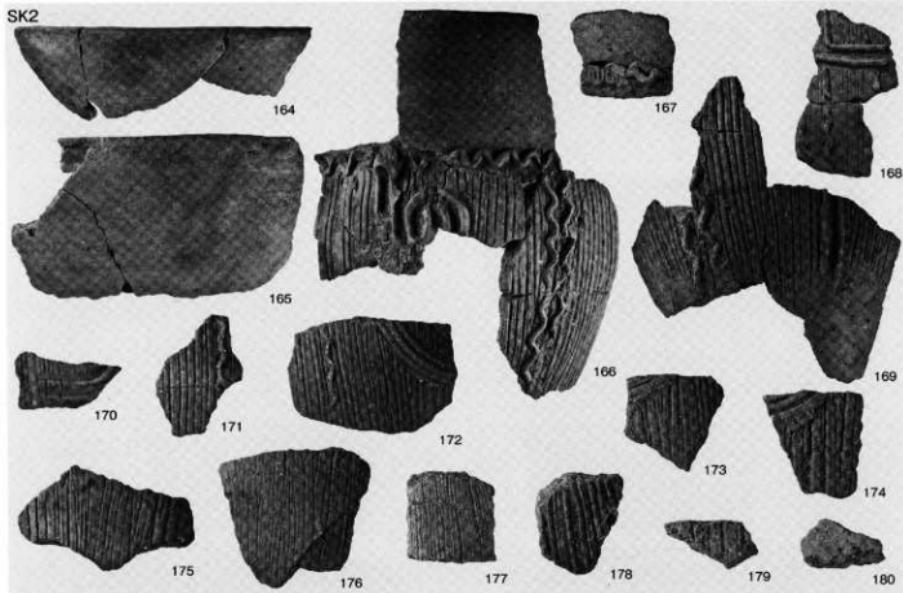
SI5



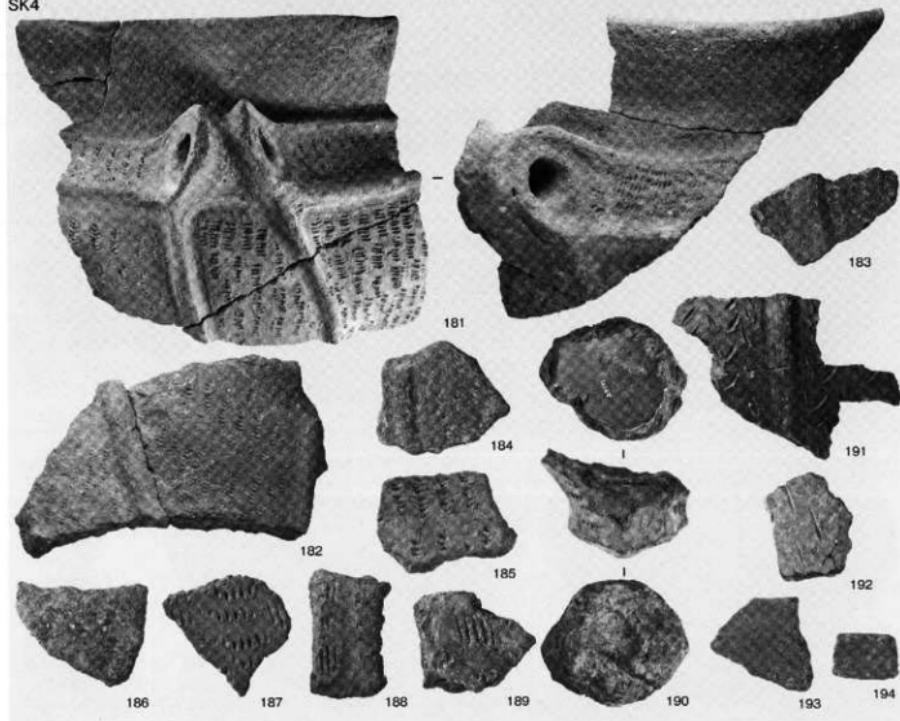
SK1



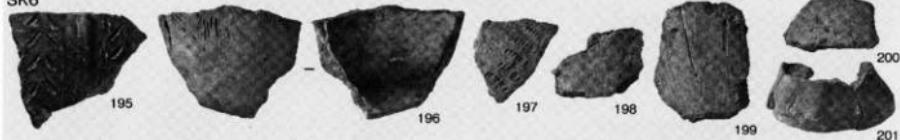
SK2



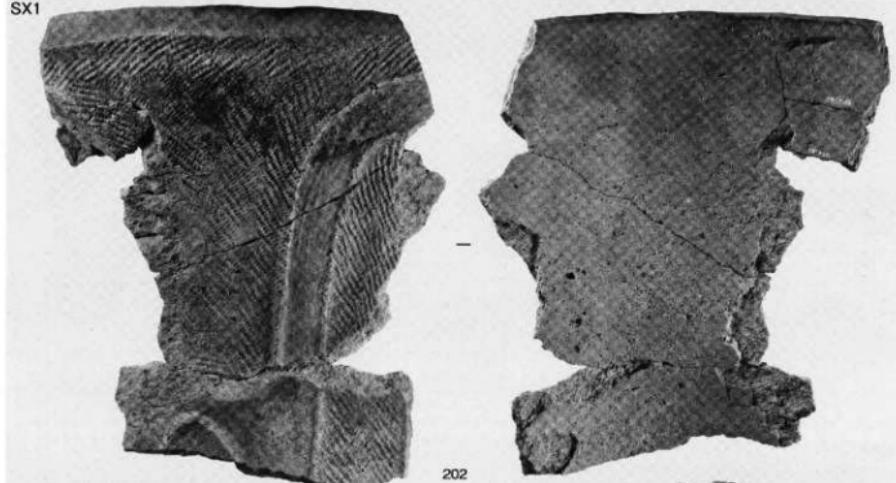
SK4



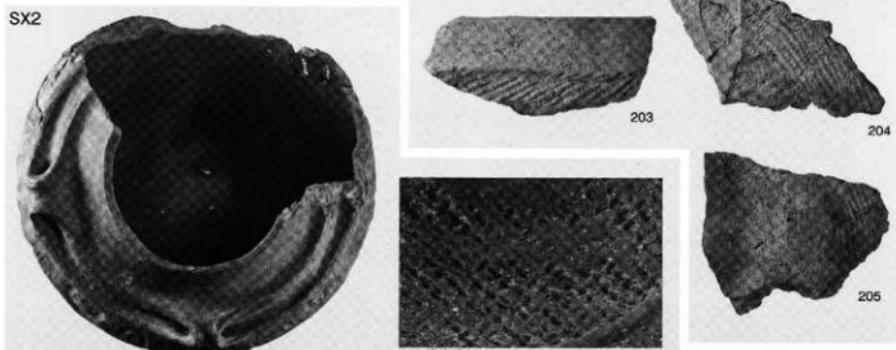
SK6



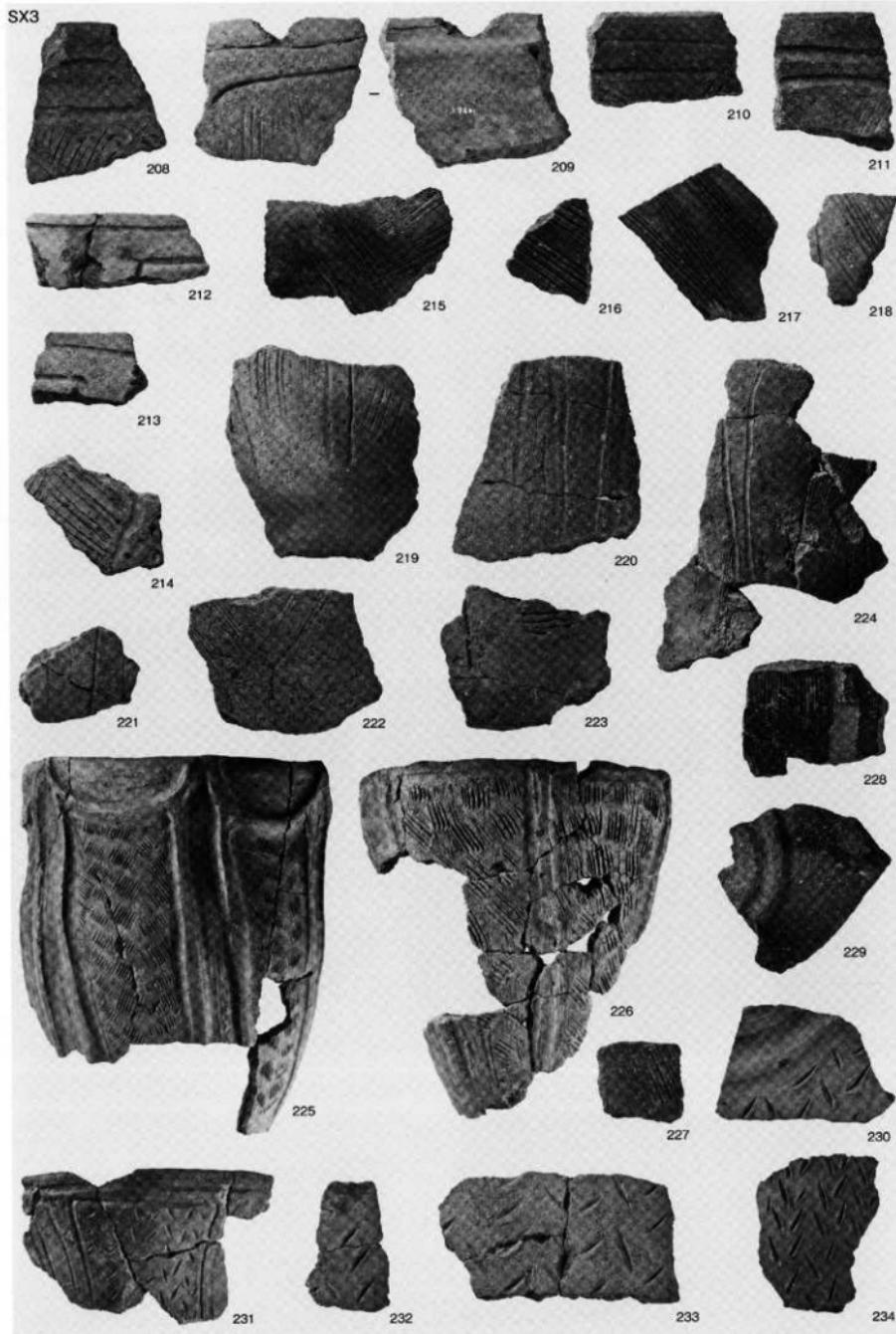
SX1

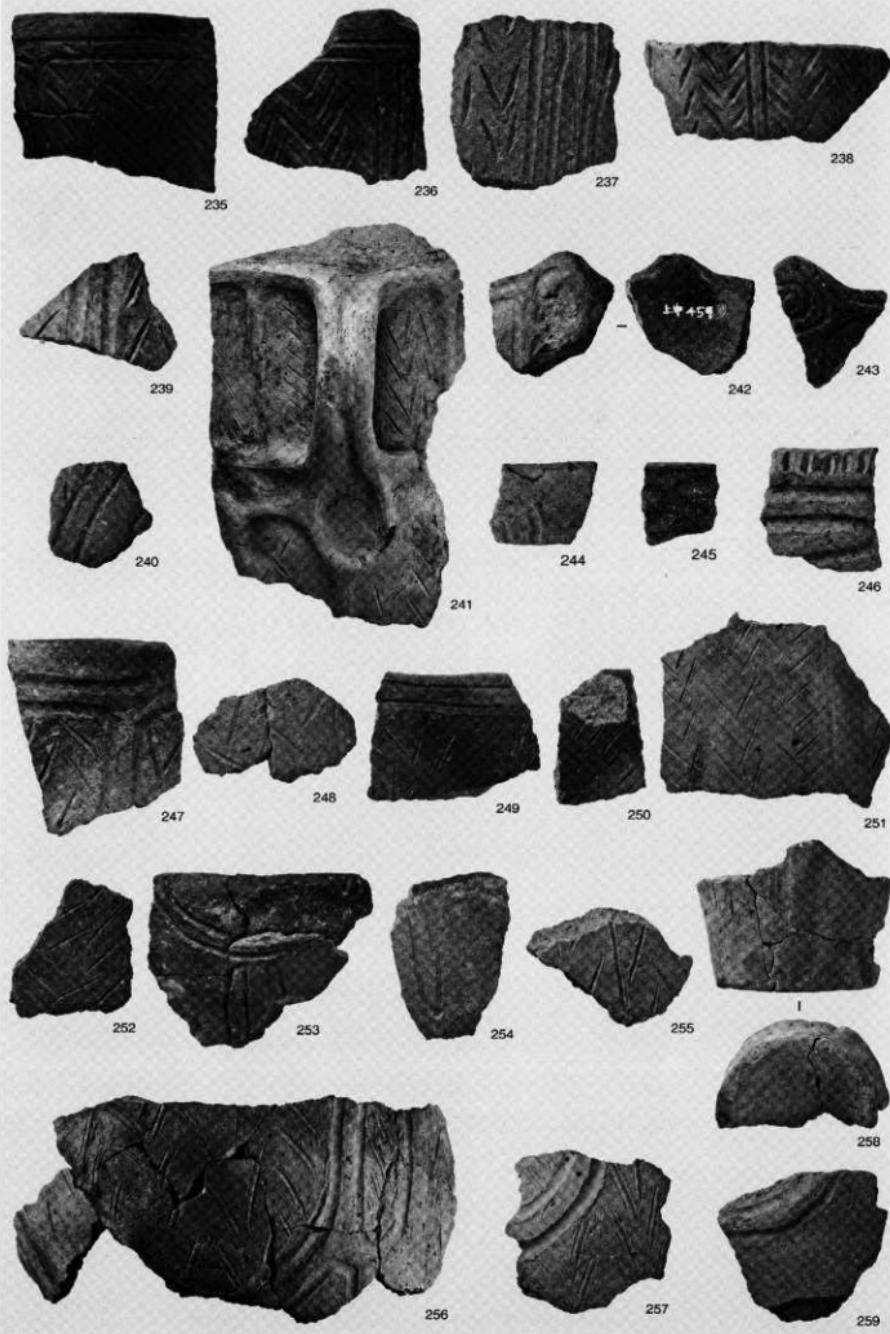


SX2

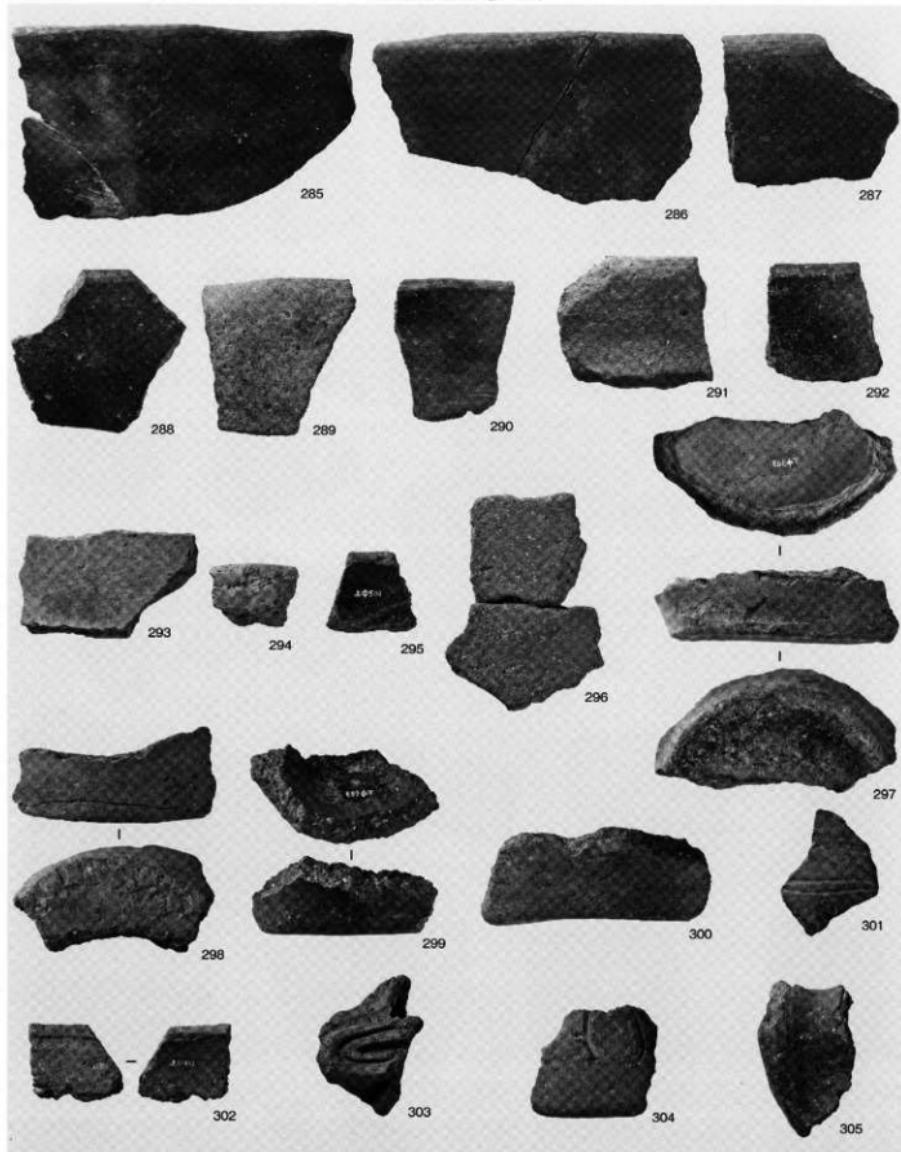


SX3

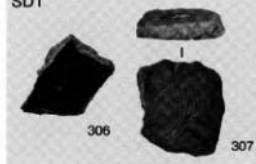








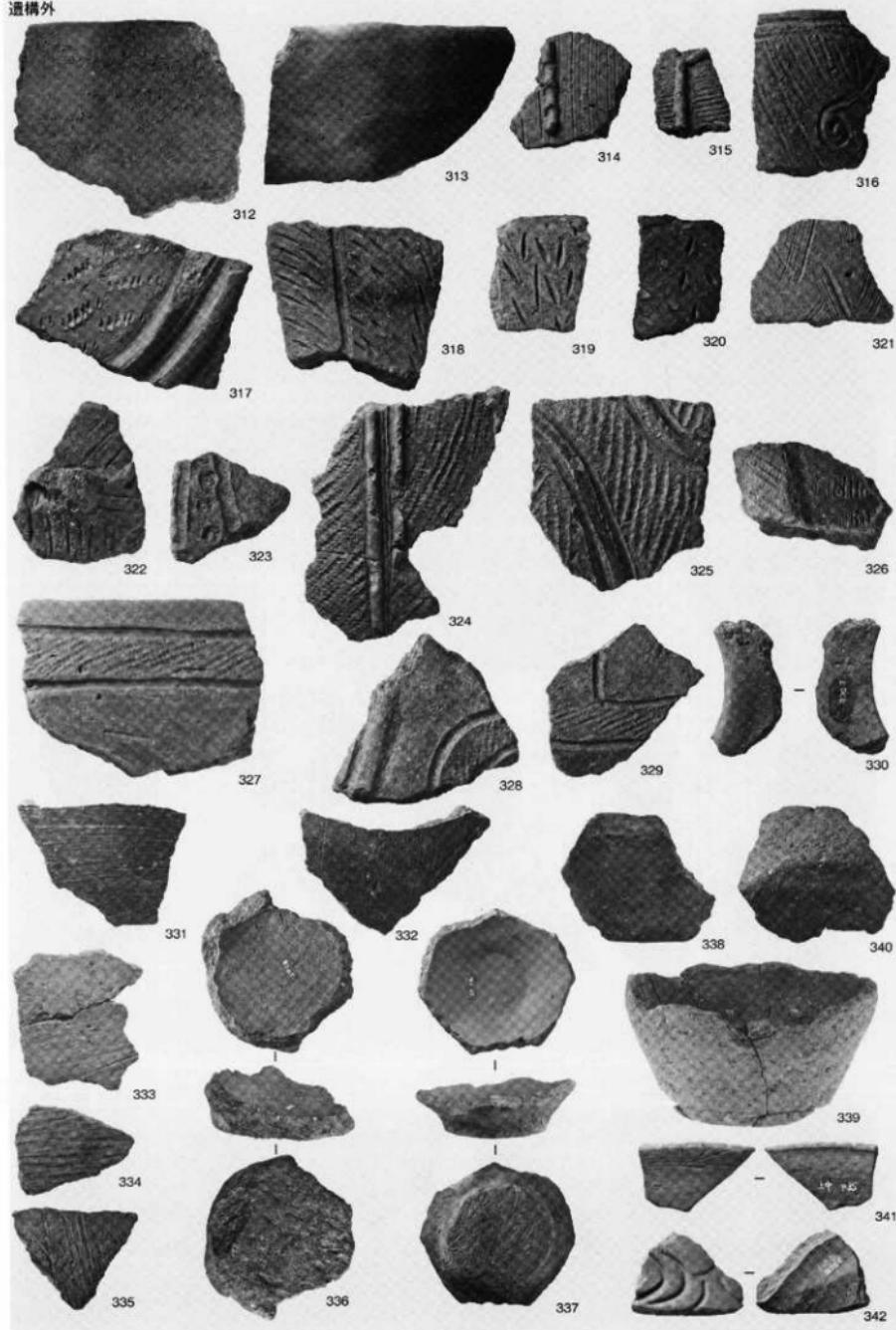
SD1



SD4



遺構外



SI3



343

SI3



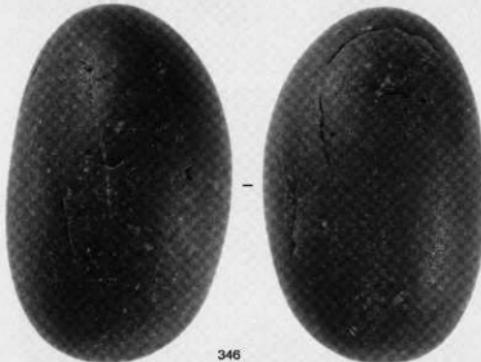
344

B区旧河道



345

C区遺構外



346

A区



347

B区旧河道



348

SI2 撞亂内



349

A区表土



350

C区遺構外 火山彈



報告書抄録

ふりがな	かみなかまるいせき								
書名	上中丸遺跡（第2次）								
副書名	中丸地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	富士吉田市文化財調査報告書 第9集								
著者名	望月秀和 松元美由紀 高橋 敦 中山誠二								
発行者	富士吉田市・富士吉田市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所								
編集機関	公益財団法人山梨文化財研究所								
住所・電話	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL055-263-6441								
印刷日	平成24年9月1日								
発行日	平成24年9月15日								
所在地	山梨県富士吉田市小明見								
位置	北緯35度49分84秒 東経138度82分90秒								
標高	728m								
市町村コード	19202								
調査原因	中丸地区土地区画整理事業に伴う道路建設								
調査期間	平成23年8月7日～11月16日								
調査面積	約619m ²								
遺跡概要	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 2px;">主な時代</td><td style="padding: 2px;">縄文時代中期後半、弥生時代前期後葉、平安時代、中・近世</td></tr> <tr> <td style="padding: 2px;">主な遺構</td><td style="padding: 2px;">竪穴住居跡、土坑、ピット、溝跡</td></tr> <tr> <td style="padding: 2px;">主な遺物</td><td style="padding: 2px;">縄文時代中期後半の土器・石器、弥生時代前期の土器・石器、平安時代の土師器・灰陶器</td></tr> <tr> <td style="padding: 2px;">特記事項</td><td style="padding: 2px;">縄文時代中期後半、弥生時代前期後葉の住居跡の検出および古墳時代に流出した檜丸尾第1溶岩流の堆積状況を確認。</td></tr> </table>	主な時代	縄文時代中期後半、弥生時代前期後葉、平安時代、中・近世	主な遺構	竪穴住居跡、土坑、ピット、溝跡	主な遺物	縄文時代中期後半の土器・石器、弥生時代前期の土器・石器、平安時代の土師器・灰陶器	特記事項	縄文時代中期後半、弥生時代前期後葉の住居跡の検出および古墳時代に流出した檜丸尾第1溶岩流の堆積状況を確認。
主な時代	縄文時代中期後半、弥生時代前期後葉、平安時代、中・近世								
主な遺構	竪穴住居跡、土坑、ピット、溝跡								
主な遺物	縄文時代中期後半の土器・石器、弥生時代前期の土器・石器、平安時代の土師器・灰陶器								
特記事項	縄文時代中期後半、弥生時代前期後葉の住居跡の検出および古墳時代に流出した檜丸尾第1溶岩流の堆積状況を確認。								
要約	富士火山起源の堆積層に埋もれていた縄文時代中期後半から平安時代までの遺構・遺物を検出した。溶岩や火山灰の堆積によって遺跡の分布状況が不明瞭であった地域においても、断続的ではあるが居住域として利用してきた痕跡が明らかとなった。とくに縄文時代中期後半には安定した土層面が確認されたことから、周辺地域においても、火山灰層下に遺構が遺存している可能性が示唆される。								

富士吉田市文化財調査報告書 第9集

上中丸遺跡（第2次）

中丸地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年9月15日 発行

編集・発行	富士吉田市	
	〒403-0004 富士吉田市下吉田1842	Tel 0555-22-1111
	富士吉田市教育委員会 歴史文化課	
	〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田2288-1 富士吉田歴史民俗博物館内	Tel 0555-24-2411
	公益財団法人 山梨文化財研究所	
	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566	Tel 055-263-6441

